

2018（平成30）年度

教 育 と 研 究

久留米信愛短期大学

目次

教授

関 啓	···	3
阿久根 瞳子	···	13
椎山 克己	···	23
山下 絹子	···	33
原 輝美	···	49
山村 滌子	···	61
石井 紗子	···	79
安藤 康治	···	91
江越 和夫	···	103

准教授

高部 真紀子	···	115
池田 可奈子	···	127
重永 茂	···	139

講師

新井 真実	···	149
増田 攝子	···	163
内野 香	···	173

助教

板田 万代	···	183
-------	-----	-----

助手

岡 輝美	···	196
眞谷 曙美	···	201
高松 幸子	···	206

教員研究会資料

学生の授業評価に基づく優秀科目	···	213
公開授業実施一覧	···	215

所属学科	職名	氏名
幼児教育	学長	関 雅
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
教育原理	幼児教育学科1年	幼稚園免許必修
モンテッソーリ教育Ⅰ	幼児教育学科2年	保育士選択必修
モンテッソーリ教育Ⅱ	幼児教育学科3年	保育士選択必修
研究分野		
1. 教育哲学の分野		
修士論文いらい生涯のテーマである教育活動及び教育学の独自性に関する研究である。教育という人間の営みについて、その領域独自の論理があるという仮説に基づき、教育的思考・教育的問題・教育的価値等について研究している。		
2. 保育者養成の分野		
保育士及び幼稚園教諭の養成に関して、カリキュラム論を中心に研究している。本学の保育者養成に寄ること、地域の保育の質の向上につながることを企図に置いて研究を進めている。		
3. カトリック保育の分野		
カトリック保育とはなにか。その理念・実践・保育者養成について、カトリック短期大学で保育者養成に携わる者として研究を進めている。「信愛保育の創造」をテーマにしたい。		
4. モンテッソーリ教育の分野		
モンテッソーリ教育に関する理論的研究。モンテッソーリ教育Ⅰについて、その成立過程、教育理論、教育方法、現職教育などについて研究を行っている。		
5. 保育現場との共同研究の分野		
平成23年度から信愛幼稚園教育において、年長クラス男児に創造の指導を行っている。小学生以上の少年創造の指導に関しては、いくつかの先行研究及び指導書があるが、幼稚園児指導の研究は見当たらない。信愛幼稚園との共同研究を進めたい。		
6. 大学教育の分野		
大学教育の改革について文部科学省のプロジェクトに沿って研究を行なっている。これまで、「地域参画型短期大学教育」「卒業生のマンパワーを活用したキャリア教育」「10年間継続した就職力育成教育」「地域力を生む自律的職業人育成プロジェクト」等について研究・実践を行ってきた。		
7. カトリック教育の分野		
高等教育におけるカトリック教育の意義と実践について、学生として取り組んでいきたい。独立団体である「ショファイユの幼きイエズス修道会」の理念及び本学の建学の精神の理解とともに、学生への信愛教育のあり方を省察しながら実践したい。		

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. 教育哲学に関する研究

西洋教育思想について研究を行った。『新・教育学のグランドデザイン』(丸善)八千代出版、第 2 章「教育の基礎理論」の改訂作業中である。

2. モンテッソーリ教育に関する研究

①理論研究 モンテッソーリ教育の成立過程について研究する。とくにモンテッソーリ周囲の発展・展開の経緯に注目し、モンテッソーリ教育の日本化・現代化の道を探った。

②実践研究 現場保育者の力量の向上について論じ、その研究をもとに、現場のモンテッソーリ教師の講習・リガレント教育を始めた。また、カトリック幼稚園の保護者を対象にモンテッソーリ教育の研修を実施した。

③翻訳 平成 3 年に『新しい世界のための教育』モンテッソーリ著を翻訳し、エンデル書店から出版したが、平成 30 年度に新訳を青土社から出版した。

3. 現場との共同研究

久留米修愛女学院幼稚園において実施している幼稚園側道の指導について研究を始めた。竹刀操作の技術向上だけでなく、年長児の集中力・適度運動・忍耐力など心身の両面から少年側道の意義を探った。

4. 子育て支援に関する研究

子育て支援についての研究を行った。とくに現代の育児に必要な子ども観の形成、ファミリーサポート事業に必要とされる人権意識、カトリックに基づいた人間觀を論じ、その成果を「ファミリーサポートセンターくるめ」による活動に生かした。

5. カトリック教育の分野

高等教育におけるカトリック教育の意義と実践について、学長として取り組んだ。独立母体である「ショファイユの幼きイエヌ修道会」の理念及び本学の建学の精神の醸造の方法を追究している。さらにカトリック保育の意義と実践及びカトリック保育の実践者養成に取り組んでいる。

平成 30 年度の研究の成績

(著書)

1. 「新しい世界のための教育」 M. モンテッソーリ著 青土社 単独翻訳 平成 30 年 10 月
(司会)

平成 29 年度及び 30 年度の研究の成果

(著書)

1. 「新・教育学のグランドデザイン」 共著 平成 29 年 3 月 八千代出版 (9~21)

(評論)

1. 「論理 安倍内閣の『地方創生』への要望・期待 私学領域に社会貢献活動の導入等要望」 単著 平成 29 年 2 月『全私学新聞』第 2369 号

(書評)

1. 「現代に生きるマリア・モンテッソーリの教育思想と実践」 単著 平成 29 年 3 月『モンテッソーリ教育』第 48 号 日本モンテッソーリ協会 (学芸)

(司会)

1. 「研究発表」 平成 29 年 8 月 日本モンテッソーリ協会 (学芸) 全国大会 研究発表・司会
2. 「研究発表」 平成 29 年 8 月 日本モンテッソーリ協会 (学芸) 全国大会 研究発表・司会
3. 「研究発表」 平成 29 年 10 月 日本幼児教育学会全国大会 研究発表・司会

本教員の主たる研究の成果（5編以内）	
(著書)	
1.『新しい世界のための教育』M. モンテッソーリ著 喜士社 単行翻訳 平成30年10月 2.『教育方法技術』著者 八千代出版 平成5年3月 3.『教育原理』著者 保育出版 平成12年4月 4.『モンテッソーリ教育用語辞典』共著 学蔵社 平成18年10月 5.『新・教育学のグランドデザイン』共著 八千代出版 平成29年1月	
所属学会お上げ参加実況	
所属学会	参加状況および役職等
日本幼児教育学会	学会誌『幼児教育研究』の編集委員を務めている。 平成30年度の全国大会は学校行事のため不参加だった。
日本モンテッソーリ協会（学会）	協会（学会）理事を務めている。 学会誌『モンテッソーリ教育』の編集委員を務めている。 『E.ルーメル学術奨励賞』の選考委員を務めている。 平成30年度は全国大会（於：福島）に参加し、研究発表の司会を務めた。
日本カトリック教育学会	大会等は不参加であった。
令和元年度 研究計画	
1. 教育哲学に関する研究 西洋教育思想について研究する。『新・教育学のグランドデザイン』（著者）八千代出版、第2章「教育の諸理論」の改訂作業中である。	
2. モンテッソーリ教育に関する研究 モンテッソーリ教育の成立過程について研究する。とくにモンテッソーリ用語の発展・展開の経緯に注目し、モンテッソーリ教育の日本化・現代化の道を探りたい。現場保育者の力量の向上について論じ、その研究をもとに、現場のモンテッソーリ教師の講習を実施する。また、モンテッソーリ園の保護者への講習も依頼されている。	
3. 現場との共同研究 久留米修愛女学院幼稚園において実施している幼稚園創造の指導について研究を進める。先行研究を精査するとともに、資料的な基礎から始める。竹刀操作の技術向上だけでなく、平置見の集中力・随意運動・忍耐力など心身の側面から少年剣道の意義を探りたい。その成果を研究ノートにまとめて本学記録にて發表する。	
4. 子育て支援に関する研究 子育て支援についての研究を行う。とくに現代の育児に必要な子ども達の形成、ファミリーサポート事務に必要とされる人権意識、カトリックに基づいた人間観を論じ、その成果を「ファミリーサポートセンターくるめ」による活動に生かす。	
5. 保育者養成に関する研究 保育者養成の今日的課題について研究し、本学の保育者養成の適度化の一助となればと考えている。	
6. カトリック教育の分野 高等教育におけるカトリック教育の意義と実践について、学長として取り組んでいきたい。設立母体である「ショファイユの幼きイエズス修道会」の理念及び本学の健学の精神の理解とともに、学生への信愛教育のあり方を省察しながら実践したい。	

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

学生の発展的学習態度を形成する。

問2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。

平成29年度の教科「教育原理」2.6「モンタッソーリ教育法Ⅰ」「モンタッソーリ教育法Ⅱ」4.4を、それぞれ2ポイントアップする。

・質問しやすい雰囲気を形成する。

・保護者になる使命感を自覚めさせる。

・参考文献等を紹介する。

・ミニッジペーパーを利用する。

・到達度や理解度を確認する。

・名前を呼んで質問する。

相当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
教育原理	AA:5名, A:42名, B:15名, C:6名, D:4名	3.53
モンタッソーリ教育法Ⅰ	AA:4名, A:31名, B:7名, C:1名, D:0名	3.78
モンタッソーリ教育法Ⅱ	AA:4名, A:3名, B:2名, C:4名, D:0名	3.53

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
教育原理	幼稚教育学科1年	幼稚園免許必修

問1B の総合評価は前年度 4.0 から 4.4 に 4 ポイント向上した。
 今年度の FD 宣言である「問2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした」は 2.6 から 3.3 に 7 ポイント向上した。学生の発展的学習態度がどこまで身についたかは不明だが 7 ポイントの向上は評価できる。ほとんどすべての質問項目で前年度から高い評価になっており、授業内容・方法の改善というより教育的関係の改善の流れとも理解できる。
 評価が 4.0 未満の問い合わせは「問1 私は居眠り・承認・メールをしなかった 3.9」と「問2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした 3.3」の 2 項目である。もう古に引き上げたい。

授業についての自己評価	→できた できなかつた←
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4) - 3 - 2 - 1
教授内容が実際の社会や実験場面でどのように機能しているかを教えた	5 (4) - 3 - 2 - 1
自身の研究活動での具体的な結果等を通じて教授・指導した	5 - 4 (3) - 2 - 1
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 - 4 - 3 (2) - 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 - 4 - 3 (2) - 1
定期的な授業評価を実施した	5 - 4 (3) - 2 - 1

次年度の FD 宣言と教育力向上に向けての計画	学生の授業態度・学習意欲の向上。
	「問1 私はこの授業中、居眠り・承認・メールをすることが少なかつた」の評価を 3.9 から 4.0 以上に引き上げる。学生のモチベーションを引き出すよう授業内容・方法を工夫したい。つねに学生との双方性を意識して居眠り等のない授業を心がけたい。ただし例年この科目は月曜 3 時限（星夜授）に配属されるのでハンドディではあるが、全体の目標として、総合評価 4.4 を 4.5 まで引き上げる。

科目名	対象	必修・選択
モンティゾーリ教育法Ⅰ	幼稚教育学科2年	保育士資格認定必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		問16の総合評価は前年度4.7から4.9に2ポイント向上した。 今年度のFD宣言である「問2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした」は4.0から3.8に2ポイント低下した。例年よりも履修者が多かったのが影響したのかかもしれないが、学生の発展的学習態度の形成という目標が達成できなかった。 評価できる点としては、「問14 先生は態度を持って授業を行っていた」「問15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念をもって、授業を行っていた」の二つの問い合わせが3.0であるとこと、「問1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった」の問い合わせが4.9であること。 この科目は学修意識の高い学生が履修するので授業がしやすく、理解度も高い。これからも高い評価を維持していきたい。
授業についての自己評価		~できた できなかつた~
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 ≈ 4 ≈ 3 ≈ 2 ≈ 1	
教授内容が施設の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 ≈ 4 ≈ 3 ≈ 2 ≈ 1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	3 ≈ 4 ≈ 3 ≈ 2 ≈ 1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 ≈ 4 ≈ 3 ≈ 2 ≈ 1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 ≈ 4 ≈ 3 ≈ 2 ≈ 1	
厳格な授業評価を実施した	5 ≈ 4 ≈ 3 ≈ 2 ≈ 1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		学生の発展的学習態度を形成する。 「問2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした」の評価を3.8から4.0に引き上げる。より質問しやすい雰囲気を形成する。モンティゾーリ教育についての興味・関心を高める工夫をする。学生の名前を呼んで指名・發問を行う。 総合評価を4.9から5.0に引き上げる。 平成元年度の履修者は例年よりもかなり少ないでの授業の質の向上が期待できる。上り上い教育的関係が成立できれば5.0の総合評価も不可能ではない。
科目名	対象	必修・選択
モンティゾーリ教育法Ⅱ	幼稚教育学科2年	保育士資格認定必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		問16の総合評価は前年度4.7から4.8に1ポイント向上した。 今年度のFD宣言である「問2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした」は4.4から変動はなかった。学生の発展的学習態度の形成という目標が達成できなかった。本授業は2年生の後編であり、とくにモンティゾーリ園に就職する学生には最後の仕上がりになる。より教育効果の高い授業が求められる。 評価できる点としては、すべての質問項目で3.5未満の評価はなく全体として学生の成長の質証がなされた科目であるといえる。 この科目は学修意識の高い学生が履修するので授業がしやすく、理解度も高い。卒業前の仕上げ科目としても、これからも高い評価を維持していきたい。

授業についての自己評価	→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 - 4 () 3 - 2 - 1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 - 4 () 3 - 2 - 1
自身の研究活動での具体的な成果等を通して教授・指導した	5 - 4 () 3 - 2 - 1
KOT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 - 4 () 3 - 2 - 1
面取り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 - 4 () 3 - 2 - 1
個別化授業評価を実施した	5 - 4 () 3 - 2 - 1
次年度の PD 宣言と 教育力向上に向けての計画	<p>学生の発展的学習態度を形成する。</p> <p>「問 2 私はわからない問題には質問したり、自分で調べたりした」の評価を 4.4 から 4.5 に引き上げる。より質問しやすい雰囲気を形成する。モンタッソーリ教育についての興味・関心を高める工夫をする。学生の名前を呼んで指名・発問を行う。</p> <p>総合評価を 4.8 から 4.9 に引き上げる。</p> <p>平成元年度の履修者は何年よりもかなり少ないので授業の質の向上が期待できる。よりよい教育的関係が成立できれば 4.9 の総合評価も不可観ではない。</p> <p>モンタッソーリ園への就職者が減少傾向にある。信愛幼稚園をはじめとくにエトリック園への就職のケアを授業内で行っていきたい。</p>

平成 30 年度 社会的活動報告

講演等

題名	開演年月日	主催者	場所
子どもを見る目・子どもの人権	平成 30 年 5 月 25 日	アッソリート久留米	くるるん
子どもを見る目・子どもの人権	平成 30 年 9 月 4 日	久留米市子ども未来部	くるるん
子どもを見る目・子どもの人権	平成 31 年 2 月 5 日	久留米市子ども未来部	くるるん
モンティソーリ教育の基本	平成 30 年 5 月 11 日	久留米信愛幼稚園	久留米信愛幼稚園
モンティソーリ教育とは	平成 30 年 6 月 17 日	八幡カトリック幼稚園	八幡カトリック幼稚園

他団体等への協力

協力内容	協力期間	協力先
久留米市東京オリンピック・パラリンピック キャンプ等実行委員会 委員		久留米市
久留米市学術研究都市づくり推進協議会 委員	平成 30 年 4 月 1 日～	久留米市
高等教育コンソーシアム久留米 理事	平成 31 年 3 月 31 日	コレソーシアム久留米
九州地区私立短期大学協会 監事		九州地区短期大学協会
久留米市剣道連盟 監事		久留米市剣道連盟

他大学への非常勤等

科目名	期間	出向先
教育学	平成 30 年 6 月 1 日～ 平成 30 年 9 月 23 日	八女筑後看護高等専門学校

その他特記事項

内容	年 月 日
○少年剣道指導 久留米市スポーツ少年団指導 久留米信愛女子学院幼稚園指導	平成 30 年 4 月 1 日～ 平成 31 年 3 月 31 日

令和元年度 社会的活動計画

○講演等

久留米市子ども未来部の依頼によるもの。3 回程度
モンティソーリ教育に関する研修研修会及び保護者講演会。2 回程度

○他団体等への協力

久留米市東京オリンピック・パラリンピックキャンプ等実行委員会 委員
久留米市学術研究都市づくり推進協議会 委員
高等教育コンソーシアム久留米 理事
九州地区私立短期大学協会 監事
久留米市剣道連盟 監事

○他大学への非常勤

八女筑後看護高等専門学校

○少年剣道指導

久留米市スポーツ少年団指導
久留米信愛女子学院幼稚園指導

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

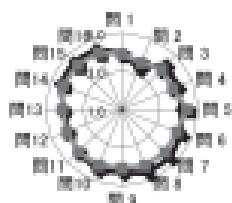
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、頭脳リ・私語・メールをすることが少なかった。
- 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
- 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
- 問 4 私はこの授業に関して、さらに頑んだ勉強をしたいと思う。
- 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
- 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
- 問 7 両回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
- 問 8 先生の話し方並明確で、聞き取りやすかった。
- 問 9 先生の板書の仕方や視聴覚機器（プロジェクタなど）の利用が効果的であった。
- 問 10 教科書、参考書、配り資料（プリント、楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
- 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
- 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
- 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
- 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
- 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
- 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

5. そう思う
4. どちらかといえばそう思う
3. どちらともいえない
2. どちらかといえばそう思わない
1. そうは思わない

教育原理

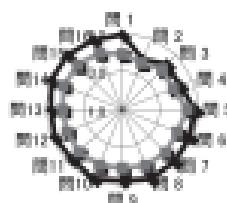
問 16 4.4



→教科平均 ←学科平均

モンテッソーリ教育法Ⅰ

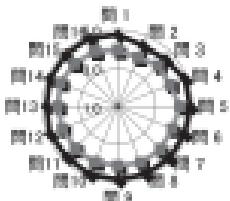
問 16 4.9



→教科平均 ←学科平均

モンテッソーリ教育法Ⅲ

問16～48



—■—教科平均 —■—学科平均

問17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。

科 目 名	0 分	1～30 分	31～60 分	61～90 分	91 分以上
教育原理（幼1）	38	17	4	3	0
モンテッソーリ教育法Ⅰ（幼2）	9	9	3	1	0
モンテッソーリ教育法Ⅲ（幼2）	4	4	2	1	1

問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技術の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）

科 目 名	予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
教育原理（幼1）	2	11	16	7	4	26
モンテッソーリ教育法Ⅰ（幼2）	1	2	18	0	0	3
モンテッソーリ教育法Ⅲ（幼2）	1	1	0	0	1	3

所属学科	職名	氏名	
幼稚教育	教授	阿久根 政子	
担当科目			
科目名	対象	必修・選択	
英語Ⅰ・Ⅱ 英語Ⅲ・Ⅳ 信愛教育Ⅰ・Ⅱ チャイルドプロジェクト	幼稚教育学科1年 フードデザイン学科1年 幼稚・フード2年 全学科・全学年全クラス 幼稚教育学科2年	卒選必・免許・資格選必修 卒選必・免許・資格選必修 卒業必修 卒業必修	
研究分野			
1. イギリス文学の分野 イギリス文学に現れたキリスト教的要素及び聖書的イメージに関する研究を行い、作品における作者の宗教性についての研究を行う。			
2. カトリック教育の分野 カトリック学校の立場からカトリック教育はいかにあるべきか、大学における教育者のあるべき姿を構築研究。			
3. 稲本・民話と宗教（特にキリスト教）の分野 稻本や民話の中に詰められた宗教性の研究及び子どもの宗教教育の研究。			

平成 30 年度 研究報告	
平成 30 年度の研究の概要	
<p>チャールス・ディケンズの『The Life of Our Lord』に関する継続研究を行った。</p> <p>『わが主の生涯』におけるディケンズのキリスト教世界観</p>	
平成 30 年度の研究の成果	
<p>〈論文〉『わが主の生涯』におけるディケンズのキリスト教世界観 単著 『久留米偕愛短期大学紀要第 42 号』に投稿</p>	
平成 29 年度及び 30 年度の研究の成果	
<p>〈論文〉『クリスマス・キャロル』における聖書の役割 単著 『久留米偕愛女子学院短期大学紀要第 39 号』 平成 28 年 1 月</p>	
本教員の主たる研究の成果（8編以内）	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 『ニューマンの思想と活動』 L.F. バーマン著 単独翻訳 中央出版社 平成 28 年 4 月 2. 『『The Selfish Giant』における聖書的イメージ』 単著 『キリスト教文学 4 号』 昭和 29 年 6 月 3. 『『獄中記』におけるワイルドのキリスト像』 単著 『久留米偕愛女子学院短期大学紀要第 33 号』 平成 28 年 9 月 4. 『ワイルドと聖書――『獄中記』におけるワイルドの福音書注釈』 単著 『久留米偕愛女子学院短期大学紀要第 34 号』 平成 28 年 9 月 5. 『クリスマス・キャロル』における聖書の役割 単著 『久留米偕愛女子学院短期大学紀要第 39 号』 平成 28 年 1 月 	
所属学会おおよび参加状況	
所属学会	参加状況おおよび役職等
大学英語教育学会 日本国トリック教育学会 日本キリスト教文学会	全国大会参加 全国大会参加 全国大会不参加
令和元年度 研究計画	
<p>チャールス・ディケンズの作品における「子ども権」に関する研究</p>	

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

【目標】

毎時間の授業の目的を明確にして、学生のレベルに合わせた授業を行う

担当科目的成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
英語 I	AA：11名、A：6名、B：9名、C：9名、D：0名	3.6
英語 II	AA：8名、A：7名、B：10名、C：8名、D：0名	3.5
英語 III	AA：1名、A：1名、B：1名、C：1名、D：0名	3.2
英語 IV	AA：0名、A：1名、B：1名、C：0名、D：0名	3.5
督愛教育 I	AA：37名、A：78名、B：31名、C：21名、D：0名	3.8
督愛教育 II	AA：25名、A：77名、B：31名、C：31名、D：0名	3.6
チャイルドプロジェクト	AA：1名、A：1名、B：4名、C：1名、D：0名	3.3
	AA：名、A：名、B：名、C：名、D：名	
	AA：名、A：名、B：名、C：名、D：名	

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
英語 I	幼稚教育学科・フード1年	卒業必・免許・資格選必修
学生の授業評価を踏査えた 自己評価	英語Iでは、学生のレベルが全体的に把握しきにくく、授業速度が少し早めだった傾向があった。 総合評価：フード(3.3) 幼教(3.6)	

授業についての自己評価	→できた できなかっただけ
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4 (3)・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを積めた	5・4・3 (2)・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4 (3)・2・1
ICT等を用いた車両型・発信型・実践型のアタディブラーコーニングを取り入れた	5・4 (3)・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の理解度を確認しながら授業を行った	5・4 (3)・2・1
厳格な授業評価を実施した	(3)・4・3・2・1

次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	学生のレベルに応じた授業を行う
---------------------------	-----------------

科目名	対象	必修・選択
英語 II	幼児教育学科・フード1年	卒業必・免許・資格選必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		高語IIでは、英語Iの継続授業のため、学生の評価を参考にしながらクラスごとに授業の速度を変えたりした結果、授業の進め方や速さにも慣れできにもかかわらず、総合評価にはあまり変化はなかった。 フード(3. 8) → 0. 6ポイント上昇 幼教(3. 6) → 0. 3ポイント下降
授業についての自己評価		一できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		⑤・4 (3)・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを試えた		⑤・4・3 (2)・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		⑤・4 (3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアタティブラーーニングを取り入れた		⑤ (4)・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		⑤ (4)・3・2・1
動格な授業評価を実施した		⑤・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		総合評価(3. 8)に向けて、分かりやすい授業を行う。
科目名	対象	必修・選択
英語 III	幼教・フード2年	卒業必・免許・資格選必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		高語 I・IIとは異なり、4大園入学生のための授業を行うために、フランス語I・IIを削除し、英語Ⅲを履修する学生には少し難しかった。 総合評価 (3. 8) 難しいことを楽しく教えることに専念することを目指したい。
授業についての自己評価		一できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		⑤・4 (3)・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを試えた		⑤・4・3 (2)・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		⑤・4 (3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアタティブラーーニングを取り入れた		⑤・4 (3)・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		⑤ (4)・3・2・1
動格な授業評価を実施した		⑤・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		高度なアキストを用いて、分かりやすく説明する

科目名	対象	必修・選択
英語 W	幼稚・pedo2年	卒業必・允許・資格認必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		4大脳入学生のための授業を行うために、アランス厨I・IIを受講してきた学生にとって、英語力を磨く学生には少し難しい授業であったが、英語習では、理解力も向上した。 総合評価 (3. 8) → (6. 0) (1. 2) 上昇
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (2) 3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた		5・4・3 (2) 1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4 (3) 3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 (4) 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5 (4) 3・2・1
厳格な授業評価を実施した		(5) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	学生が自分で、実際に取り組むことのできる力を身に着ける授業を行う。	
科目名	対象	必修・選択
チャイルドプロジェクト	幼児教育学科2年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		実務に興味のある学生たちで、各自の力に応じた作品とテーマを自由に選び、英語の繪本から、それぞれ個性にあった作品が出来上がった。発表力が欠けていたのは、練習不足のためであった。 総合評価 (4. 5) で学生はそれなりに満足していた
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 (4) 3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた		5・4 (2) 3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5 (4) 3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 (4) 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4 (3) 3・2・1
厳格な授業評価を実施した		(5) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	学生の創造性と探求心が身につく指導を目指す。	

平成30年度 社会的活動報告

講演等

題名	講演年月日	主催者	場所

施設体等への協力

協力内容	協力期間	協力先

他大学への評議会等

科目名	期間	出向先

その他特記事項

内容	年 月 日

令和元年度 社会的活動計画

特になし。

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

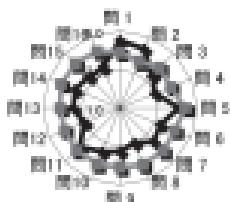
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、困惑や・私語・メールをすることが少なかった。
- 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
- 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
- 問 4 私はこの授業に関して、さらに深んだ勉強をしたいと思う。
- 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
- 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
- 問 7 各回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
- 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
- 問 9 先生の板書の仕方や複数覚憶装置（デジタルなど）の利用が効率的であった。
- 問 10 教科書・参考書・配布資料（プリント・楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
- 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、手始めちゃんと説明があった。
- 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
- 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適時に注意していた。
- 問 14 先生は黙認を持って授業を行っていた。
- 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の意を持って、授業を行っていた。
- 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

- 1. そう思ふ
- 2. どちらかといえばそう思う
- 3. どちらともいえない
- 4. どちらかといえばそう思わない
- 5. そうは思わない

英語 I (第1)

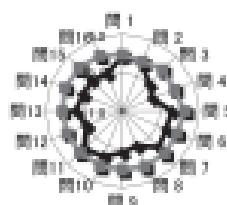
問 16 3.3



■ 教科平均 ■ 学科平均

英語 II (第1)

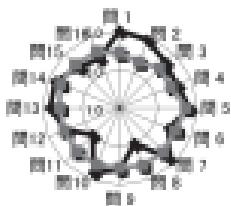
問 16 3.1



■ 教科平均 ■ 学科平均

英語Ⅲ

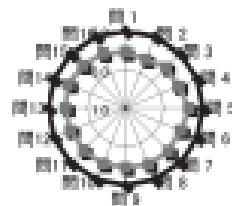
図 16-3.8



■—教科平均 ■—学科平均

英語Ⅳ

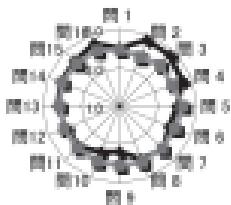
図 16-5.0



■—教科平均 ■—学科平均

チャイルドプロジェクト

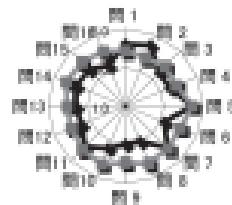
図 16-4.5



■—教科平均 ■—学科平均

英語 I (フ1)

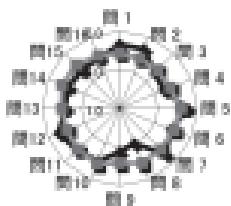
図 16-3.3



■—教科平均 ■—学科平均

英語 II (フ1)

図 16-3.8



■—教科平均 ■—学科平均

		問17 もなたはこの授業のために一週間たり何分学習しましたか。				
科 目 名		0 分	1~20 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
英語Ⅰ（幼1）		11	3	5	0	2
英語Ⅱ（幼1）		10	4	3	2	0
英語Ⅲ		1	1	1	2	0
英語Ⅳ		0	0	0	0	2
チャイルドプロジェクト（幼2）		1	2	0	1	2
英語Ⅰ（フ1）		2	3	3	1	0
英語Ⅱ（フ1）		0	2	2	1	0

		問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技術の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）					
科 目 名		予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
英語Ⅰ（幼1）		0	1	3	10	1	7
英語Ⅱ（幼1）		1	2	9	11	1	5
英語Ⅲ		1	2	0	5	2	0
英語Ⅳ		2	2	2	2	0	0
チャイルドプロジェクト（幼2）		1	1	3	0	1	1
英語Ⅰ（フ1）		1	1	3	4	0	1
英語Ⅱ（フ1）		0	1	5	3	1	0

所属学科	職名	氏名
幼稚教育	教授	樋山克己
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
保育内容表現 音楽表現 器楽合奏 保育・教職実践演習（幼稚園）	幼児教育学科 1 年 幼児教育学科 2 年 幼児教育学科 2 年 幼児教育学科 2 年	卒業選択、免許・資格必修 卒業選択、免許必修、資格選択必修 卒業必修 卒業選択、免許・資格必修
研究分野		
1. 音楽教育の分野		
① 幼児期の音楽教育についての研究。幼稚園教育要領・保育指針に示される概念「表現」の趣意から、教育実践のプログラム研究を行っている。		
② 受楽を通した生徒教育としての音楽教育の研究。スクールバンドを主体としたコミュニケーションによる受楽活動を通して、生徒教育における音楽教育の在り方、受楽指導法について研究を行っている。		
2. 保育者養成の分野		
保育士および幼稚園教諭の養成に関する研究。カトリック保育について、並びに、子育て支援の活動に対する保育者養成校が果たす役割・課題について研究を行っている。		
3. 演奏の分野		
クラリネットの演奏法についての研究。演奏活動を通してクラリネットの奏法、クラリネット作品の研究を行っている。		

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. 音楽教育に関する研究

①幼稚園における音楽教育の指導法、マーチングの指導法についての実践研究を行い、教員免許教員新講習、幼稚園の園外研修において、幼稚園教師に対しての指導を実施した。

②久留米信愛女学院コミュニティー吹奏楽団および久留米児童吹奏楽団の活動を通して、生涯教育における吹奏楽活動に関する実践研究。ならびにマーチング指導に関する実践研究を行った。

2. 保育者養成の分野

①幼稚園以下の幼稚園における音楽教育活動の調査研究（共同研究）を行い、「国際幼児教育研究」に投稿した。

②リトミックを取り入れた幼稚園における幼児の表現活動幼児理解について共同研究を行い、本学研究紀要第 42 号に投稿した。

③保育者養成校における子育て支援について、本学で開催する信愛つどいの店舗事業の状況報告を本学研究紀要第 42 号に投稿した。

3. クラリネットの演奏法についての実践研究を行い、えーるピアくるめの公開講座「音楽を通して触れ合う心の中で演奏発表した。

平成 30 年度の研究の成果

(発表)

1. 「久留米信愛女学院コミュニティー吹奏楽団演奏会」 単独 平成 30 年 8 月 久留米信愛女学院コミュニティー吹奏楽団 石橋文化ホール

2. 「マーチングイン 福岡 2018」で久留米信愛女学院吹奏楽部を指揮（報賞受賞） 共同 平成 30 年 9 月 福岡マーチングバンド協会 福岡国際センター

3. 「マーチングイン 九州 2018」で久留米信愛女学院吹奏楽部を指揮（報賞受賞） 共同 平成 30 年 10 月 九州マーチングバンド協会 熊羽ビーコンプラザ

平成 29 年度及び 28 年度の研究の成果

(論文)

1. 「地域子育て支援拠点事業『信愛つどいの広場』の現状と課題」 単著 平成 28 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要第 29 号』(45~50)

2. 「体育・教職実践実習（幼稚園）における能動的学習による授業実践－学生の相互評価における言語表現の変化について－」 単著 平成 30 年 3 月 『国際幼児教育学会 九州・沖縄・山口支部 平成 29 年度発表論文集』(1-1)

(発表)

1. 「保育・教職実践実習（幼稚園）における授業実践」 単独 平成 29 年 10 月 国際幼児教育学会 九州・沖縄・山口支部 久留米信愛女学院短期大学

(演説)

1. 「音楽の贈り物」 共同 平成 28 年 11 月 久留米連合文化会演劇部 久留米シティプラザ久留米座

(発表)

1. 「久留米信愛女学院コミュニティー吹奏楽団演奏会」 単独 平成 28 年 8 月 久留米信愛女学院コミュニティー吹奏楽団 石橋文化ホール

2. 「マーチングイン 福岡 2016」で久留米信愛女学院吹奏楽部を指揮（報賞受賞） 共同 平成 28 年 9 月 福岡マーチングバンド・パントワーリング協会 福岡国際センター

3. 「マーチングイン 九州 2018」で久留米信愛女学院吹奏楽部を指揮（報賞受賞） 共同 平成 28

平成 10 年 九州マーチングバンド・パントワーリング協会 北九州メディアドーム
4. 「久留米信愛女学院コミュニティー吹奏楽部審査会」 単独 平成 29 年 8 月 久留米信愛女学院コミュニティー吹奏楽団 石園文化ホール
5. 「マーチング イン 福岡 2017」で久留米信愛女学院吹奏楽部を指揮（顧賞受賞） 共同 平成 29 年 9 月 福岡マーチングバンド・パントワーリング協会 福岡国際センター
6. 「マーチング イン 九州 2017」で久留米信愛女学院吹奏楽部を指揮（顧賞受賞） 共同 平成 29 年 10 月 九州マーチングバンド・パントワーリング協会 鹿児島アリーナ
7. 「第 17 回マーチングステージ全国大会」で久留米信愛女学院吹奏楽部を指揮（優秀賞受賞） 共同 平成 30 年 2 月 オリンパスホール 八王子
(報告)
1. 「保育者養成課程におけるアクティブ・ラーニングの実践報告－『保育・教職実践論習(幼稚園)』と『音楽表現』における取り組みを中心に－」 共著 平成 29 年 7 月 「久留米信愛女学院短期大学紀要第 40 号」(81-88)

本教員の主たる研究の成果（5編以内）

1. 「日本の幼児教育における音楽教育の効果性について –アメリカにおける音楽教育からの一考察–」(単著) 「国際幼児教育研究第 6 号」
2. 「技術のコミュニケーション・テクノロジー」(共著) 創言社 平成 13 年 9 月
3. 「保育にいきすマーチング曲集」(単著) 稲歌書房 平成 16 年 2 月
4. 「保育にいきすマーチング曲集」(単著) 稲歌書房 平成 17 年 2 月
5. 「保育にいきす編曲法」(単著) 稲歌書房 平成 18 年 3 月

所属学会お上げ参加状況

所属学会	参加状況および役職等
国際幼児教育学会	常任理事会・支部総会に出席、支部研究会参加、常任理事・九州・沖縄・山口支部幹事長
日本音楽教育学会	大会等不参加
日本管弦・吹奏楽学会	大会等不参加
日本保育者養成教育学会	大会等不参加

令和元年度 研究計画

1. 幼児教育における音楽教育の研究
国際幼児教育学会、日本音楽教育学会に所属し、より幅広い研究に取り組めるよう大会、研究会に参加する。また、国際幼児教育学会九州・沖縄・山口支部の会員での共同研究を進める。
2. 保育者養成に関する研究
日本保育者養成教育学会に所属し、保育者養成についての研究を深めていく。具体的には保育・教育演習指導に関する共同研究を行う。また、保育者養成のための音楽のテキストを作成する。
3. 吹奏楽指導法の研究
「スクールバンドを主体としたコミュニティー吹奏楽団の運営」についての実践研究を継続する。また、マーチング作品の創作を行うと共に、指導法について研究を行う。
4. 子育て支援に関する研究
本学で行っているつどいの広場での活動を基に、子育て支援に関する共同研究を継続して行い、発表する。
5. クラリネット奏法の研究
グループ“春の声”コンサート、久留米連合文化局コンサート等にて演奏発表を行う。

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

平成30年度のFD宣言は「学生の学修意欲を高める。～相応する全科目とも『私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした』の項目を4.0以上にする」であり、教育現場を意識した授業内容を組むと共に、一人ひとりの学生に対応した教授方法の工夫を図り、学生のさらに学びたいという意欲を引き出していく。

担当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
体育内容表現	AA：12名, A：31名, B：13名, C：7名, D：0名	3.78
音楽表現	AA：10名, A：23名, B：17名, C：13名, D：0名	3.48
器楽合奏	AA：11名, A：22名, B：23名, C：8名, D：0名	3.56
体育・教職実践演習（幼稚園）	AA：8名, A：34名, B：16名, C：4名, D：0名	3.74
	AA： 名, A： 名, B： 名, C： 名, D： 名	
	AA： 名, A： 名, B： 名, C： 名, D： 名	
	AA： 名, A： 名, B： 名, C： 名, D： 名	
	AA： 名, A： 名, B： 名, C： 名, D： 名	
	AA： 名, A： 名, B： 名, C： 名, D： 名	

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
体育内容表現	幼児教育学科1年	卒業選択、免許・資格必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	学生による授業評価の『私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした』についての評価4.0以上を目指としていたが、39年度3.7、30年度3.9と0.2ポイント上昇したが目標値までに至らなかった。また、授業時間以外の学習についても行っていない学生が半数近くいた。授業内容、課題設定の工夫・改善が必要である。	

授業についての自己評価	一できただけなかった
最新の知識や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構築しているかを伝えた	5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した	5・4・3・2・1

次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	FD宣言「学生の学修意欲を高める授業改善」 課題設定の工夫、授業計画内容の再点検を行い改善を図る。
---------------------------	--

科目名	対象	必修・選択
音楽表現	幼児教育学科 2 年	卒業選択、免許必修、資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		学生による授業評価の『私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした』についての評価 4.0 以上を目指していたが、29 年度 4.1 であったが 30 年度は 3.9 と 0.1 ポイント下がった。また授業時間外での学習についても課題に対しては行っているものの自発的な学習をした学生は 9 名であり、能動的な学習には至っていない。
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように連携しているかを伝ええた		5・① 3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・④ 3・2・1
ICT 等を用いた多様型・発達型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・④ 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4 ③ 2・1
厳格な授業評価を実施した		5・④ 3・2・1
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画		FD 宣言「学習内容についての興味関心を高める授業改革」 学生を自発的な学習へと結びつける課題設定・授業内容の改善を行う。
科目名	対象	必修・選択
器楽合奏	幼児教育学科 2 年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		学生による授業評価の『私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした』についての評価 4.0 以上を目指していたが、29 年度 4.1 であったが 30 年度は 3.9 と 0.1 ポイント下がった。実技系の科目であり、音楽が苦手な学生に対しての対応が必要と考えられる。
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 ③ 2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように連携しているかを伝ええた		5・④ 3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・④ 3・2・1
ICT 等を用いた多様型・発達型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・④ 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・④ 3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・④ 3・2・1
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画		FD 宣言「一人ひとりの学生に合わせた指導の工夫」 学生の能力に応じた指導を行い、学生の苦手意識の改善を図る。

科目名	対象	必修・選択
保育・教職実践演習（幼稚園）	幼児教育学科2年	卒業選択、免許・資格必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		学生による授業評価の『私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした』についての評価はも1であり目標を達成した。ただし29年度は4.3であり0.2ポイント下がっている。授業以外の学習についても課題に対しての学びを行っている学生が多いが、自発的な学習を行っている学生はほとんどいない。保育実際に直結する科目内容であることを考へるとこの点の改善を図る必要がある。
経験についての自己評価		→できた できなかっただけ
最初の印象や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通して教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		FD宣言「自発的な学習につながる授業改善」 ICTを活用して実践と振り返りの内容を深め、学生の自発的な学習意欲を掻く。

平成 30 年度　社会的活動報告

講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
・教員免許実践研修 「教育実践研究 幼児の苦楽観察」 ・「音楽を通して触れ合う心」	平成 30 年 8 月 24 日 平成 30 年 9 月 28 日	久留米信愛短期大学 久留米市いきがい 健康づくり財團	久留米信愛短期大学 九一のビア久留米
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
国際幼児教育学会理事、九州・沖縄・山口支部長 久留米市社会福祉部議会委員（委員長）、同議会実施団体専門部会委員（副会長） 久留米市社会教育委員（委員長） 久留米市障害者問題研究会議事監修委員 久留米市子ども・子育て会議委員（会長） 大刀洗町子ども・子育て会議委員（副会長） 久留米市研究都市づくり推進協議会幹事 高等教育コンソーシアム久留米 運営委員会委員、地域支援部会委員 福岡マーチングバンド協会監事	平成 30 年 4 月～31 年 3 月 同上	国際幼児教育学会 久留米市	
特定非営利活動法人 久留米音楽協会理事 久留米吹奏楽連盟常任理事 久留米連合文化会津部部長 久留米兒童吹奏樂團团长・指導者	同上	久留米市 久留米市 久留米市 大刀洗町 久留米市 高等教育コンソーシアム 久留米 福岡マーチングバンド協会	
他大学への非常勤等			
科目名	期間	出向先	
その他記事欄			
内容	年　月　日		
令和元年度　社会的活動計画			
○団体への協力			
国際幼児教育学会理事・支部長、久留米市等への委員協力、高等教育コンソーシアム久留米運営・地域支援部会委員、久留米音楽協会(NPO)理事、久留米吹奏楽連盟常任理事、福岡マーチングバンド協会監事、久留米連合文化会津部部長、久留米兒童吹奏樂團团长			
○吹奏楽指導 久留米信愛女学院吹奏楽部(中学・高校・短大)、久留米兒童吹奏樂團の指導、指導			

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

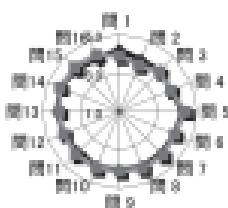
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、調査り・私語・メールをすることが少なかった。
 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
 問 4 私はこの授業に頭して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
 問 7 毎回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
 問 9 先生の板書の仕方や複数覚憶法（△等）の利用が効果的であった。
 問 10 教科書・参考書・配布資料（パンフレット・座談など）は、授業を理解するのに役立った。
 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていました。
 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していました。
 問 14 先生は懸念を持って授業を行っていた。
 問 15 先生は学生に対して愛情と尊厳の念を持って、授業を行っていた。
 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

5. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

授業合意

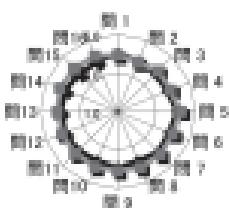
問 16 4.0



→教科平均 ←学科平均

授業内容 表現

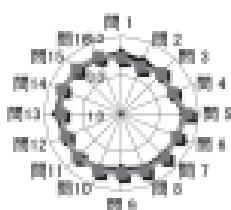
問 16 3.8



→教科平均 ←学科平均

音楽表現

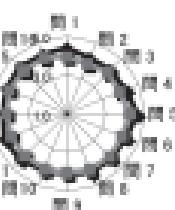
問 16 4.1



■教科平均 ■学科平均

保健・衛生実践演習(幼稚園)

問 16 4.3



■教科平均 ■学科平均

		問 17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。				
科 目 名		0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
音楽合奏(幼2)		24	19	8	3	0
保健内容 表現(幼1)		37	7	6	3	0
音楽表現(幼2)		27	14	9	2	1
保健・衛生実践演習(幼稚園)(幼2)		24	12	10	6	1

		問 18 あなたは授業時間以外にどのような学習(技術・技能の習得も含みます)を行いましたか。(複数回答可)					
科 目 名		予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
音楽合奏(幼2)		5	9	30	19	1	11
保健内容 表現(幼1)		1	3	21	0	0	25
音楽表現(幼2)		5	4	36	5	0	10
保健・衛生実践演習(幼稚園)(幼2)		3	3	36	0	3	10

所属学科	職名	氏名	
フードデザイン	教授	山下 順子	
担当科目			
科目名		割合	必修・選択
応用栄養学Ⅰ	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修	
応用栄養学Ⅱ	フードデザイン学科1年	栄養士必修	
栄養指導論	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修	
栄養指導実習	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修	
栄養士基礎演習(4回)	フードデザイン学科1年	卒業必修	
栄養指導実習	フードデザイン学科2年	栄養士必修	
公衆栄養学概論	フードデザイン学科2年	栄養士必修	
フードプロジェクト	フードデザイン学科2年	卒業必修	
卒業セミナー	フードデザイン学科2年	卒業必修	
栄養士総合演習Ⅱ 各回	フードデザイン学科2年	卒業選択	
子どもの食と栄養Ⅰ	幼児教育学科2年	保育士必修	
子どもの食と栄養Ⅱ	幼児教育学科2年	保育士必修	
研究分野			
1. 栄養教育・指導論の分野	<p>栄養教育・指導における理論に基づいた方法や技術に関する研究。対象者を自らの意思で行動変容に導くための方針や教育教材について研究している。</p>		
2. 小児栄養学の分野	<p>小児期の栄養のあり方にに関する研究。とくに小児生活習慣病予防のための小児肥満改善について研究している。</p>		
3. 栄養士養成の分野	<p>栄養士の養成に関する研究。栄養士養成に関するカリキュラム論・方法論について、栄養士養成に関わっている立場から研究を行っている。</p>		

平成 30 年度 研究報告	
平成 30 年度の研究の概要	
1.栄養教育・指導論の分野 食教育をテーマに、久留米市内保育所、幼稚園および認定こども園における食育実施の実態について調査研究を行った。	
2. 小児栄養学の分野 久留米大学医療センター小児科小児生活習慣病外来にて、性幼児の肥満改善のための食事・生活(運動・睡眠)について継続指導を行った。	
3. 栄養士養成の分野 『入学から卒業までのガイドブック』(10訂版)構成に向けて、内容・構成を検討した。 学群内 PD 活動の一環として、「栄養士養成研究」を継続した。	
4. 地域企画等との連携事業 平成 30 年度教育改革推進事業として、チャイルドプロジェクト・フードプロジェクト共同で「街・信愛蘭子」の開拓に取り組んだ。地元や商店街「古賀庄」の協力の下、『くるめ信愛郷』が完成した。	
平成 30 年度の研究の成果	
(論文)	
1. 「栄養士養成研究 (8) 6 年間の学習支援取り組みの総括」共著 平成 30 年 7 月 『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』(19~26)	
(その他の)	
1. 『入学から卒業までのガイドブック第 9 号』共著 平成 30 年 4 月 フードデザイン学群(総頁 64)	
2. 「講義学問選科目の習熟度について 第 2 報」共著 平成 30 年 7 月 『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』(27~33)	
3. 「『学生の成長』可視化のこころみ (1)」共著 平成 30 年 7 月 『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』(35~42)	
4. 「入学選考方法別による学業成績の追跡調査 (2)」共著 平成 30 年 7 月 『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』(61~66)	
平成 29 年度及び 30 年度の研究の成果	
(論文)	
1. 「栄養士養成研究 (4) 学習支援に対する効果の 2 年間の分析」共著 平成 28 年 7 月 『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要第 39 号』(21~25)	
2. 「栄養士養成研究 (5) 生活実態が学習支援効果に及ぼす影響 -2-」共著 平成 29 年 7 月 『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要第 40 号』(25~34)	
(発表)	
1. 「子育て支援講座における食育の取り組み」共同 平成 29 年 9 月 17 日 第 43 回福岡県栄養改善学会 オースプラザ福岡	
(その他の)	
1. 『入学から卒業までのガイドブック第 7 号』共著 平成 28 年 4 月 フードデザイン学群(総頁 64)	
2. 「久留米市の保育所・幼稚園・認定こども園における食育推進の実態 第 2 報」共著 平成 28 年 7 月 『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要第 39 号』(51~56)	
3. 『子どもの食と栄養 第 3 版』分担執筆 平成 28 年 9 月 保育出版社	
4. 『入学から卒業までのガイドブック第 8 号』共著 平成 29 年 4 月 フードデザイン学群(総頁 64)	
5. 「講義学問選科目の習熟度について 第 1 報」共著 平成 29 年 7 月 『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要第 40 号』(95~101)	

本教科の主たる研究の成績（5箇以内）	
1.『子どもの健康』共著 開成出版 平成 16年 1月 2.『くるめの元気！食育やさいかるた』食育教材製作 平成 18年 6月 3.『肥満 子どもの肥満』共著『久留米醫學會雑誌第 23 卷第 3・4 号別冊』 平成 22 年 6 月 4.『子どもの食と栄養 第 3 版』分担執筆 栄養出版社 平成 24 年 9 月	
所属学会および参加状況	
所属学会	参加状況おより役職等
日本栄養・食糧学会	大会等不参加。
日本栄養改善学会	大会等不参加。
日本家政学会	大会等不参加。
日本調理科学会	九州支部大会参加、平成 20・21 年度理事
日本小児保健学会	大会等不参加。
令和元年度 研究計画	
1. 栄養教育・指導論の分野 久留米市内保育所、幼稚園および認定こども園における食教育研究を継続し、調査・研究に携わる。 2. 小児栄養学の分野 久留米大学医療センター小児科小児生活習慣病外来にて、受診児の肥満改善のための食事・生活指導を継続する。 3. 栄養士養成の分野 『入学から卒業までのガイドブック』(11 打版)作成に向けて、内容・構成を検討する。 学科内 PD 活動の一環として、「栄養士養成研究」を継続する。 4. 地域企業との連携事業 令和元年度教育改革推進理事会おより「フードプロジェクト」活動と並せて、地域企業等との連携事業を継続する。	

平成30年度 教育活動報告（アーチング・ポートフォリオ）

平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

<FD宣言>

【目標】わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。

【成果の指標】学生による授業評価の問2、3、6、7、9により、①復習②目標明示③要点板書④質問・考察時間確保⑤理解度向上の成果を見る。

<計画>

授業において①前回の復習②今回の目標明示③要点の板書④質問・考察時間の確保⑤まとめと理解度の確認を行う。「わかりやすい授業法の工夫」は①復習、②目標明示、③要点板書、④まとめを行う。「学生の理解度確認」は毎時の目標に合わせた④質問・考察時間を定期確認および小テストによって⑤理解度の確認に努める。

担当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳				平均
応用栄養学Ⅰ	AA: 9名, A: 6名, B: 3名, C: 0名, D: 0名				4.3
応用栄養学Ⅱ	AA: 11名, A: 5名, B: 1名, C: 1名, D: 0名				4.4
栄養指導論	AA: 3名, A: 6名, B: 3名, C: 6名, D: 0名				3.8
栄養指導演習	AA: 5名, A: 7名, B: 3名, C: 3名, D: 0名				3.8
栄養士基礎演習	AA: 10名, A: 6名, B: 2名, C: 0名, D: 0名				4.4
栄養指導演習	AA: 8名, A: 6名, B: 2名, C: 2名, D: 0名				4.1
公衆栄養学概論	AA: 2名, A: 1名, B: 8名, C: 7名, D: 0名				2.9
アードプロジェクト	AA: 11名, A: 3名, B: 1名, C: 4名, D: 0名				4.1
卒業セミナー	AA: 6名, A: 10名, B: 1名, C: 1名, D: 0名				4.2
栄養士総合演習Ⅲ	AA: 0名, A: 4名, B: 11名, C: 3名, D: 0名				3.1
子どもの食と栄養Ⅰ	AA: 29名, A: 17名, B: 10名, C: 7名, D: 0名				4.1
子どもの食と栄養Ⅱ	AA: 33名, A: 18名, B: 8名, C: 4名, D: 0名				4.2

各授業の評価		
科目名	対象	必修・選択
応用栄養学Ⅰ	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		
	総合評価 4.0 (前年度比 +0.20)、問2「わかららない時に質問または自分で調べた」3.6 (+0.8)、問9「板書の仕方や配布資料が効果的」3.9 (-0.1) であった。この結果を受けて、教育力向上計画の④「質問・考察時間の確保」はできていたが、③「要点の板書」は検討を必要とし、わかりやすい授業法の工夫にもっと努めなければならないと考える。	
授業についての自己評価		
	最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4・3 (2) 1
	教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4 (3) 2・1
	自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4 (3) 2・1
	ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・2 (1)
	振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4 (3) 2・1
	尋ねる授業評価を実施した	(5) 4・3・2・1
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画		
	<FD 宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>①前回の復習②今回の目標明示③要点の板書④質問・考察時間の確保⑤まとめと理解度の確認を行う。とくに「要点の板書」を工夫し、本物の内容をわかりやすく明示すること、また「質問・考察時間の定期確保」や「小テスト」によって、理解度の確認に努める。	
各科目名		
応用栄養学Ⅱ	フードデザイン学科1年	栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		
	総合評価 3.9 (-0.2)、問2「わかららない時に質問または自分で調べた」3.4 (+0.1)、問9「板書の仕方や配布資料が効果的」3.8 (±0) であった。前年度比微増と同様であるが、各評価点が4点台に上がるよう、わかりやすい授業法の工夫に努めなければならない。「応用栄養学Ⅰ」と同様に、教育力向上計画の④「質問・考察時間の確保」および③「要点の板書」は、検討が必要と考える。講義回数が8回なので授業の進行にも注意が必要である。	
授業についての自己評価		
	最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4・3 (2) 1
	教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4 (3) 2・1
	自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4 (3) 2・1
	ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・2 (1)
	振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4 (3) 2・1
	尋ねる授業評価を実施した	(5) 4・3・2・1
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画		
	<FD 宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>応用栄養学Ⅰと同様に、とくに「要点の板書」の工夫と「質問・考察時間の定期確保」や「小テスト」による理解度確認を行う。	

科目名	対象	必修・選択
栄養指導論	アードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価3.8(-0.4)と前年度比が下がったのは、問3「わからない時に質問または自分で調べた」3.4(-0.8)の点数減が大きかったためと考える。問3「授業の内容を理解することができた」2.8(+0.3)、問6「本科目の目標や他の科目との関連を明示」と問7「本時のテーマ・目的を明示」は各4.2(+0.1, +0.2)であった。教育力向上計画の③「質問・考察時間の確保」を活かし、積極的な学習姿勢が身に着くよう、双方面の授業改編に努める。	
授業についての自己評価		一できた できなかつたら
最新の知識をふまえて講義ノートを更新した	5・4 (3)	2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを教えた	5・4 (4)	3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通して教授・指導した	5・4 (3)	2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・2 (1)	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3 (2)	1
厳格な授業評価を実施した	5・4・3・2 (1)	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	<FD宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>①前回の復習②今回の目標明示③要点の板書④質問・考察時間の確保まとめと理解度の確認を行う。	
科目名	対象	必修・選択
栄養指導演習	アードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価2.6(-0.30)と、授業科目中最下位だった。栄養指導の基本的事項について講習する科目のため、学生自身の評価も分かれるところなのかなと思う。学生コメントでも「全否定的な評議が多く、やる気がそがれる」、逆に「とても分かりやすく丁寧な指導で、栄養士になるために向上心をもって学んでいたい」とあった。学生一人ひとりに適った丁寧な指導の進行と、やる気を引き出す指導力の向上に努めなければならないと考える。	
授業についての自己評価		一できた できなかつたら
最新の知識をふまえて講義ノートを更新した	5・4・3 (3)	1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを教えた	5・4 (3)	2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通して教授・指導した	5・4 (3)	2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・2 (1)	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3・2 (1)	
厳格な授業評価を実施した	5・4 (4)	3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	<FD宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>演習科目なので「前回の復習」、「今回の目標明示」を行い、演習課題の内容や仕方について、「質問・考察時間の確保」をして、学生各々の理解度、速度に適った指導を行う。	

科目名	対象	必修・選択
栄養士基礎演習	フードデザイン学科1年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価 3.9 (-0.2)。問2「わからない時に質問または自分で調べた」3.3 (-0.2)、問4「本授業に関し、さらに追んだ勉強をしたい」3.7 (+0.3)であった。本科目は初步次教育として、栄養士養成課程に必要な基本的事項の習得を目的としている。よって、学生各々のわからない点、苦手な内容を把握し、適切に対応していくかなければならないと考える。	
授業についての自己評価		一できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 - 4 (3) - 2 - 1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた		5 - 4 (3) - 2 - 1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5 - 4 (3) - 2 - 1
JCT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 - 4 - 3 - 2 - (1)
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5 - 4 - 3 - (2) - 1
統格な授業評価を実施した		(5) 4 - 3 - 2 - 1
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画	<FD 宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>講習科目なので「前回の復習」、「今回の目標明示」を行い、演習課題の内容ややり方について、「質問・考察時間の確保」をして、学生各々の理解度、速度に沿った指導を行う。	
科目名	対象	必修・選択
栄養指導実習	フードデザイン学科2年	栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価 4.0 (+0.2)。各評価項目についても、概ね4点台であった。実習テーマが各学生にあるため、より学習意欲が上がったのかもしれない。卒業後の栄養士としての栄養指導の実際ににおいても、課題発見と適切な目標設定、指導計画・実施・評価・改善（PDCA）に取り組むことができるよう、本授業内容の充実を図っていくことが必要である。	
授業についての自己評価		一できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 - 4 - 3 - (2) - 1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた		5 - 4 (3) - 2 - 1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5 - 4 (3) - 2 - 1
JCT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 - 4 - 3 - 2 - (1)
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5 - 4 - 3 - 2 - (1)
統格な授業評価を実施した		5 - (4) 3 - 2 - 1
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画	<FD 宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>講習科目なので「今回の目標明示」を行い、実習課題の設定その内容の進め方について、学生各々の理解度、速度に沿った指導を行う。	

科目名	対象	必修・選択
公衆栄養学概論	フードデザイン学科2年	栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		総合評価4.1 (+0.7)と前年度比が大きく上がった。問3「授業の内容を理解することができた」3.8 (+0.3), 問5「本科目の目標や他科目との関連を明示」と問7「本時のテーマ・目的を明示」は各4.2 (+0.6, +0.6)であった。本科目は栄養士実力認定試験対策も兼ねているので、学習成果が試験結果にも反映することをねらう。そのためには、教育力向上計画の③「質問・考察時間の確保」を活かした授業展開の改善に取り組む。
授業についての自己評価		一できれい できなかっただけ
発表の印象や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3)・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4 (3)・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4 (3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2 (1)
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の興味度を確認しながら授業を行った		5・4 (3)・2・1
厳格な授業評価を実施した		(5) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		<FD宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>①前回の復習②今回の目標明示③要点の板書④質問・考察時間の確保⑤まとめと理解度の確認を行う。
科目名	対象	必修・選択
フードプロジェクト	フードデザイン学科2年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		総合評価4.2 (新規科目)。問2「わからない時に質問または自分で調べた」3.6, 問3「授業の内容を理解することができた」3.9, 問4「本科目の目標や他科目との関連を明示」4.0, 問7「本時のテーマ・目的を明示」3.9, 問9「板書の仕方や配布資料が効率的」4.1 であった。アクティブラーニングの手帳を取り入れた授業展開に悩んでいるが、学生コメントには「準備不足の回もあり」と指摘があった。授業内容の充実と適切な授業展開に努めなければならない。
授業についての自己評価		一できれい できなかっただけ
発表の印象や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3 (2)・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4 (3)・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4 (3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2 (1)
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の興味度を確認しながら授業を行った		5・4・3 (2)・1
厳格な授業評価を実施した		5・4 (3)・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		<FD宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>前回科目なので「今回の目標明示」を行い、課題の発見・設定や内容の進め方について、学生各々の学習力および行動力を引き出す工夫を行う。※次年度科目「フードプロジェクトⅡ」対応

科目名	対象	必修・選択
卒業セミナー	アーバンドesign学科2年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		総合評価 4.5 (前年度評価なし)、問2「わからない時に質問または自分で調べた」4.3、問3「授業の内容を理解することができた」も4、問6「本科目の目標や他科目との関連を明示」4.1、問7「本時のテーマ・目的を明示」4.6、問9「教書の仕方や配布資料が効果的」4.2であった。本科目はこれまで授業評価を実施していないが、当年度はカリキュラム編成上「アーバンドプロジェクト」との関連で実施した。結果のとおり評価点が高いのは、学生自ら関心のある研究テーマを選定し、計画・実施・報告書作成を行うため、学習意欲が高く、達成感を得ているものと考える。
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知識や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
勧告な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のPD宣言と 教育力向上に向けての計画	<PD宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>講習科目なので「今回の目標明示」を行い、課題の発見、設定や内容の進め方について、学生各々の学習力および行動力を引き出す工夫を行う。※次年度科目「アーバンドプロジェクトⅣ」対応	
科目名	対象	必修・選択
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅲ	アーバンドesign学科2年	卒業選択
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		総合評価 4.1 (+0.4)、問17「この授業のための一週間当たりの予習・復習時間」9分が4割物であった。また学生コメントには「授業開講はバランスよく」とあった。栄養士養成課程の総合演習科目（栄養士実力認定試験対策）として、授業時間内の有効な授業展開と、授業時間外の学習への導きをもっと工夫しなければならない。
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知識や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
勧告な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のPD宣言と 教育力向上に向けての計画	<PD宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>栄養士実力認定試験対策として、「前回の復習」、「今回の目標明示」、「質問・考察時間の確保」を行い、学生各々の理解度に沿った授業を開講する。	

科目名	対象	必修・選択
子どもの食と栄養Ⅰ 学生の授業評価を踏まえた自己評価	幼児教育学科2年	保育士必修
		総合評価4.3(+0.6)。問2「わからない時に質問または自分で調べた」3.4(+0.2), 問3「授業の内容を理解することができた」3.7(+0.4), 問6「本科目の目標や教科書との関連を明示」4.2(+0.6), 問7「本時のテーマ・目的を明示」4.3(+0.6), 問9「板書の仕方や配布資料が効果的」4.3(+0.6)であった。前半回比が上がったのは、合同講義室での授業内容提示媒体に「Power Point」を使用したことなどが学習内容の理解に有効的だったと考える。
授業についての自己評価		…できた できなかつた…
最新の知識や動画をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3)・2・1
教授内容が授業の性向や実践場面でどのように繋続しているかを伝えた		5・4 (3)・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて説明・指導した		5・4 (3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2 (1)
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の理解度を確認しながら授業を行った		5・4・3 (2)・1
顧客性授業評価を実施した		(5) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画		<FD宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>(1)前回の復習と今回の目標明示(要旨の復習)(質問・考察時間の確保)(まとめと理解度の確認)を行う。
科目名	対象	必修・選択
子どもの食と栄養Ⅱ 学生の授業評価を踏まえた自己評価	幼児教育学科2年	保育士必修
		総合評価4.3(+0.2)。問2「わからない時に質問または自分で調べた」3.8(+0.4), 問3「授業の内容を理解することができた」4.1(+0.2), 問6「本科目の目標や教科書との関連を明示」4.3(+0.6), 問7「本時のテーマ・目的を明示」4.3(+0.6), 問9「板書の仕方や配布資料が効果的」4.3(+0.6)であった。前半回比が上がったのは、「子どもの食と栄養Ⅰ」での学習を基に、調理実習など子どもの食の実際にについて、授業を開闢したためと考える。
授業についての自己評価		…できた できなかつた…
最新の知識や動画をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3 (3)・1
教授内容が授業の性向や実践場面でどのように繋続しているかを伝えた		5・4 (3)・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて説明・指導した		5・4 (3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2 (1)
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の理解度を確認しながら授業を行った		5・4 (3)・2・1
顧客性授業評価を実施した		(5) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画		<FD宣言>わかりやすい授業法の工夫と学生の理解度確認を行う。 <計画>演習科目なので「今回の目標明示」を行い、本時の授業テーマを解説し、内容理解の下に授業の極めるよう工夫する。

平成 30 年度 社会的活動報告

講演等					
題名	講演月日	主催者	場所		
魅力あるおいしい学校給食にするために～切り方で変わらる料理のおいしさ～みんなで駆けむ、保護者への食支援	30・07・24 30・07・27 30・09・03	公益財団法人福岡県学校給食会 久留米市子ども未来課	公益財団法人福岡県学校給食会 久留米市教育センター		
「つくる・たべる・たのしむ」を実践しよう～シェアの手本で若い世代への食育～久留米の食育～若い世代の食育推進を起点に市民の健康を考える～	30・09・11 30・10・12	公益社団法人福岡県栄養士会 高等教養コンソーシアム久留米	アクロス福岡 くるめりあ		
他団体等への協力					
協力内容	協力期間	協力先			
久留米大学医療センター小児科小児生活習慣病外来にて栄養指導 食と健康的な植物繊維に対する食育教室への参画	平成 30 年 4 月～31 年 3 月 (週 1 回) 平成 30 年 6 月～31 年 3 月	久留米大学医療センター小児科 食と健康的な植物繊維			
他大学への非常勤等					
科目名	期間	出向先			
食と健康 (a) 食と健康 (b)	平成 30 年度前期 平成 30 年度後期	久留米大学 久留米大学			
その他特記事項					
内容	年 月 日				
平成 30 年度学校給食調理技術講習会講師 (福岡県学校給食会) 平成 30 年度食生活改善推進委員会幹事会講師 (久留米市) 平成 30 年度学校給食料理コンクール審査委員長 (福岡県学校給食会) 平成 30 年度福岡県学校給食レシピコンクール審査員 (福岡県)	平成 30 年 7 月 24 日、29 日 平成 30 年 8 月 7 日 平成 30 年 10 月 18 日 平成 31 年 1 月 24 日				
令和元年度 社会的活動計画					
1. 他団体等への協力					
①久留米大学医療センター小児科小児生活習慣病外来・栄養指導	(平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月毎回金曜日午後の予定)				
②久留米市地域温活化対策協議会委員 (委員任期：就任～令和 3 年 3 月 31 日)					
③久留米市中央卸売市場運営協議会委員 (委員任期：平成 29 年 8 月 9 日～令和元年 8 月 8 日)					
2. 他大学への非常勤等					
①久留米大学「食と健康 (a)」「食と健康 (b)」(平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月前期・後期)					
3. その他					
①令和元年度学校給食調理技術講習会講師 (福岡県学校給食会) (7 月 26 日、8 月 2 日)					
②令和元年度食生活改善推進委員会幹事会講師 (久留米市) (8 月 1 日)					
③令和元年度久留米市保健所連携給食専門研修講師 (久留米市保健所連携) (7 月 12 日、11 月 15 日、1 月 18 日)					

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

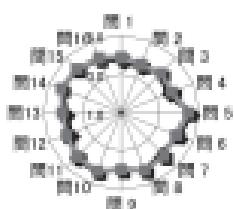
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった。
- 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
- 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
- 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
- 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
- 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
- 問 7 各回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
- 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
- 問 9 先生の板書の仕方や授業用機器（ビデオなど）の利用が効果的であった。
- 問 10 教科書・参考書・配布資料（リスト・楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
- 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、手書きちゃんと説明があった。
- 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
- 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
- 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
- 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
- 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

6. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

応用基礎学Ⅰ

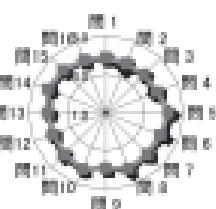
問 16 4.0



→教科平均 ←学科平均

応用基礎学Ⅱ

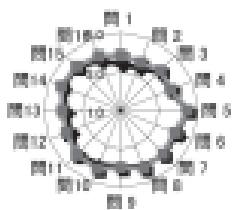
問 16 3.9



→教科平均 ←学科平均

栄養指導論

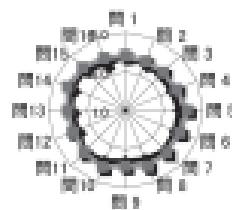
回 16 3.8



—■—教科平均 —■—学科平均

栄養指導演習

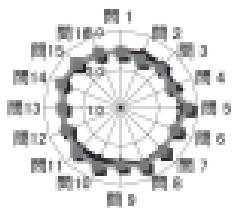
回 16 3.6



—■—教科平均 —■—学科平均

栄養指導実習

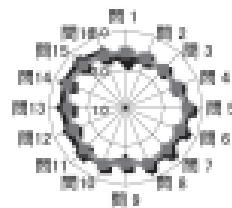
回 16 4.0



—■—教科平均 —■—学科平均

公衆栄養学概論

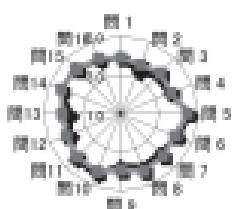
回 16 4.1



—■—教科平均 —■—学科平均

栄養士基礎演習

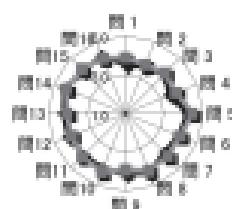
回 16 3.9



—■—教科平均 —■—学科平均

フードプロジェクト

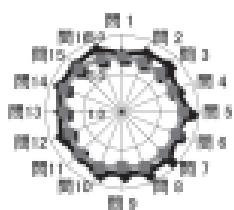
回 16 4.2



—■—教科平均 —■—学科平均

卒業セミナー

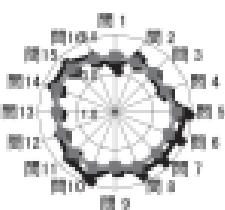
問 16 4.5



■教科平均 ■学科平均

栄養士総合演習 I・II

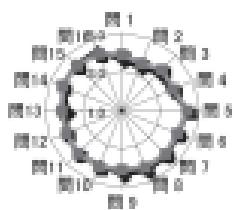
問 16 4.1



■教科平均 ■学科平均

子どもの食と栄養 I

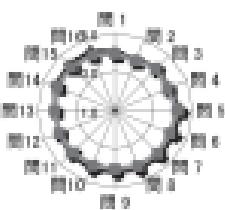
問 16 4.3



■教科平均 ■学科平均

子どもの食と栄養 II

問 16 4.3



■教科平均 ■学科平均

	問 17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。				
科目名	0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
応用栄養学Ⅰ(フ1)	4	5	6	1	0
応用栄養学Ⅱ(フ1)	2	10	3	0	0
栄養指導論(フ1)	4	8	3	2	0
栄養指導演習(フ1)	5	6	5	0	0
栄養指導実習(フ2)	8	4	2	1	0
公衆栄養学概論(フ2)	8	7	2	0	0
栄養士基礎演習(フ1)	3	7	4	1	2
フードプロジェクト(フ2)	14	3	0	0	0
卒業セミナー(フ2)	13	2	0	0	0
栄養士総合演習 I・II(フ2)	6	6	1	0	1
子どもの食と栄養 I(幼2)	34	15	2	2	0
子どもの食と栄養 II(幼2)	26	16	4	1	1

		問18 あなたは授業時間以外にどのような学習(独学・接触の留得も含みます)を行いましたか。(複数回答可)					
科 目 名		予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
応用栄養学Ⅰ(フ1)		0	3	0	10	0	2
応用栄養学Ⅱ(フ1)		1	1	4	5	0	1
栄養指導論(フ1)		0	5	0	9	0	2
栄養指導演習(フ1)		1	2	7	2	1	4
栄養指導実習(フ2)		0	2	4	0	0	7
公衆栄養学概論(フ2)		1	1	3	9	1	4
栄養士基礎演習(フ1)		1	8	14	2	1	0
フードプロジェクト(フ2)		0	0	3	0	1	12
卒業セミナー(フ2)		0	1	1	0	1	10
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ(フ2)		2	2	2	2	1	6
子どもの食と栄養Ⅰ(必2)		1	3	20	9	1	20
子どもの食と栄養Ⅱ(必2)		0	4	19	18	1	14

所属学科	職名	氏名
幼児教育	教授	原 浩美
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
ピアノ I	幼児教育学科 1 年	卒業必修・免許登録必修
ピアノ II	幼児教育学科 1 年	卒業必修
ピアノ演奏法	幼児教育学科 2 年	卒業選択・資格登録必修
音楽保育	幼児教育学科 2 年	卒業選択・資格登録必修
チャイルドプロジェクト	幼児教育学科 2 年	卒業選択・資格登録必修
教育実習事前事後指導	幼児教育学科 1 年・2 年	卒業選択・免許必修資格選択必修
研究分野		
1. ピアノ音楽教育の分野 こどもピアノコンクールの審査を通して、ピアノ演奏が音楽教育に果たす役割を考え、ピアノで表現するための演奏技術を子どもに指導し、どのような権限が生じるのか研究する。		
2. ピアノ演奏法の分野 演奏活動を通して自己の表現・技術を深める研究。発達の研究、作品のアナリーゼ、演奏準備（練習）という一連の流れを実践し、演奏の機会を設けて研究する。		
3. 保育者養成における音楽表現の分野 保育士および幼稚園教諭の養成において、ピアノが関わる表現分野を研究。保育指導や保育生活の中で必要とされるピアノ演奏を習得させるための有効な指導法や実現を研究する。		

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. ピアノ音楽教育に関する研究
ピアノコンクールの審査員として、子どものピアノ演奏・表現技術を聴き取り、評価した。
2. ピアノ演奏法に関する研究
久留米において 2 回、筑紫野市において 1 回、東京において 1 回の合計 4 回の演奏会に出演し、それぞれの演奏会の主旨、意図する内容に応じた演奏曲目を選曲し、その作品の意図する内容を充分に表現する演奏手法を研究した。
3. 開発者養成に関する研究
①全国大学音楽教育学会第 34 回 大会において、共同研究者として発表した。

平成 30 年度の研究の成果

《口頭発表》

1. 全国大学音楽教育学会第 34 回全国大会仙台大会
「保育所における音楽表現活動について」(共同) 平成 30 年 8 月 24 日
2. 日本音楽教育学会第 49 回岡山大会
「保育士の好きな“子どもの歌”と歌わせたい“子どもの歌”」(共同) 平成 30 年 10 月 7 日

《講演》

1. 「第 56 回ひびきの会 50 周年記念演奏会」
隈丸美次作曲 クラリネット、ヴァイオリン、ピアノのための「島頭譜」 田田
田村洋彦作曲 子どものための小曲集「海の情景」
隈丸光次作曲 「廻の音」「音下」
平成 30 年 2 月 3 日
石橋文化センター共同ホール

《審査》

1. Kawai Music Competition
カワイこどもピアノコンクール
カワイピアノコンクール
平成 30 年 12 月 23 日
平成 30 年 12 月 24 日
石橋文化センター共同ホール

平成 29 年度及び 30 年度の研究の成果

《口頭発表》

3. 全国大学音楽教育学会第 33 回岐阜大会
学生のデジタル器への反応 (共同) 平成 29 年 8 月 25 日
ホテルグランヴィール岐阜

《講演》

1. 「久留米連合文化会館会オープニングセレモニー」
アリヤ作曲 スペイン舞曲
平成 29 年 5 月 27 日
ホテルマリターレ創世
2. 「午後のコンサート」 田村 敏作曲 プレリュードとトッカータ
平成 29 年 6 月 3 日
石橋文化会館小ホール

3. 「ファミリーコンサート」 創作音楽劇 ～冒険好きのペール、絵が纏り広げる未知の世界へ～	平成 29 年 11 月 24 日	筑紫野市生涯学習センター
4. 「岡村弘バリトンリサイタル」 ショパン作曲 エチュード ショーマン＝リスト編曲 鋼琴	平成 30 年 2 月 3 日	佐賀ベヒシュタイン・サロン
(審査)		
2. Kawai Music Competition		
カワイピアノコンクール		
カワイピアノコンクール	平成 29 年 12 月 23 日	
カワイピアノコンクール	平成 29 年 12 月 24 日	
石橋文化センター共同ホール		
平成 28 年度		
(発表)		
1. 「音楽療教の効果について」—保育園における実験測定の結果から—	平成 28 年 5 月 7, 8 日	
第 69 回日本保育学会 東京学芸大学小金井キャンパス		
(演題)		
1. 久留米市民オーケストラ第 28 回定期演奏会	平成 28 年 5 月 21 日	
久留米シティプラザ・グランドホール		
2. 東日本大震災・福島地震復興支援公演「歌の道場」	平成 28 年 6 月 26 日	
久留米シティプラザ・グランドホール		
3. アルビレオ音楽祭 X XVII	平成 28 年 6 月 28 日	
東京すみだトリフォニーホール小ホール		
4. D-D きの会定期演奏会	平成 28 年 9 月 11 日	
えーるピア久留米視聴覚ホール		
5. 教員研究会	平成 28 年 9 月 14 日	
本学音楽室		
6. 北筑後プロック音乐会	平成 28 年 10 月 30 日	
久留米シティプラザ・久留米座		
7. 久留米連合文化会館作品コンサート	平成 28 年 11 月 23 日	
久留米シティプラザ・久留米座		
(審査)		
1. Kawai Music Competition	平成 28 年 12 月 23, 25 日	
石橋文化センター共同ホール		

本教員の主たる研究の成果（5 検以内）

1. 原浩美久留米市芸術奨励賞 特別賞受賞記念ピアノリサイタル 単著	平成 6 年 2 月 24 日
石橋文化センター共同ホール	
2. 「『赤髪のコムミニケーションテクノロジー』創造型理論とその展開」 大著	『創元社』
	平成 12 年 9 月
3. 「近・現代日本の『子どもの歌』における特徴的傾向」 単著	『国際幼児教育研究』 第 14 号
	平成 19 年 3 月
4. 「邦人作品のピアノ曲についての一考察」 単著	『九州公私空大学音楽学会音楽研究』 別冊号
	平成 23 年 10 月
5. 原浩美ピアノリサイタル～クラヴィーア アーベント vol. 4～ 単著	
原浩美ピアノリサイタル実行委員会 えーるピア久留米視聴覚ホール	
	平成 25 年 9 月 7 日

所属学会および登録状況	
所属学会	参加状況および役職等
国際幼児教育学会	不参加
九州公私立大学音楽学会	参加
日本保育学会	参加
全国大学音楽教育学会	参加

令和元年度 研究計画
1. ピアノ音楽教育に関する研究 ピアノコンクールの審査を通して、子どもの演奏・表現技術を習得するための指導方法の研究を継続する。
2. ピアノ演奏法に関する研究 地域に根ざした演奏活動を継続する。
3. 保育者養成に関する研究 ①共同研究を継続する。 ②保育現場の中で必要とされるピアノ演奏技術について、特にピアノ経験初心者に習得させるための有効な指導法の研究を継続する。

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）			
平成30度のFD宣言と教育方針に向けての計画			
【目標】 学習意欲を高める工夫			
【成果の指標】 学生による授業評価の例1、例10の項目の評価を上げること。			
ピアノ授業では理解できているかを見極めるための習熟度表の活用時間を増やし学生に自己評価させた。口調は「ゆっくりと早口にならないよう」努力し、保育者の教解や伴奏法に関する知識と現状を適応付けて説明をして学生の理解が深まるよう実施した。学生からの質問を積極的に受けれるよう便し、学生が理解して演奏できる力を付け、楽譜を読み解く時間を多くとった。保育現場の音楽活動に合わせた演奏の多様性を紹介し、具体的に模範演奏して理解を認めさせて後、実践させて自信を持たせるよう工夫をした。			
担当科目の成績評価			
科目名	成績評価の内訳		平均
ピアノⅠ	AA: 9名, A: 26名, B: 20名, C: 11名, D: 1名		3.5
ピアノⅢ	AA: 10名, A: 22名, B: 20名, C: 13名, D: 0名		3.4
ピアノ演奏法	AA: 1名, A: 1名, B: 3名, C: 1名, D: 1名		3.2
音楽保育	AA: 1名, A: 1名, B: 1名, C: 1名, D: 1名		5.0
チャイルドプロジェクト	AA: 1名, A: 3名, B: 1名, C: 1名, D: 1名		4.2
教育実習	AA: 1名, A: 1名, B: 1名, C: 1名, D: 1名		
	AA: 1名, A: 1名, B: 1名, C: 1名, D: 1名		
	AA: 1名, A: 1名, B: 1名, C: 1名, D: 1名		

各授業の評価		
科目名	対象	必修・選択
ピアノ I	幼児教育学科 1 年	卒業必修・免的選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		
	楽譜が読める力、リズムや音楽の流れを理解する力をつけてもらい実践することを到達目標にする。個人指導なので一人ひとりの理解力や発表力が把握でき、欠けている事を直に伝え改善できる利点がある。今後は一人ひとりの時間配分を厳密にし、3.8 の授業評価項目(問9、13) の改善にあたる。	
授業についての自己評価		
	最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	できました 4 (3) 3 2 1
	教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた	5 (4) 3 2 1
	自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 (4) 3 2 1
	ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 (4) 3 2 1
	振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 (4) 3 2 1
	適格な授業評価を実施した	5 (4) 3 2 1
次年度の PD 宣言と 教育力向上に向けての計画	個人レッスン室での講義で、視聴覚機器やビデオを使うことが全く無いのが現状である。個人レッスン形態でその使用が教育力向上に繋がるかを非常勤講師とも相談し考えたい。 PD 宣言：尊敬と熱意を持って指導し、分かりやすい指示、確実に傳けるようになる方法を個人ごとに考える。授業評価平均 4.5 を上回る結果を目指す。	
科目名	対象	必修・選択
ピアノ II	幼児教育学科 1 年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		
	主な内容はピアノ実技で、実践しながら演奏技術を高めていくことを目標にするが、最終的に子どもと共に音楽を楽しむ気持ち、情熱を育む気持ちを持ってもらいたいと願っている。そのための一つの方針としてピアノ奏法技術を身に付けてもらいたい。評価結果は高い点を得られたが、1つの項目が 5 点に星かず、その項目は次年度の課題と考えていく。	
授業についての自己評価		
	最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4) 3 2 1
	教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた	5 (4) 3 2 1
	自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 (4) 3 2 1
	ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 (4) 3 2 1
	振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 (4) 3 2 1
	適格な授業評価を実施した	5 (4) 3 2 1
次年度の PD 宣言と 教育力向上に向けての計画	個人レッスン室での講義で、視聴覚機器やビデオを使うことが全く無いのが現状である。個人レッスン形態でその使用が教育力向上に繋がるかを非常勤講師とも相談し考えたい。 PD 宣言：尊敬と熱意を持って分かりやすい指示をし、確実に傳けるより個人ごとに方法を考える。授業評価平均 4.9 を上回る結果を目指す。	

科目名	対象	必修・選択
ピアノ箇要法	幼稚教育学科2年	卒業選択・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	教育実習を控えているので5回目までは実習で使用する幼児の歌の伴奏譜を元に実践で弾けるよう指導している。実習後は保育の現場で活かせる楽曲を自由に選曲させて指導にあたる内容は学生にとって有益であると思う。最終的に子どもと共に音楽を楽しむ気持ち、情緒を育む気持ちをたくさん持ってもらいたいと願っている。授業評価項目の間4が4.0評価と最低だったので、改善に取り組む。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4 (3)・2・1	
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	(5)・4・3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	(5)・4・3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4 (3)・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 (4)・3・2・1	
厳格な授業評価を実施した	(5)・4・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	個人レッスン室での課題で、複数音楽器やビデオを使うことが全く無いのが現状である。個人レッスン形態でその使用が教育力向上に繋がるかを非常勤講師とも相談し考えたい。 FD宣言：尊敬と熱意を持って指導をし、個人の表現力・創造力を伸ばす。授業評価平均4.8を上回る結果を目指す。子どもと共に音楽を楽しむ気持ち、情緒を育む気持ちをたくさん持ってもらいたいと願う。	
科目名	対象	必修・選択
音楽教育	幼稚教育学科2年	卒業選択・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	個人の望む研究課題を元に考え、重り組み解決していく方向で進めた。学生の探求心は素晴らしい熱心で、少しのアドバイスでも学生自身が吸収し自己の実践へと生かしていた。学生の姿勢は高く興味関心のあることへの取り組み、解決法など学生の学ぼうとする意欲が素晴らしかった。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	(5)・4・3・2・1	
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	(5)・4・3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	(5)・4・3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 (4)・3・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4 (3)・2・1	
厳格な授業評価を実施した	(5)・4・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	対話を重ね、学生の研究課題をサポートし解決できるように、自身の研究を怠らない。 FD宣言：学生の興味関心を大切にし、成長できるよう手助けをする。授業評価平均6.0を次年度も保持できることを目指す。	

科目名	対象	必修・選択
チャイルドプロジェクト	幼稚教育学科 2年	卒業選択・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	個々の学生の能力を發揮させることができていなかった。 学生が質問し、意見を述べられるように配慮がなされていないという評価に監督します。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		○・(4) 3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように適応しているかを伝えた		○・(4) 3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通して教授・指導した		○・(4) 3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		○・(3) 4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		○・4 (3) 3・2・1
厳格な授業評価を実施した		○・(3) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	個々の研究を明確にし、そこから出てくる課題を一つ一つ相談しながら自発的に解決していく様子。また、複数人で一つの課題を解決するために必要な協調性を養う。	
科目名	対象	必修・選択
教育実習	幼稚教育学科 1年・2年	卒業選択・免許必修資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	教育実習は、事前準備を入念に行い、実習中は実習園に訪問し学生が課題を持って実習にどのようにも関わっているか等を面談し、実習後には振り返りを通して自己を改めてみつめ直し考えることが大切と思われる。学生の自己実現への大きなステップとなるよう配慮し、毎年変わるものである学生の動向を見ながら、授業評価を細みて常に検討していくなければならない。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		○・(3) 4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように適応しているかを伝えた		○・(3) 4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通して教授・指導した		○・(3) 4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		○・(4) 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		○・4 (3) 3・2・1
厳格な授業評価を実施した		○・(3) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	教育実習は、事前準備を入念に行い、実習中は実習園に訪問し学生が課題を持って実習にどのようにも関わっているか等を面談し、実習後には振り返りを通して自己を改めてみつめ直し考えることが大切と思われる。学生の自己実現への大きなステップとなるよう配慮し、毎年変わるものである学生の動向を見ながら、毎回の授業内容を検討し計画する。	

平成 30 年度 社会的活動履歴			
講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
久留米市文化芸術振興審議会委員	平成 30 年 4 月 ～平成 31 年 3 月	久留米市	
久留米音楽協会 NPO 理事	平成 30 年 4 月 ～平成 31 年 3 月	特定非営利活動久留米音楽協会	
カワイこどもコンクール審査・鑑評	平成 30 年 12 月	カワイ音楽コンクール審議会	
久留米連合文化会理事	平成 30 年 4 月 ～平成 31 年 3 月	久留米連合文化会	
高等教育コンソーシアム広報交流部会員	平成 30 年 4 月 ～平成 31 年 3 月	高等教育コンソーシアム久留米	
久留米市都市計画審議会委員	平成 30 年 4 月	久留米市	
久留米市都市計画マスタープラン等策定委員	～平成 31 年 3 月		
他大学への讲習動等			
科目名	期間	出向先	
その他の記事項			
内容	年 月 日		
令和元年度 社会的活動計画			
1. 他団体への協力			
①久留米市文化芸術振興審議会委員			
②久留米音楽協会 NPO 理事			
③カワイこども・音楽コンクール審査			
④久留米連合文化会理事			
⑤高等教育コンソーシアム広報交流部会員			
⑥久留米市都市計画審議会委員			
⑦久留米市都市計画マスタープラン等策定委員会			

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

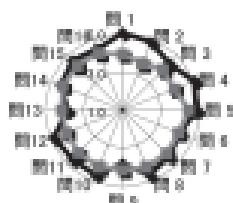
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった。
- 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
- 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
- 問 4 私はこの授業に関して、さらに趣んだ勉強をしたいと思う。
- 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
- 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
- 問 7 全回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
- 問 8 先生の話しが白黒分明で、聞き取りやすかった。
- 問 9 先生の板書の仕方や複数種機器（ドリオなど）の利用が効果的であった。
- 問 10 教科書・参考書・配布資料（プリント・楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
- 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
- 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
- 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適時に注意していた。
- 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
- 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
- 問 16 この授業を総合的に評価するときよ満点で何点になりますか。

- 3. そう思う
- 4. どちらかといえどそう思う
- 3. どちらともいえない
- 2. どちらかといえどそう思わない
- 1. そうは思わない

ピアノⅠ

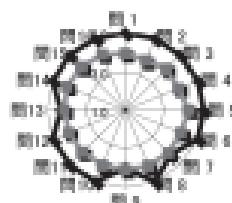
問 16 4.4



■教科平均 ■■■■■ 学科平均

ピアノⅢ

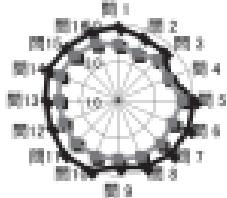
問 16 5.0



■教科平均 ■■■■■ 学科平均

ピアノ演奏法

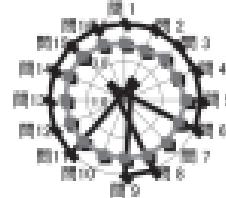
図 16 4.8



→教科平均 ←学科平均

音楽保育

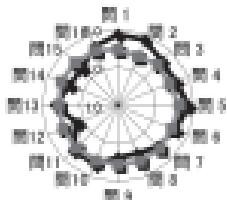
図 16 5.0



→教科平均 ←学科平均

チャイルドプロジェクト

図 16 4.3



→教科平均 ←学科平均

図 17 あなたはこの授業のために一回間当たり何分学習しましたか。

科 目 名	0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
ピアノ I (幼 1)	0	2	2	0	1
ピアノ II (幼 1)	0	0	2	0	4
ピアノ 演奏法 (幼 2)	0	1	1	1	0
音楽保育 (幼 2)	0	0	0	0	1
チャイルドプロジェクト (幼 2)	0	3	0	0	0

科 目 名	問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含めます）を行いましたか。（複数回答可）					
	予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
ピアノI（幼1）	3	4	4	4	2	0
ピアノII（幼1）	6	6	2	6	2	0
ピアノ演奏法（幼2）	1	3	2	2	1	0
音楽鑑賞（幼2）	1	1	1	0	1	0
チャイルドプロジェクト（幼2）	1	1	2	0	1	0

所属学科	職名	氏名	
フードデザイン	教授	山村 順子	
担当科目			
科目名	対象	必修・選択	
調理学	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修	
基礎調理学実習Ⅰ	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修	
基礎調理学実習Ⅱ	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修	
栄養士基礎演習（7回）	フードデザイン学科1年	卒業必修	
フードプロジェクトⅠ	フードデザイン学科1年	卒業必修	
フードプロジェクトⅡ	フードデザイン学科1年	卒業必修	
製菓・製パン演習	フードデザイン学科1年	卒業選択	
キャリアガイダンスⅠ	フードデザイン学科1年	卒業選択	
応用調理学実習Ⅰ	フードデザイン学科2年	栄養士必修	
応用調理学実習Ⅱ	フードデザイン学科2年	栄養士必修	
給食実務論	フードデザイン学科2年	卒業・栄養士必修	
校外給食管理実習Ⅰ	フードデザイン学科2年	栄養士必修	
フードプロジェクト	フードデザイン学科1・2年	卒業必修	
卒業セミナー	フードデザイン学科2年	卒業必修	
栄養士総合演習Ⅰ（2回）	フードデザイン学科2年	卒業選択	
キャリアガイダンスⅡ	フードデザイン学科2年	卒業選択	
研究分野			
1. 調理学の分野	<p>学生に対して、食品素材の知識や取り扱い方、調理機能を生かした基本的な調理操作などを習得させるにあたり、創意や指導方法、また指標となるための資料作成などの研究を行っている。</p>		
2. 食教育の分野	<p>管理栄養士という立場から、健康的な食生活、生病習慣予防などを観点に、食教育についての研究を行っている。</p>		
3. 栄養士養成の分野	<p>栄養士養成に関する研究。栄養士養成という立場から、カリキュラム論、方法論について研究を行っている。</p>		
4. キャリア教育の分野	<p>学生のキャリア形成、就業力養成に向けて、キャリア教育系の科目について、より効果的な授業内容や方法等を研究している。</p>		

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. 調理学に関する研究

- ・調理学関連科目について、より効率的な授業内容や方法等の研究を行い、本学研究紀要第 41 号に発表した。

2. 食教育に関する研究

- ・久留米大学医療センター小児科小児生活習慣病外来にて、患者への食生活指導を継続して行った。

3. 宗教士養成に関する研究

- ・「入学から卒業までのガイドブック九訂版」作成に向け、見直し等を学科の教員間で行い、内容・構成を検討した。
- ・新規開講演習科目について期年度の実施内容を見直し、次年度に向けて内容の検討を重ねた。

4. キャリア教育に関する研究

- ・学生のキャリア形成、就職力育成に向け、キャリア教育系科目について、より効率的な授業内容や方法等の研究を行った。

平成 30 年度の研究の成果

(論文)

1. 「栄養士養成研究（6）6 年間の学習支援取り組みの総括」共著 平成 30 年 9 月 『久留米信愛短期大学紀要第 41 号』(19~26)

(研究ノート)

1. 「調理学関連科目の習熟度について 第 2 報」共著 平成 30 年 9 月 『久留米信愛短期大学紀要第 41 号』(27~33)

2. 「「学生の成長」可視化のこころみ（1）～フードプロジェクト活動を通して～」共著 平成 30 年 9 月 『久留米信愛短期大学紀要第 41 号』(35~42)

(その他)

1. 「入学から卒業までのガイドブック九訂版」発行 共著 平成 30 年 4 月 フードデザイン学科
2. 「キャリア形成支援BOOK 2018」発行 共著 平成 30 年 4 月 キャリア形成支援推進室

平成 29 年度及び 28 年度の研究の成果

(論文)

1. 「栄養士養成研究（8）生産実態が学習支援効果に及ぼす影響－2」共著 平成 29 年 7 月 『久留米信愛女子学院短期大学紀要第 40 号』(28~34)

2. 「栄養士養成研究（4）学習支援に対する効果の 2 年間の分析」共著 平成 28 年 7 月 『久留米信愛女子学院短期大学紀要第 39 号』(21~25)

(発表)

1. 「子育て支援施設における食育の取り組み」共同 平成 29 年 9 月 17 日 第 43 回福岡県栄養改善学会 ナースプラザ福岡

(研究ノート)

1. 「調理学関連科目の習熟度について 第 1 報」共著 平成 29 年 7 月 『久留米信愛女子学院短期大学紀要第 40 号』(85~101)

2. 「久留米市の保育所・幼稚園・認定こども園における食育推進の実態 第 2 報」共著 平成 28 年 7 月 『久留米信愛女子学院短期大学紀要第 39 号』(51~66)

(その他)

1. 「入学から卒業までのガイドブック八訂版」発行 共著 平成 29 年 4 月 フードデザイン学科

2. 「キャリア形成支援BOOK 2017」発行 共著 平成 29 年 4 月 キャリア形成支援推進室

3. 「入学から卒業までのガイドブック七訂版」発行 共著 平成 28 年 4 月 フードデザイン学科

4. 「キャリア形成支援BOOK 2016」発行 共著 平成 28 年 4 月 キャリア形成支援推進室

本教科の主たる研究の成果（5箇以内）	
（論文）	
・「小児肥満における腹部CTの有用性」共著 「英語小児科医会会報第12号別冊」 平成10年10月 ・「保護者の肥満認識と児の生活背景」共著 「小児保健研究第38巻第2号」 平成11年3月 ・「子どもの肥満」共著 「久留米醫學會雑誌 第73巻 第5・6号 別冊」 平成22年6月	
（発表）	
・「小児生活習慣病外来における肥満改善は可能か」共同 前55回日本小児保健学会 於：札幌 平成26年9月	
所属学会および参加状況	
所属学会	参加状況おより役職等
日本栄養改善学会	大会等不参加
日本栄養士会	福岡県栄養改善学会参加
日本小児保健協会	大会等不参加
日本調理科学会	大会等不参加
令和元年度 研究計画	
1. 調理学に関する研究 ・調理学関連科目について、より効果的な授業内容や方法等の研究を行う。	
2. 食教育に関する研究 ・筑波大学医療センター小児科小児生活習慣病外来にて、患者への食生活指導を継続して行う。 ・健康的な食生活、生活習慣病予防などを視点に、食教育についての研究を行う。	
3. 栄養士養成に関する研究 ・「入学から卒業までのガイドブック」の見直し、お上り学生への学習支援についての検討を学科の教員間で行う。 ・アートプロジェクト関連の科目について、学科の教員間でアクティブラーニングを導入した授業内容を方針等の研究を行う。	
4. キャリア教育に関する研究 ・学生のキャリア形成、就職力育成に向け、キャリア教育系科目について、より効果的な授業内容や方針等の研究を行う。	

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30度のPD宣言と教育力向上に向けての計画

PD宣言

【目標】学生の学習意欲、理解度、技術の向上

【成果の指標】学生による授業評価の問2、問3、問4の項目の評価を向上させる。

教育力向上に向けての計画

小テスト、実技テストの実施、課題や提出物を設定して自主学習の機会を与え、興味を持って評価する。学生が能動的に授業に参加できるよう授業内容を検討する。

担当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
調理学	AA：1名、A：7名、B：3名、C：7名、D：0名	3.1
基礎調理学実習Ⅰ	AA：1名、A：6名、B：6名、C：5名、D：0名	3.3
基礎調理学実習Ⅲ	AA：1名、A：6名、B：7名、C：4名、D：0名	3.2
栄養士基礎演習	AA：10名、A：6名、B：2名、C：0名、D：0名	4.4
フードプロジェクトⅠ	AA：5名、A：10名、B：1名、C：2名、D：0名	4.0
フードプロジェクトⅢ	AA：4名、A：10名、B：4名、C：0名、D：0名	4.0
製菓・製パン演習	AA：1名、A：7名、B：1名、C：1名、D：0名	3.8
キャリアガイダンスⅠ	AA：0名、A：10名、B：4名、C：1名、D：0名	3.6
応用調理学実習Ⅰ	AA：0名、A：4名、B：10名、C：4名、D：0名	3.0
応用調理学実習Ⅲ	AA：2名、A：4名、B：5名、C：7名、D：0名	3.1
給食実務論	AA：4名、A：5名、B：3名、C：6名、D：0名	3.4
フードプロジェクト	AA：11名、A：3名、B：1名、C：4名、D：0名	4.1
卒業セミナー	AA：6名、A：10名、B：1名、C：1名、D：0名	4.2
栄養士総合演習Ⅲ	AA：0名、A：4名、B：11名、C：2名、D：0名	3.1
キャリアガイダンスⅢ	AA：3名、A：1名、B：2名、C：8名、D：1名	2.8

各授業の評価			
科目名	対象	必修・選択	
調理学	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修	
学生の授業評価を踏まえた自己評価			授業評価の図2(質問、自主学習)、図3(理解度)、図4(さらに進んだ勉強)の前年度との比較は、図2は3.0→4.0(+1.0)、図3は4.0→4.4(+0.4)、図4は3.8→4.4(+0.6)といずれも上がった。また、一週間当たりの学習時間も60分以上学習した人が6人(18人中)→8人(17人中)、自発的に学習・復習をした人は5人→9人と増加した。単元ごとに小テストを行い、自主学習を促した結果が成果にも表れたと考える。
ICT等を使用したアクティブラーニングの手伝を取り入れるには、準備時間や力量不足のため、テキスト中心の講義にとどまっている。			
授業についての自己評価			→できた できなかつた
最新の知見や動向をふ生えて講義ノートを更新した			5 → 4 → 3 → 2 → 1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた			5 → 4 → 3 → 2 → 1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した			5 → 4 → 3 → 2 → 1
ICT等を用いた参加型、発探型、実践型のアクティブラーニングを取り入れた			5 → 4 → 3 → 2 → 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った			5 → 4 → 3 → 2 → 1
厳格な授業評価を実施した			5 → 4 → 3 → 2 → 1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画			授業中に学生が質問したり意見を述べられるよう配慮したり、私語や授業態度について適切に注意ができるよう心がけたい。
科目名	対象	必修・選択	
基礎調理学実習Ⅰ	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修	
学生の授業評価を踏まえた自己評価			授業評価の図2、3、4の前年度との比較は、図2は4.2→4.6(+0.4)、図3は4.3→4.6(+0.3)、図4は4.5→4.7(+0.2)と大差なかった。下草でわからずつい授業だったとの意見も多かったので、今後も続けるべきだ。
授業についての自己評価			→できた できなかつた
最新の知見や動向をふ生えて講義ノートを更新した			5 → 4 → 3 → 2 → 1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた			5 → 4 → 3 → 2 → 1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した			5 → 4 → 3 → 2 → 1
ICT等を用いた参加型、発探型、実践型のアクティブラーニングを取り入れた			5 → 4 → 3 → 2 → 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った			5 → 4 → 3 → 2 → 1
厳格な授業評価を実施した			5 → 4 → 3 → 2 → 1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画			学生の自主的な学びや技術の向上につながる上手な実習内容を検討したい。

科目名	対象	必修・選択
基礎演習学術観II	フードデザイン学科1年	卒業・栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	<p>授業評価の問2, 3, 4の前年度との比較は、問2は4.1→4.5 (+0.4)、問3は4.1→4.3 (+0.2)、問4は4.2→4.6 (+0.4)とやや上がった。</p> <p>実習内容も前期より増えて、時間が延長し授業時間内に終わらないことも多いので、効率よく実習できるような内容の検討や指導を心がけたい。</p> <p>実習の統構成に関する学生からのリクエストがあったが、一部の意見のみに応えることもできないので、実習内容に上っては希望に応じることができるよう考えていただきたいと思う。</p>	
授業についての自己評価	一であった できなかった	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・(4) 3・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように連携しているかを伝えた	5・(4) 3・2・1	
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した	5・(4) 3・2・1	
ICT等を用いた座学型・発展型・実践型のアティピラーニングを取り入れた	5・4・3・2 (1)	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・(4) 3・2・1	
厳格な授業評価を実施した	5・(4) 3・2・1	
次年度のFD宣誓と 教育力向上に向けての計画	授業時間内に実習が終わるような内容の検討、適切な指導を心がける。また学生同士が、コミュニケーションを取りながら協力して実習に取り組むことができるような環境作りにも配慮したい。	
科目名	対象	必修・選択
栄養士基礎演習	フードデザイン学科1年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	<p>授業評価の問2, 3, 4の前年度との比較は、問2は3.5→3.3 (-0.2)、問3は3.7→3.7 (=0)、問4は3.4→3.7 (+0.3)、また総合評価は4.1→3.9 (-0.2)と低くなっていた。一週間当たりの学習時間42.30分以上学習した人がまん (17人中) →7人 (18人中)、自発的に予習・復習をした人は2人→10人と増加していた。栄養士養成課程の初年次教育科目でもあるので、学習意欲を引き出すような工夫が必要であると考える。</p>	
授業についての自己評価	一であった できなかった	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・(4) 3・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように連携しているかを伝えた	5・(4) 3・2・1	
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した	5・(4) 3・2・1	
ICT等を用いた座学型・発展型・実践型のアティピラーニングを取り入れた	5・4・3・2 (1)	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・(3) 2・1	
厳格な授業評価を実施した	5・(4) 3・2・1	
次年度のFD宣誓と 教育力向上に向けての計画	担当教員とも連携を取りながら、学生の学習意欲、理解度の向上に向けて授業改善に努めたい。	

科目名	対象	必修・選択
フードプロジェクトⅠ	フードデザイン学科1年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		新規開講科目のため学内でも試行錯誤の取り組みであったが、授業評価の問2は3.6、問3は3.8、問4は3.7、総合評価3.7と結果は思わしくなかった。学生が主体的に計画・実施・評価する内容の科目であるため、改題に向けて担当者間で検討したい。
授業についての自己評価		一できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4(3)・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4(3)・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通して教授・指導した		5・4(3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4(3)・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4(3)・2・1
融通な授業評価を実施した		5・4(3)・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		授業評価やワーキングにおける学生の意見を参考に、学習意欲を引き出すような授業内容を検討し、授業改善に取り組む。
科目名	対象	必修・選択
フードプロジェクトⅡ	フードデザイン学科1年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		授業評価の問2は3.7、問3は3.8、問4は3.8、総合評価3.5と結果は思わしくなかった。「フードプロジェクトⅠ」と同様、新規開講科目のため、教員と学生との意思疎通がうまくできていなかつたかもしれない。改題に向けて担当者間で検討したい。
授業についての自己評価		一できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4(3)・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4(3)・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通して教授・指導した		5・4(3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4(3)・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4(3)・2・1
融通な授業評価を実施した		5・4(3)・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		授業のテーマや目的等をきちんと説明し、学生の意見も聞きながら主体的に取り組むことができるような授業内容を検討し、改善に取り組む。

科目名	対象	必修・選択
個別・個別演習	フードデザイン学科1年	卒業選択
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		授業評価の問2、3、4の前年度との比較は、問2は4.1→4.2(+0.1)、問3は4.1→4.8(+0.8)、問4は4.2→4.7(+0.5)とやや上がった。前年度まではほぼ全員が受講していたが、今回は約半数の学生が興味を持って選択し受講した。少人数での実習だったため、受講中の意見等も私隣の授業に反映しながら実施できた。
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4 (3)	2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 (4)	3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 (4)	3・2・1
JCT等を用いた参加型・発展型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3 (2)	1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の理解度を確認しながら授業を行った	5・4・3 (2)	1
厳格な授業評価を実施した	5 (4)	3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	開講当初の目的であったお楽しみの授業も残しつつ、技術の向上やさらなるステップアップにつながるよう、授業内容を検討したい。	
科目名	対象	必修・選択
キャリアガイダンスⅠ	フードデザイン学科1年	卒業選択
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		授業評価の問2、3、4の前年度との比較は、問2は3.6→3.6(±0)、問3は3.9→3.8(-0.1)、問4は3.9→3.9(±0)、また総合評価は4.1→4.2(+0.1)と大差なかった。ただし、問1(居眠り・私語・メール)が3.8と低かったので、受講姿勢・態度等の意識付けを徹底したい。
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4)	3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 (4)	3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4 (3)	2・1
JCT等を用いた参加型・発展型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 (4)	3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の理解度を確認しながら授業を行った	5・4・3 (2)	1
厳格な授業評価を実施した	5 (4)	3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	授業評価の問1、2、3、4の項目の評価が向上するよう、授業内容や方法を見直しを図る。学習意欲を引き出せるような工夫を検討したい。	

科目名	対象	必修・選択
応用調理実習Ⅰ	フードデザイン学科2年	栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価		<p>授業評価の問2,3,4の前年度との比較は、問2は4.1→4.3(+0.2)、問3は4.1→4.2(+0.1)、問4は4.3→4.4(+0.1)と大差なかった。</p> <p>実習内容も1年次より高度になり、時間が延長し授業時間内に終わらないことも多いので、効率よく実習できるような内容の検討や指導を心がけたい。また学生の授業態度について適切に注意するよう心がけたい。</p>
授業についての自己評価		→できた できなかった
最新の加見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4)	3・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 (4)	3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 (4)	3・2・1
BCT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3	2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の理解度を確認しながら授業を行った	5 (4)	3・2・1
適格な授業評価を実施した	5 (4)	3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	授業時間内に実習が終わるような内容の検討、適切な指導を心がける。	
科目名	対象	必修・選択
応用調理実習Ⅱ	フードデザイン学科3年	栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価		<p>授業評価の問2,3,4の前年度との比較は、問2は4.1→4.4(+0.3)、問3は4.1→4.6(+0.5)、問4は4.1→4.6(+0.5)、総合評価も4.1→4.4(+0.3)とやや上がった。</p> <p>入学時との比較では調理技術も向上したとは思うが、栄養士としての実践力まで身につけさせることができるように指導できたかについては、あまり自信もないでの、今後の課題としたい。</p>
授業についての自己評価		→できた できなかった
最新の加見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4)	3・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 (4)	3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 (4)	3・2・1
BCT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3	2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の理解度を確認しながら授業を行った	5 (4)	3・2・1
適格な授業評価を実施した	5 (4)	3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	授業評価の問2,3,4のさらなる向上、また栄養士としての実践的な知識と技術が身につくよう効果的な授業内容や方法等を検討する。	

科目名	対象	必修・選択
給食実験論	フードデザイン学科2年	卒業・愛護士必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	授業評価の問2、3、4の前年度との比較は、問2は4.2→3.9（-0.3）、問3は3.9→3.9（±0）、問4は3.9→3.7（-0.2）と低くなっていた。問1（居眠り・私語・メール）も3.9と低かったので、受講姿勢・態度等の意識付けを徹底したい。	
授業についての自己評価		一できた できなかった+
最新の知見や動向をふまえて調査ノートを更新した	5・4	3・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4	3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した	5・4	3・2・1
ICT等を用いた座学型・実習型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4	3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4	3・2・1
顧客な授業評価を実施した	5・4	3・2・1
次年度のFD宣誓と 教育力向上に向けての計画	愛護士免許必修科目である「校外幼食管理実習Ⅰ」の事前・事後指導の科目であるので、学生が目的意識を持って授業に臨むことができるよう、学習意欲を引き出し、理解度の向上につながるような授業内容を検討し、授業評価の問1、2、3、4の評価を向上させる。	
科目名	対象	必修・選択
フードプロジェクト	フードデザイン学科1・2年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	新規開設科目で前年度の1年後期から2年前期にかけての1年間通年の授業のため、学科内でも試行錯誤の取り組みであった。学生が主体的に計画・実施・評価する内容の科目であるという主旨がうまく伝わらなかったのか、授業評価の問1は3.8、問2は3.6、問3は3.9、問4は3.5と結果は思わしくなかった。	
授業についての自己評価		一できた できなかった+
最新の知見や動向をふまえて調査ノートを更新した	5・4	3・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4	3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した	5・4	3・2・1
ICT等を用いた座学型・実習型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4	3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4	3・2・1
顧客な授業評価を実施した	5・4	3・2・1
次年度のFD宣誓と 教育力向上に向けての計画	次年度から学期ごとの科目になるため、今回の結果を参考に、授業のテーマや目的等をきちんと説明し、学生の意見も聞きながら主体的に取り組むができるような授業内容を検討し、改進に取り組む。	

科目名	対象	必修・選択
卒業セミナー	フードデザイン学科2年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価		授業評価はどれも4.0以上であった。前年度までと違い、2年後期の半年間だけの活動であったが、前期の「フードプロジェクト」からの継続の内容もあり、また他の合った学生同士で少人数での活動でもあったので、充実した授業であったと思う。
授業についての自己評価		→できた→できなかつた→
最初の細見不動時をふまえて講義ノートを更新した		5・4(3)・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4(3)・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4(3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアティビティブーニングを取り入れた		5・4(3)・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3(2)・1
順序的な授業評価を実施した		5・4(3)・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		次年度からは学期ごとのフードプロジェクト活動に踏襲されるため、今回の意見を参考にしながら、学生が主体的に取り組むことができるような授業内容を検討し、取り組みたい。
科目名	対象	必修・選択
栄養士総合演習Ⅲ（3回）	フードデザイン学科2年	卒業選択
学生の授業評価を踏まえた自己評価		授業評価の問2,3,4の前半面との比較は、問2は3.3→4.1(+0.8)、問3は3.6→3.7(+0.1)、問4は3.5→3.6(+0.1)、総合評価も3.7→4.1(+0.4)とやや上がった。一方、一週間当たりの学習時間は30分以上学習した人が7人（18人中）→2人（18人中）、授業時間以外に学習していない人は3人→6人と、前年度よりも悪い結果であった。 栄養士必修科目の総まとめという意図を理解させ、学習意欲を向上させるような工夫が必要であると考える。
授業についての自己評価		→できた→できなかつた→
最初の細見不動時をふまえて講義ノートを更新した		5・4(3)・3・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4(3)・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4(3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアティビティブーニングを取り入れた		5・4・3・2(1)
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3(2)・1
順序的な授業評価を実施した		5・4(3)・3・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		担当教員とも連携を取りながら、学生の学習意欲、理解度の向上に向けて授業改善に努めたい。

科目名	対象	必修・選択	
キャリアガイダンスⅡ	アーチデザイン学科2年	卒業選択	
学生の授業評価を踏まえた自己評価		授業評価の問2、3、4の前年度との比較は、問2は3.8→3.7（-0.1）、問3は3.9→3.8（-0.1）、問4は3.6→3.8（+0.2）、また総合評価は3.9→3.9（±0）と大差なかった。ただ、問1〔居眠り・私語・メール〕が3.9と高かったので、受講姿勢・態度等の意識付けを徹底したい。	
授業についての自己評価		一できなかつた	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4)	3・2・1	
授業内容が実際の仕事や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 (4)	3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4 (3)	3・2・1	
PC等を用いた参加型・発達型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 (4)	3・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3 (2)	2・1	
個別な授業評価を実施した	5 (4)	3・2・1	
次年度のFD宣傳と 教育力向上に向けての計画	授業評価の問1、2、3、4の項目の評価が向上するよう、授業内容や方法の見直しを図る。学習意欲を引き出せるような工夫を検討したい。		

平成30年度 社会的活動報告

講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
乳幼児期の食事（講義・実習）①	30・8・22	筑後地方保健協会	久留米国際会館
乳幼児期の食事（講義・実習）②	30・8・24	筑後地方保健協会	久留米国際会館
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
小児生活習慣病外来にて栄養指導（週1回） JALくるめ広報誌「With You」レシピ掲載 西日本新聞くるめメディア レシピ掲載 生活協同組合アーバンアソシエーション レシピ掲載	30・4・1～31・3・31	久大医療ｾﾝﾀｰ・小児科 JALくるめ 西日本新聞社 生活協同組合アーバンアソシエーション	
久留米市食育推進委員会 地域地酒認定会員 久留米市中央卸売市場 青果取引委員会委員 高等教育コンソーシアム久留米小中高連携委員会委員 久留米市学校給食料理コンクール審査員	30・4・1～31・3・31 30・4・1～31・3・31 30・4・1～31・3・31 30・8・17	久留米市 久留米市 高等教育コンソーシアム久留米 久留米市教育委員会	
他大学への非常勤等			
科目名	期間	担当者	
「健康教育実習」	30・6～30・6（前期6回）	久留米大学	
その他特記事項			
内容	年 月 日		
なし			
令和元年度 社会的活動計画			
○講演等			
・筑後地方保健協会からの依頼によるもの ・熊川市保健協会からの依頼によるもの ・高等教育コンソーシアム久留米共同講義			
○他団体等への協力			
・久留米大学医療センター 小児科小児生活習慣病外来・栄養指導（31・4～2・3 既過金曜日午後） ・久留米市中央卸売市場取引委員会 青果取引委員会委員（31・4・1～1・31・30） ・高等教育コンソーシアム久留米小中高連携委員会委員（31・4～2・3） ・JALくるめ広報誌「With You」西日本新聞くるめメディア（31・4月号～2・3月号）			
○他大学への非常勤			
・久留米大学「健康教育実習」（1・5～1・6 前期6回）			

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

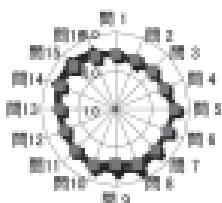
＜質問項目＞

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった。
- 問 2 私はわからない所には質問したり、自分で調べたりした。
- 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
- 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
- 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
- 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
- 問 7 毎回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
- 問 8 先生の話し方や態度で、聞き取りやすかった。
- 問 9 先生の板書の仕方や授業機器（プロジェクタ等）の利用が効果的であった。
- 問 10 教科書・参考書・配布資料（ドリット・復習など）は、授業を理解するのに役立った。
- 問 11 この授業（科目）の成績評価の方針について、手書きちゃんと説明があった。
- 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
- 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、常に注意していた。
- 問 14 先生は黙算を持って授業を行っていた。
- 問 15 先生は学生に対して運営と導教の念をもって、授業を行っていた。
- 問 16 この授業を総合的に評価すると 5点満点で何点になりますか。

0. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

キャリアガイダンス I

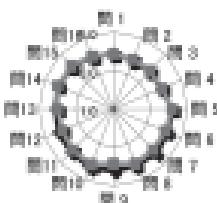
問 16 4.2



■ 教科平均 ■ 学科平均

キャリアガイダンス II

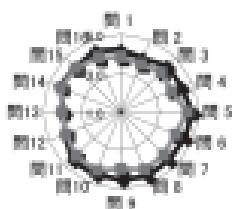
問 16 3.9



■ 教科平均 ■ 学科平均

調理学

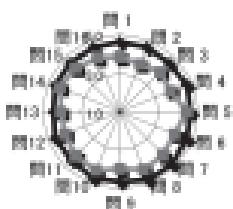
問 16 4.4



■—教科平均 ■—学科平均

基礎調理学実習 I

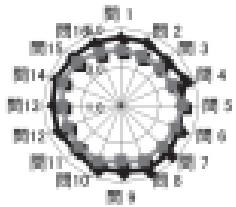
問 16 4.6



■—教科平均 ■—学科平均

基礎調理学実習 II

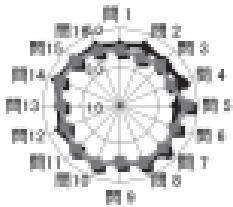
問 16 4.5



■—教科平均 ■—学科平均

応用調理学実習 I

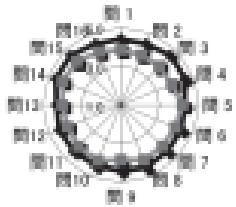
問 16 4.3



■—教科平均 ■—学科平均

応用調理学実習 II

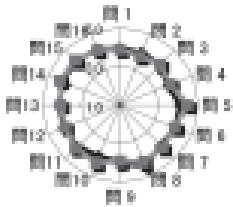
問 16 4.4



■—教科平均 ■—学科平均

検査実務論

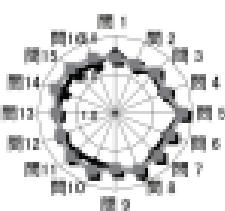
問 16 4.1



■—教科平均 ■—学科平均

フードプロジェクトⅠ

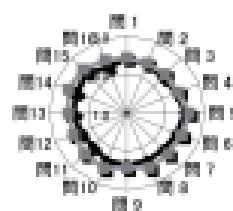
回 16 3.7



➡一般平均 ⚡学科平均

フードプロジェクトⅡ

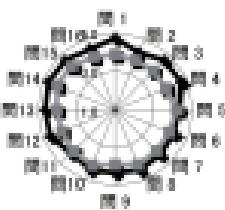
回 16 3.5



➡一般平均 ⚡学科平均

製菓・製パン演習

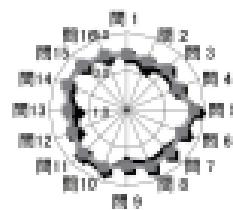
回 16 4.4



➡一般平均 ⚡学科平均

栄養士基礎演習

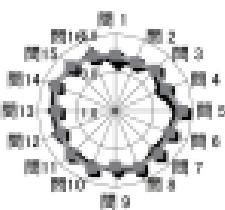
回 16 3.9



➡一般平均 ⚡学科平均

フードプロジェクト

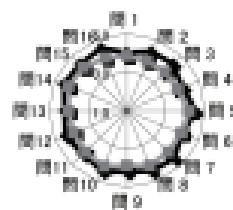
回 16 4.2



➡一般平均 ⚡学科平均

卒業セミナー

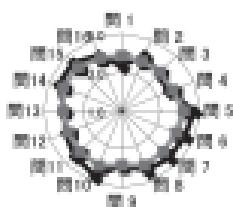
回 16 4.5



➡一般平均 ⚡学科平均

栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ

問16 4.1



➡教科平均　▬▬▬学科平均

問17 もなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。

科 目 名	0分	1~30分	31~60分	61~90分	91分以上
キャリアガイダンスⅠ(フ1)	1	4	1	0	0
キャリアガイダンスⅡ(フ2)	1	2	2	0	0
調理学(フ1)	1	6	5	4	1
基礎調理学実習Ⅰ(フ1)	2	4	5	4	2
基礎調理学実習Ⅱ(フ1)	1	4	3	1	2
応用調理学実習Ⅰ(フ2)	4	4	4	2	2
応用調理学実習Ⅱ(フ2)	3	2	4	0	2
給食実務論(フ2)	6	1	3	0	1
コードプロジェクトⅠ(フ1)	13	1	1	1	0
コードプロジェクトⅡ(フ1)	8	6	0	0	0
製菓・製パン演習(フ1)	5	2	1	0	0
栄養士基礎演習(フ1)	3	7	4	1	2
コードプロジェクトⅢ(フ2)	14	3	0	0	0
卒業セミナー(フ2)	13	2	0	0	0
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ(フ2)	6	6	1	0	1

科 目 名	問 18 あなたは授業時間以外にどのような学習(独学・授業の復習も含みます)を行いましたか。(複数回答可)					
	予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
キャリアガイダンスⅠ(フ1)	0	0	7	0	0	5
キャリアガイダンスⅡ(フ2)	0	1	3	0	0	7
調理学(フ1)	1	6	2	13	2	0
基礎調理学実習Ⅰ(フ1)	0	2	8	9	1	0
基礎調理学実習Ⅱ(フ1)	0	4	0	6	1	1
応用調理学実習Ⅰ(フ2)	0	1	13	1	0	2
応用調理学実習Ⅱ(フ2)	0	0	9	1	0	2
給食実務論(フ2)	0	0	8	0	1	4
フードプロジェクトⅠ(フ1)	1	2	2	1	0	8
フードプロジェクトⅡ(フ1)	0	0	6	0	0	7
製菓・製パン実習(フ1)	0	1	4	0	0	2
栄養士基礎演習(フ1)	1	8	14	2	1	0
コードプロジェクト(フ2)	0	0	3	0	1	12
卒業セミナー(フ2)	0	1	1	0	1	10
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ(フ2)	2	2	2	2	1	9

所属学科	職名	氏名
フードデザイン	教授	石井妙子
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
臨床栄養学概論	フードデザイン学科2年	卒業選択・免許必修
臨床栄養学実習	フードデザイン学科2年	卒業選択・免許必修
給食計画論	フードデザイン学科1年	卒業必修・免許必修
給食管理実習Ⅰ	フードデザイン学科1年	卒業選択・免許必修
給食管理実習Ⅱ	フードデザイン学科2年	卒業選択・免許必修
栄養士基礎講習	フードデザイン学科1年	卒業必修
栄養士総合講習Ⅰ	フードデザイン学科2年	卒業選択
校外給食管理実習Ⅰ	フードデザイン学科2年	卒業選択
研究分野		
1. 糖尿病の分野	糖尿病療養支援のために糖尿病看護指導博士会 (KDJE) ならびに LODE の組織運営を通じてその方法や対策について研究。対象者を自らの意思で行動覚悟に通くための方法や医療従事者相互の連携について研究している。	
2. 高齢者栄養の分野	高齢者の低栄養や重症化予防対策のための多職種連携や摂食・嚥下についての研究。とくに在宅高齢者支援について研究し、一般社団法人日本在宅栄養管理学会に属して、在宅医療栄養事務指導を行っている。	
3. 栄養士養成の分野	栄養士の養成に関する研究。栄養士養成に関する方法論について、栄養士養成に携わっている立場から研究を行っている。	
4. 栄養士会活動	(公社) 福岡県栄養士会理事としての活動を通じて、地域包括ケアシステムのなかで栄養士が組織の一員として位置付けられるべく、活動している。	

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. 糖尿病の分野

「福岡糖尿病看護師専士会（CDC）」の中央認定委員として、「ふくおか市民糖尿病教室」の実行委員として中心的活動。「クオータリー」や「糖尿病フェア」の企画運営、「福岡 CDC」認定試験の試験官として活動。広報委員・会計監査も務めている。「日本糖尿病看護指導士（CDC）連絡会」では、顧問として定期講演会の企画運営に携わり、10月26日糖尿病～において「高齢者糖尿病管理～フレイム・サンコペニア・認知症～」というテーマで座長を務めた。

2. 高齢者栄養の分野

糸島市の地域ケア会議と訪問介事務の担当理事として活動。コーディネーターの報告書確認などをスッタブアップ研修会（5回実施）を企画・運営した。最大成としての「糸島地域ケア会議の手引き」の編集に携わった。

在宅訪問看護師に同行し VE（嚥下内視鏡）による栄養・嚥下評価に基づいて栄養食事指導を実施。

「日本在宅看護管理学会」の九州・沖縄ブロック長補佐として、福岡支部長として認定栄養士の指導や連絡会や認同検討会を開催。定期の九州・沖縄ブロック研修会（9月、2月）では司会・座長を務めた。

「福岡食支援の会」「在宅ネットワーク福岡中央」の会員として企画運営に携わる。講演会では講師・コメントターを務め、多職種との連携を図る。

鳥栖保健福祉事務所からの依頼で「地域包括ケアにおける栄養士の役割」というタイトルで講演した。

南筑後保健福祉観察事務所の依頼で「高齢者の健傘・食生活支援のための関係者研修会」の翻訳とワーキング会議にてコメントターを務めた。

筑紫野市居宅介護支援事業者連絡会に参加し、地域地域ケア会議でのグループワークにおいて栄養士の視点からの発言をした。

3. 栄養士会活動

福岡県栄養士会理事として、県栄養士会運営について理事会（2ヶ月に1回開催）、総会、栄養士大会並びに栄養改善学会など、福岡支那理事として企画運営会議（2ヶ月に1回）を開催。今年は福岡県の依頼で「健那21世紀福岡県大会」（天神スカイホール）の栄養士のブースの企画・運営をした。また、昨年に引き続き、糸島市事業の発展と充実ならびに多職種連携に貢献した。

4. 栄養士養成の分野

栄養士界についての情報とその魅力について学生に伝え、就職支援や援助を積極的に実施。

平成 30 年度の研究の成果

（論文）

- 「栄養士養成研究（6）「6年間の学習支援取り組みの検討」」共著 平成 30 年 9 月
『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』(19~26)
- 「認理学問題群目の習熟度について 第 2 報」共著 平成 30 年 3 月
『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』(27~34)
- 「学生の成長」可視化のこころみ（1）－アートプロジェクト活動を通して－」共著 平成 30 年 9 月
『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』(35~42)

平成 29 年度及び 28 年度の研究の成果	
(論文)	
1. 「栄養士活動研究（5）生活実態が学習支援効果に及ぼす影響」共著 平成 29 年 7 月 『久留米啓愛女学院短期大学研究紀要第 40 号』(23~34)	
(その他)	
2. 「調理学関連科目の習熟度について 第 1 報」主宰 平成 29 年 3 月 『久留米啓愛女学院短期大学研究紀要第 40 号』(93~101)	
3. 食塩排泄量「見える化」研究—2 年間実施した調査結果を解析して、高血圧学会、日本栄養改善学会で発表し、「Self-monitoring of urinary salt excretion as a method of salt-reduction education in parallel, randomized trial involving two groups」のタイトルで英文投稿（未登）	
本教員の主たる研究の成果（5 篇以内）	
1 「H-23 に変更後、難治性下痢が改善した直痘肺炎」共著平成 29 年 1 月日本病態栄養学会補話	
所属学会および参加状況	
所属学会	参加状況および役職等
日本病態栄養学会	学術集会参加。学術評議員。
日本肺臓・喘息学会	学術集会不参加。
日本在宅栄養管理学会	学術集会参加。九州・沖縄ブロック研修会企画委員会参加。
日本栄養士会	総合参加。(公社)福岡県栄養士会理事
日本糖尿病学会・九州地方会	参加。
日本糖尿病学会「糖尿病学の進歩」	参加
福岡県食感覚カンファレンス	日本糖尿病学会「糖尿病学の進歩」参加。 年次国際大会に参加。司会人
沖縄リハビリテーション栄養研究会	参加。
在宅ネットワーク福岡中央	講演会参加。司会人
令和元年度 研究計画	
(その他)	
1. 研究ノート「「学生の成長」の可視化のこころみーフードプロジェクト活動を通してー」	
2. 研究ノート「調理学関連科目の習熟度について」第 2 報	
3. 糖尿病の分野	
糖尿病療養指導士活動の継続。とくに「ふくおか市民糖尿病教室」は栄養士だけではなく、医師・歯科医師・看護師・薬剤師・臨床検査技師・運動指導士など多職種との連携事業で、実行委員長の医師とともにコメダガルテンの調整を図る立場であるので、昨年より洗練された内容になるように、充分な検討と準備をしたいと考えている。	
4. 高齢者栄養の分野	
地域連携多職種ケア会議参加と活動継続。在宅高齢者に対する地域ケアの一員としての位置づけが定着できるように努力したい。「日本在宅栄養管理学会」活動の継続。	
5. 栄養士会活動	
今年度も理事としての活動を継続。栄養士界の活性化と整備のために努力する。	

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

【目標】

わかりやすい授業法の工夫、学生の理解度確認。

【成果の指標】

学生による授業評価アンケートの問1「易懂り」、問2「質問実行」問3「授業内容の理解」、問6「本科目目標・他科目との関連理解」、問7「毎時のテーマ・目的理解」の平均ポイントを指標とする

担当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
臨床栄養学概論	AA： 5名、A： 5名、B： 3名、C： 5名、D： 0名	3.6
臨床栄養学実習	AA： 4名、A： 8名、B： 8名、C： 2名、D： 0名	3.7
倫理評議論	AA： 4名、A： 11名、B： 1名、C： 2名、D： 0名	3.9
倫理管理実習Ⅰ	AA： 2名、A： 7名、B： 5名、C： 4名、D： 0名	3.4
倫理管理実習Ⅱ	AA： 2名、A： 7名、B： 7名、C： 2名、D： 0名	3.6
校外倫理管理実習Ⅱ	AA： 0名、A： 3名、B： 3名、C： 0名、D： 0名	3.4
栄養士基礎演習	AA： 10名、A： 6名、B： 2名、C： 0名、D： 0名	4.4
栄養士総合演習Ⅲ	AA： 0名、A： 4名、B： 11名、C： 2名、D： 0名	3.1
	AA： 0名、A： 0名、B： 0名、C： 0名、D： 0名	

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
臨床栄養学概論	アードデザイン学科2年	卒業選択・免許必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	認合評価で4.4であり、(問2)と(問3)以外は4点以上で、「わかりやすい」授業を目標に、急性期の病院勤務で経験した病態の例を示したり、学生が興味を持つようなエピソードを挙げたりするように、工夫したことの効果があったのではないかと思う。 前回の振り返りをすることで、ポイントを掴みやすくするとともに、クイズ形式の質問で学生との双方向の授業を展開したが、限られた学生しか答えて(問2)、学生自身の理解の努力3点、(問3) 3.9 学生に実力がついたと思われる域まで届けなかつたので、工夫が必要。	

授業についての自己評価	→できた できなかつた
品質の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4・3・2・1
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教科・指導した	5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・演説型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した	5・4・3・2・1

科目名	対象	必修・選択	
臨床栄養学実習	フードデザイン学科2年	卒業選択・免許必修	
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		全ての項目が4点以上で、総合的評価は4.4だった。実習の授業であり、グループで実習する関係で学生個々人に対する評価や理解度の確認が難しい。「臨床栄養学概論」で学んだ内容との相連で、病態と治療食について横断に基づいて正しく理解することが出来るように、学生個々人に評価の基準になる仕掛けを工夫することが必要だと思う。	
授業についての自己評価		→できた できなかった	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 (4) 4・3・2・1	
教長内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 (4) 3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5 (4) 3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4 (3) 2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の個別度を確認しながら授業を行った		5 (4) 3・2・1	
厳格な授業評価を実施した		5 (4) 4・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	実習の都度に、レポートを提出させ、「臨床栄養学概論」と関連付けて理解するよう課題を出す。このことで学生の理解を深め、かつ個々人に対する評価も適切になるとと思う。		
科目名	対象	必修・選択	
給食計画論	フードデザイン学科1年	卒業必修・免許必修	
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		総合的評価は4.3ではあったが、(問1) 説明りなど(問2) 調査や自発的学習(問4) 学習意欲(問9) 備蓄などの効果的利用(問13) 授業態度の注意の項目が4.0に達していないかった。後輩士にとって実際に直面した内容の科目であるだけに、興味を持たせたいと思う。横断の工夫、とくにレジュメや板書や双方内の授業の仕掛けを考えたいと思う。	
授業についての自己評価		→できた できなかった	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3) 3・2・1	
教長内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 (4) 3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5 (4) 3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4 (3) 2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の個別度を確認しながら授業を行った		5 (4) 3・2・1	
厳格な授業評価を実施した		5 (4) 4・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	学生が誇張を示すような授業の振舞や説得を工夫する。学生の授業評価の全ての項目4.0以上を目指す。		

科目名	対象	必修・選択
給食管理実習Ⅰ	フードデザイン学科1年	卒業選択・免許必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価は4.3であり、(問10)板書などの効率的利用3.9以外は全ての項目で4.0以上の評価だった。実習の授業でひとつチームで協力して大量調理を作成し供食するので、自分の役割分担をしっかりととらねた必要がある。そのための事前学習は必須で、学生にはレシピをよく読みこんで、実際の実習では付帯作業も含めてタイムスケジュール通り実習するように指導している。実習を通して給食管理を理解し、栄養士の仕事を目指すようにしたいと思う。	
授業についての自己評価		→できき できなかっか→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4 (3)・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構築しているかを伝えた	5 (4)・3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 (4)・3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4 (3)・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4 (3)・2・1	
厳格な授業評価を実施した	5 (4)・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	実習の授業なので授業する機会は少ないが、学生が1年生の時に受講した「給食評議論」の内容と関連づけを、実習計画や料食やまとめるプロセスで丁寧に確認していく、学習効果を上げたいと思う。	
科目名	対象	修・選択
給食管理実習Ⅱ	フードデザイン学科2年	卒業選択・免許必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価は4.8であった。(問2)分からぬ時の質問など(問9)板書などの利用がわずかに4.0に届かなかった。1年生の給食管理実習Ⅰと比べて食数も増えて、内容もさらに高度になるが理論・技術とともに進歩するように指導したいと考える。	
授業についての自己評価		→できき できなかっか→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4 (3)・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構築しているかを伝えた	5 (4)・3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 (4)・3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4 (3)・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4 (3)・2・1	
厳格な授業評価を実施した	5 (4)・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	1年生の「給食管理実習Ⅰ」に積み重ねが出来るような実習展開を工夫する。校外実習に備えても衛生管理・作業管理・食材管理をはじめ施設・設備管理についても理解を深めるように指導する。	

科目名	対象	必修・選択
栄養士基礎演習（1回）	フードデザイン学科1年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	学生の学習意欲を引き出すように、授業展開を工夫しなければいけないと思う。オムニバスの授業であるが、図2) 学生の自主的な学習の評価が低く、授業を受けっぱなしにしていることが懇願される。何かしらの仕掛けを工夫する必要を感じた。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 - 4 () 3 - 2 - 1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		(5) - 4 - 3 - 2 - 1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		(5) - 4 - 3 - 2 - 1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 - 4 () 3 - 2 - 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5 - 4 () 3 - 2 - 1
厳格な授業評価を実施した		(5) - 4 - 3 - 2 - 1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	担当は「栄養士の基本? : 成められる栄養士像について学ぶ」の1回のみであるが、栄養士の仕事のフィールドの広さと魅力を伝える。学生が自分の未来についての夢や方向性を考える機会になるように授業を展開する。	
科目名	対象	必修・選択
栄養士総合演習II（6回）	フードデザイン学科2年	卒業選択
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	栄養士実力認定試験を踏まえて、「臨床栄養学概論」8回と「給食管理論」3回が担当である。事前に前年の栄養士実力認定試験をして、学生の理解度に合わせて詳しく説明したのちに課題問題を作成し確認している。学生によって難度差があり、図1) 展開し、メールの項目の評価が低いのもそのせいだと思う。関心がない学生に卒業論の集大成として取り組ませるようにしたいと思う。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		(5) - 4 - 3 - 2 - 1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 - (4) 3 - 2 - 1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5 - (4) 3 - 2 - 1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 - 4 () 3 - 2 - 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		(5) - 4 - 3 - 2 - 1
厳格な授業評価を実施した		(5) - 4 - 3 - 2 - 1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	卒業前の認定とめとして、前向きに学生が取り組むように講導して信頼栄養士としての質の担保に努めたい。	

平成30年度 社会的活動報告			
講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
【講演】 「免疫を挙げる食生活」 「地域包括ケアにおける栄養士の役割」	2018.4.20 2018.9.04	サンカルナ福岡 島原保健福祉事務所	サンカルナ福岡 島原保健福祉事務所
「高齢者の健康・食生活支援」	2018.3.25	南筑後保健福祉振興事務所	柳川総合庁舎
【座長】 認知症のリハビリと食行動～MCI から考え る～ 高齢者糖尿病管理～フレイル・サルコペニア・認知症～ 地域連携ワーキング	2018.9.29	日本在宅栄養管理学会	中村学園大学
高齢者糖尿病管理～フレイル・サルコペニア・認知症～ 地域連携ワーキング	2018.10.28	福岡CDE 連絡協議会	福岡電気ビル
地域連携ワーキング	2018.12.17	南筑後保健福祉振興事務所	柳川総合庁舎
栄養管理プロセス～症例の書き方～	2019.2.09	日本在宅栄養管理学会	中村学園大学
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
【栄養士会開催】 福岡県栄養士会理事 健庫 21 世纪福岡大会 福岡市民の健康を曾と口から守る團い 糸島地域ケア会議 【糖尿病開催】 福岡 LCDP (中央認定委員、試験官、応接委員、 会計監査)	年間 (12回) 2018.10.21 2018.4.6~6.10 年間 (8回) 年間 (5回)	福岡県栄養士会 福岡県 福岡市歯科医師会 糸島市 福岡 CDE	
福岡 CDE 連絡協議会開催	年間 (5.8. 8.2. 12.1. 3.12. 10.28 講演会)	福岡 CDE 連絡協議会	
【高齢者栄養開催】 日本在宅栄養管理学会 福岡支部長 福岡食支援の会 世話人 在宅ネットワーク福岡中央 世話人	年間 (5.9~6.10 ウイルアーヴィング、9.29~2.9 九州・沖縄ブロック研修会) (10.21 篠田公民館)	日本在宅栄養管理学会 福岡食支援の会 在宅ネットワーク福岡中央	
福岡扶桑旗下カンファレンス 世話人 【その他】 食と健康の和	年間 (4.21) 年間	福岡扶桑旗下カンファレンス 「食と健康の和」協議会	

他大学への非常勤等		
科目名	期間	出向先
なし		
その他特記事項		
内容	年 月 日	
なし		
令和元年度　社会的活動計画		
<p>平成 30 年と同様に、栄養士会関係、糖尿病関係、高齢者栄養関係など活動を継続し発展させたいと思っています。とりわけ、日本在宅栄養管理学会の 2020 年学術委員会は、初めての就みで「九州・沖縄ブロック」と「関西・中国・四国ブロック」の会場で開催され、学術集会の実行委員長になっているので、成功させるべく努力していきたい。令和元年から日本在宅栄養管理学会の理事・評議員に任命されている。ティアワーカの在宅高齢者に対する栄養管理・サービスと、糖尿病分野で栄養士はもとより施設職員と連携して活動の予定である。昨年スタートした「食と健康の和」協議会は久留米・福岡短期大学と NPO 法人栄養ケアもっこと筑紫地区社会福祉協議会で構成する団体で聴覚障害者の料理実習を地域ごとに開催し聴覚障害者の健康の保持と地域との共生を目指す事業であるが、令和元年も継続して活動することが承認されたので、メンバーの 1 人として貢献させていきたいと思っています。</p>		

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

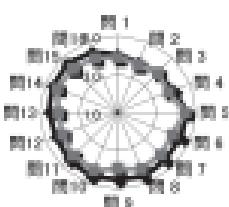
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、別段々・私語・メールをすることが少なかった。
 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
 問 7 両回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
 問 8 先生の話し方並用紙で、聞き取りやすかった。
 問 9 先生の板書の仕方や複雑観察機器(CT等)の利用が効果的であった。
 問 10 教科書、参考書、配布資料(プリント、楽譜など)は、授業を理解するのに役立った。
 問 11 この授業(科目)の感想評価の方法について、予めきちんと説明があった。
 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

- 1. そうはない
 □ 2. どちらかといえばそう思わない
 □ 3. どちらともいえない
 □ 4. どちらかといえばそう思う
 □ 5. そう思う

臨床実習学概論

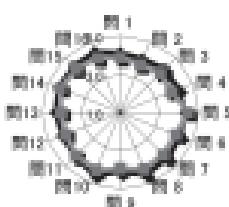
問 16 4.4



—■—教科平均 —■—学科平均

臨床実習学実習

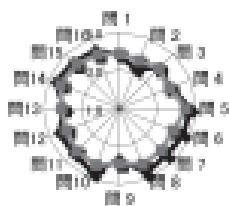
問 16 4.4



—■—教科平均 —■—学科平均

給食計画論

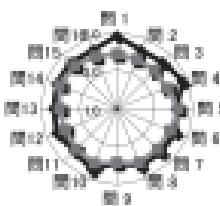
図 16-4.3



➡ 教科平均 ⬅ 学科平均

給食管理実習 I

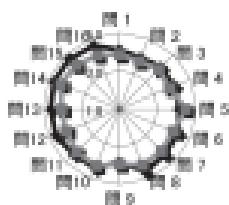
図 16-4.3



➡ 教科平均 ⬅ 学科平均

給食管理実習 II

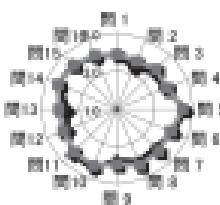
図 16-4.6



➡ 教科平均 ⬅ 学科平均

栄養士基礎演習

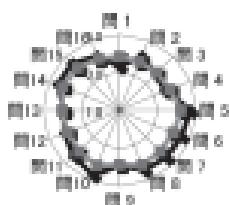
図 16-3.9



➡ 教科平均 ⬅ 学科平均

栄養士総合演習 I・II

図 16-4.1



➡ 教科平均 ⬅ 学科平均

		問17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。				
科 目 名		0分	1~30分	31~60分	61~90分	91分以上
臨床栄養学概論（フ2）	11	2	0	0	0	
臨床栄養学実習（フ2）	11	2	0	0	0	
給食計画論（フ1）	4	7	6	1	0	
給食管理実習Ⅰ（フ1）	5	5	5	0	0	
給食管理実習Ⅱ（フ2）	8	8	0	0	0	
栄養士基礎演習（フ1）	3	7	4	1	2	
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅲ（フ2）	6	6	1	0	1	

		問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）					
科 目 名		予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
臨床栄養学概論（フ2）	0	1	0	0	0	0	11
臨床栄養学実習（フ2）	0	1	2	0	0	0	10
給食計画論（フ1）	0	4	0	12	0	0	2
給食管理実習Ⅰ（フ1）	3	2	6	3	1	1	3
給食管理実習Ⅱ（フ2）	7	1	9	0	0	0	2
栄養士基礎演習（フ1）	1	0	14	2	1	1	0
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅲ（フ2）	2	2	2	2	1	1	6

所属学科	職名	氏名
フードデザイン	教授	安保 康治
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
生活と環境 基礎栄養学Ⅰ 基礎栄養学Ⅱ 生化学Ⅰ 生化学Ⅱ 生化学実験 栄養士検査問題Ⅰ(5回)	フードデザイン学科1年 フードデザイン学科1年 フードデザイン学科1年 フードデザイン学科2年 フードデザイン学科2年 フードデザイン学科2年 フードデザイン学科2年	卒業選択必修 卒業必修・免許必修 卒業選択・免許必修 卒業選択・免許必修 卒業選択・免許必修 卒業選択・免許必修 卒業選択
研究分野		
1. 生化学分野の研究 アマメリ系植物の DNA に関する研究		
2. 栄養学分野の研究 海苔の trypsin inhibitor に関する研究		
3. 授業研究 担当科目の授業プレゼンコンテンツの開拓と実施		

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. 生化学の分野

- (1) 平成 31 年 1 月より、三重大学生物資源学部生化学研究室が進めていた『生化学（仮称）』の共同執筆者として「酵素反応速度論」を担当することとなった。
- (2) 平成 31 年 3 月より、長崎大学水産学部生化学研究室の「魚内のプロテアーゼに関する研究」の研究チームに参加することとなった。

2. 担当科目の授業プレゼンコンテンツの開発と実施

担当科目の学生の理解度を高めるための研究として、理解難い部分お上げまとめについて複数を利用したプレゼンコンテンツを開発するにあたり、今年度はプリントの作成と実施を行った。

平成 30 年度の研究の成果

(論文)

なし

(授業まとめのプリント作成)

基礎栄養学 12 頁、生化学 12 頁、生化学実験 3 頁、栄養士総合演習 11 頁

平成 29 年度及び 30 年度の研究の成果

(論文)

1. 「C 言語による簡易統計処理ソフトの開発」単著 平成 29 年 7 月『久留米経営女学院短期大学研究紀要第 39 号』
2. 「入学選考方法別による学歴成績の追跡調査」大著 平成 29 年 7 月『久留米経営女学院短期大学研究紀要第 40 号』

本教員の主たる研究の成果（5 篇以内）

1. Isozymes from Conchoecia of *Pupypha* Species "Fisheries Science" 61(2) 1995
2. Isozymes from Conchoecia and Leafy Thalli of *Pupypha* Species "Fisheries Science" 62(2) 1996
3. 「食品学」（単著）平成 16 年 4 月 国成出版（1~105）
4. 「化学・食品学実験」（共著）平成 12 年 3 月 国成出版（1~31、59~84）
5. 「現代人のための生活と環境」（共著）平成 22 年 3 月 国成出版（29~60）

所属学会および参加状況

所属学会	参加状況および役職等
マリンバイオテクノロジー学会	なし

令和元年度 研究計画

1. 生化学の分野

- （1）三重大学生物資源学部生化学研究室助教予定の『生化学(植物)』の執筆担当章「酵素反応速度論」の原稿作成を行う。
- （2）長崎大学水産学部生化学研究室の「魚肉のプロテアーゼに関する研究」の一部(現在未定)を実施する。

2. 担当科目の授業プレゼンコンテンツの開発と実施

担当科目の学生の理解度を深めるための研究として、理解難な部分およびまとめてについて視聴を利用したプレゼンコンテンツを開発するにあたり、30 年度に作成したプリントにそって、暫時プレゼンコンテンツを開発する。

平成 30 年度 教育活動報告 (ティーチング・ポートフォリオ)

平成 30 年度の PD 宣言と教育力向上に向けての計画

30 年度 4 月からの再履用につき、正式な PD 宣言はなされたが、学生の理解を向上させることを目指し、全担当科目で理解しにくいテキスト履用について、まとめのプリントを作成・配布し、授業後半でまとめをすること、および上半期と下半期のまとめとして模擬問題を実施・解説することとした。「基礎栄養学Ⅰ・Ⅲ」、「生化学Ⅰ・Ⅱ」、「栄養士総合演習Ⅰ」については、学生から口頭ではあるが、まとめはわからず困ったと評価された。ただ、「生化学実験」の 3 回行ったまとめについて、同じことの繰り返しが多いと、やや不評であった。これについては今後改善する。

担当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
生活と環境	A/A : 2 名, A : 6 名, B : 4 名, C : 3 名, D : 0 名	3.5
基礎栄養学Ⅰ	A/A : 4 名, A : 4 名, B : 1 名, C : 2 名, D : 0 名	3.2
基礎栄養学Ⅲ	A/A : 6 名, A : 5 名, B : 4 名, C : 3 名, D : 0 名	3.8
生化学Ⅰ	A/A : 4 名, A : 3 名, B : 3 名, C : 3 名, D : 0 名	3.3
生化学Ⅱ	A/A : 3 名, A : 4 名, B : 7 名, C : 4 名, D : 0 名	3.3
生化学実験	A/A : 6 名, A : 2 名, B : 1 名, C : 10 名, D : 0 名	3.1
栄養士総合演習Ⅰ	A/A : 0 名, A : 4 名, B : 11 名, C : 3 名, D : 0 名	3.1

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
生活と環境	フードデザイン学科 1 年	卒業選択必修

学生の授業評価を踏まえた
自己評価

総合評価が 2.9 と低かった。個別には 2.1~4.4(平均 3.1) であった。特に、「授業の仕方や視聴覚機器の利用」が 2.1、「質問や意見が述べられる配慮」が 3.4 と低かった。
これらについては、自筆の出版物をテキストとして使用しているが、そのページ数が多いため、限なく講義しようとも、やや急いで講義したためと考える。

授業についての自己評価	→できた、できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 → 4 (3) → 3 → 1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを想到了	5 → (4) → 3 → 2 → 1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 → 4 (3) → 2 → 1
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 → 4 → 3 → 2 → (1)
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の理解度を確認しながら授業を行った	5 → (4) → 3 → 2 → 1
最終的な授業評価を実施した	(5) → 4 → 3 → 2 → 1

次年度の PD 宣言と 教育力向上に向けての計画	章の冒頭では、その関連する最新のビデオや IT 等で導入をはかり、また、他の終わりには、まとめとしてグループ討議を行うことを取り入れる。
-----------------------------	--

科目名	対象	必修・選択
基礎栄養学Ⅰ	ワードデザイン学科1年	卒業必修・免許必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価が3.2と低かった。問題には2.8~4.6(平均4.0)であった。特に、「板書の仕方や視聴覚機器の利用」が2.8と低かったが、各章のまとめのプリントを配布したので、「配布資料は授業を理解するのに役立った」は4.1であった。	
授業についての自己評価		一できた できなかった
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5-(4)-3-2-1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5-(4)-3-2-1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5-4-(3)-2-1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5-4-3-(2)-1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5-(4)-3-2-1	
厳格な授業評価を実施した	(5)-4-3-2-1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	教科書を中心とした教科なので、視聴覚機器の導入は困難であるが、板書の仕方については、事前にその原稿を作成しておき、それに随いゆっくりと記載することを心掛ける。 また、配布資料のさらなる充実をはかる。	
科目名	対象	必修・選択
基礎栄養学Ⅱ	ワードデザイン学科1年	卒業選択・免許必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価が3.2と低かった。問題には2.7~4.6(平均4.0)であった。特に、「板書の仕方や視聴覚機器の利用」と「質問や意見が述べられる配慮」が2.7と低かったが、各章のまとめのプリントを配布したので、「配布資料は授業を理解するのに役立った」は4.2であった。	
授業についての自己評価		一できた できなかった
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5-(4)-3-2-1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5-(4)-3-2-1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5-4-(3)-2-1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5-4-3-(2)-1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5-(4)-3-2-1	
厳格な授業評価を実施した	(5)-4-3-2-1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	教科書を中心とした教科なので、視聴覚機器の導入は困難であるが、板書の仕方については、事前にその原稿を作成しておき、それに随いゆっくりと記載することを心掛ける。毎回授業の最後に質問はないか問うているが、実際はほとんどない。授業の中盤でも問うてみると、また、配布資料のさらなる充実をはかる。	

科目名	対象	必修・選択
生化学実験	フードデザイン学科 2 年	卒業選択・免勤必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価が 3.8 であった。個別には 3.6~4.2(平均 4.0) であった。 特に低い評価項目はなかったが、実験ノートは前担当者の作成したもの をそのまま使用したため、口頭の訂正が多くあった。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実験場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度の PD 宣言と 教育力向上に向けての計画	実験ノートを学生が理解しやすいように、また、レポートをまとめる やすいように、改善する。	
科目名	対象	必修・選択
栄養士総合演習Ⅰ	フードデザイン学科 2 年	卒業選択
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価が 4.1 であった。個別には 3.3~4.7(平均 4.3) であった。 特に問 1 の「履覧り・私語・メール」が 3.3 と低かったのは、「私語 や慢窓態度に注意」が 3.9 であることから、履覧りが該当すると想わ れる。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実験場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度の PD 宣言と 教育力向上に向けての計画	栄養学理論分野(2 回)、生化学分野(3 回)が担当であったので、過去問を前者は 1 回目が平成 27 年度分、2 回目が 28 年度分を、後者は 27 年~29 年分を項目に分けて再構築し、解答の解説プリントを作成・配布し実施した。両分野とも年数を増やし、また、項目別に再構築し、解説プリントを作成して実施する。	

科目名	対象	必修・選択
生化学実験	フードデザイン学科2年	卒業選択・免許必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価が3.8であった。個別には3.6~4.2(平均4.0)であった。 特に低い評価項目はなかったが、実験ノートは前回出席者の作成したもの をそのまま使用したため、口頭の訂正が多くあった。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4・3・2・1	①
教授内容が実際の社会や実験場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4・3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4・3・2・1	
MCT等を用いた参加型・発信型・実践型のアカディープラーニングを取り入れた	5・4・3・2・1	①
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3・2・1	③
厳格な授業評価を実施した	5・4・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	実験ノートを学生が理解しやすいように、また、レポートを主との やすいように、改善する。	
科目名	対象	必修・選択
栄養士総合演習Ⅰ	フードデザイン学科2年	卒業選択
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価が4.1であった。個別には3.3~4.7(平均4.2)であった。 特に問1の「履歴り・私語・メール」が3.3と低かったのは、「私語 や授業態度に注意」が3.9であることから、尾頭りが該当すると思われる。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4・3・2・1	④
教授内容が実際の社会や実験場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4・3・2・1	③
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4・3・2・1	②
MCT等を用いた参加型・発信型・実践型のアカディープラーニングを取り入れた	5・4・3・2・1	③
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3・2・1	①
厳格な授業評価を実施した	5・4・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	栄養学総論分野12 FD、生化学分野63 FDが相当であったので、過去問を前者は1回目が平成27年度分、2回目が28年度分を、後者は27年~29年分を項目に分けて再構築し、解答の解説プリントを作成・配布し実施した。両分野とも年数を増やし、また、項目別に再構築し、解説プリントを作成して実施する。	

平成 30 年度 社会的活動報告					
講演等					
題名	開催年月日	主催者	場所		
なし					
施設等への協力					
協力内容	協力期間	協力先			
なし					
他大学への非常勤等					
科目名	期間	担当先			
生化学実験	平成 30 年 9 月 21 日～ 平成 31 年 3 月 20 日	九州栄養福祉大学 食物栄養学部			
その他特記事項					
内容	年 月 日				
「のどのケアに豚骨スープ」朝日新聞デジタル https://www.asahi.com 「のどのケアに～豚骨スープ～」朝日新聞（夕刊）2面	平成 30 年 12 月 11 日 平成 30 年 12 月 12 日				
令和元年度 社会的活動計画					
九州栄養福祉大学 食物栄養学部 非常勤講師（生化学実験）令和元年 9 月～令和 2 年 3 月					

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった。
- 問 2 私はわからない時に質問したり、自分で調べたりした。
- 問 3 私は授業の内容を理解することができた。(または実力がついた)。
- 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
- 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
- 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
- 問 7 著書の梗概に関するテーマや目的はわかりやすかった。
- 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
- 問 9 先生の板書の仕方や視聴覚機器(スライドなど)の利用が効果的であった。
- 問 10 教科書・参考書・配布資料(アド・座談など)は、授業を理解するのに役立った。
- 問 11 この授業(科目)の成績評価の方法について、やめきちんと説明があった。
- 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
- 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
- 問 14 先生は懸念を持って授業を行っていた。
- 問 15 先生は学生に対して愛情と尊厳の心を持って、授業を行っていた。
- 問 16 この授業を総合的に評価すると8点満点で何点になりますか。

- | |
|-------------------|
| 8. そう思う |
| 4. どちらかといえばそう思う |
| 3. どちらともいえない |
| 2. どちらかといえばそう思わない |
| 1. そうは思わない |

生活と環境

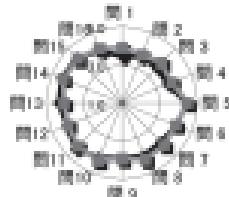
問 16 2.9



—■—教科平均 —■—学科平均

生化学 I

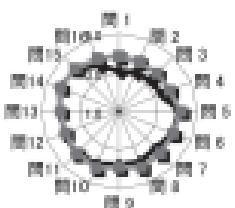
問 16 2.9



—■—教科平均 —■—学科平均

生化学 II

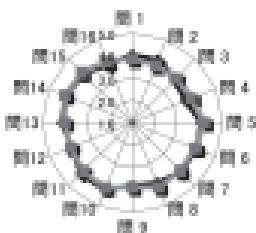
図 16-3.6



—■—教科平均 —●—学科平均

生化学実験

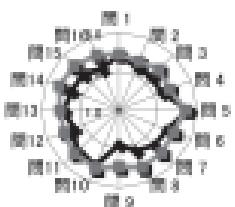
図 16-3.8



—■—教科平均 —●—学科平均

基礎栄養学 I

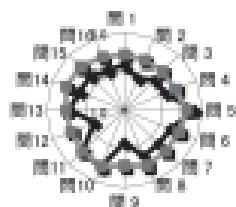
図 16-3.3



—■—教科平均 —●—学科平均

基礎栄養学 II

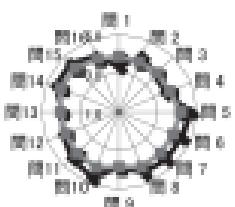
図 16-3.2



—■—教科平均 —●—学科平均

栄養士総合演習 I・II

図 16-4.1



—■—教科平均 —●—学科平均

問 17 もなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。

科目名	0分	1~30分	31~60分	61~90分	91分以上
生活と環境(フ1)	9	4	1	0	0

生化学Ⅰ（フ2）	12	2	0	0	0
生化学Ⅱ（フ2）	9	4	2	0	1
生化学実験（フ2）	6	1	2	3	2
基礎栄養学Ⅰ（フ1）	4	7	1	3	0
基礎栄養学Ⅱ（フ1）	5	9	0	1	1
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅲ（フ2）	6	6	1	0	1

科 目 名	問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）					
	予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
生活と環境（フ1）	0	3	1	5	0	3
生化学Ⅰ（フ2）	0	1	0	1	0	10
生化学Ⅱ（フ2）	0	2	0	7	0	8
生化学実験（フ2）	0	0	10	1	0	2
基礎栄養学Ⅰ（フ1）	0	3	1	6	0	2
基礎栄養学Ⅱ（フ1）	0	3	1	6	0	4
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅲ（フ2）	2	2	2	2	1	6

所属学科	職名	氏名	
フードデザイン		江越 和夫	
		担当科目	
科目名	対象	必修・選択	
食品学概論	フード1年	卒業必修・免許必修	
食品学各論	□	卒業選択・免許必修	
食品実験	□	卒業選択・免許必修	
食品衛生学	□	卒業必修・免許必修	
食品衛生学実験	□	卒業選択・免許必修	
栄養士基礎演習（化学を3回担当）	□	卒業必修	
食品加工学実習	フード2年	卒業選択・免許必修	
栄養士総合演習Ⅰ（6回担当）	□	卒業選択	
卒業セミナー	□	卒業選択	
研究分野			
1. 食品衛生学分野			
変異原性物質（発がん作用を有する）による危害の軽減を目指して、「抗変異原性を有する食品の検定」、「食物繊維や乳酸菌による変異原性物質の吸着」に関する研究を行っている。			
さらに、「身体の黄色ブドウ球菌分布」及び「ジャガイモのクロロフィル含量とソラニン・チャコニン量との相關性」を調べている。			
2. 食品学分野			
「食と健康」の観点から、各種食品中の機能性成分（メタトニン、EPA、DHA、ポリアミン等）を分析している。			
3. 食品加工学分野			
加工食品の食感向上を目指して、加工方法や食品添加物等について検討している。			

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

平成 30 年度の研究計画及び概要を以下に示した。

- 「ジャガイモにおけるクロロフィルおよびグリコアルカロイドの相關性」について研究記要に投稿する。→投稿した。
- 学科共同研究の「栄養士養成研究」について研究記要に投稿する。→投稿した。
- 学科共同研究の「学生の成長可視化のこころみ」について研究記要に投稿する。→投稿した。
- 「入学者選考方法別学業成績の追跡調査」について研究記要に投稿する。→投稿した。
- 各種食品の EPA・DHA を調べる。E 値の測定方法を確立する。→検討しなかった。
- 「学習成果の可視化」に関する各大学の取り組みを調査した。

平成 30 年度の研究の成果

（論文）

- 「ジャガイモにおけるクロロフィルおよびグリコアルカロイドの相關性（共著）」平成 30 年 9 月『久留米信愛短期大学研究紀要』第 41 号（1-7）
- 「栄養士養成研究(1)8 年間の学習支援取り組みの懸念（共著）」平成 30 年 9 月『久留米信愛短期大学研究紀要』第 41 号（1-9～2-6）
（その他の）
 - 「学習成果の可視化のこころみ（1）～アーバードプロジェクト活動を通して～（共著）」平成 30 年 9 月『久留米信愛短期大学研究紀要』第 41 号（3-5～4-2）
 - 「入学者選考方法別による学業成績の追跡調査（2）（共著）」平成 30 年 9 月『久留米信愛短期大学研究紀要』第 41 号（8-1～8-8）

平成 29 年度及平成 30 年度の研究の成果

（論文）

- 「栄養士養成研究（4）学習支援に対する効果の 2 年間の分析（共著）」平成 28 年 7 月『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要』第 3-9 号（2-1-2-5）
- 「HPLC によるジャガイモ身のクロロフィル及びグリコアルカロイドの定量（共著）」平成 29 年 7 月『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要』第 4-0 号（1-7）
- 「入学者選考方法別による学業成績の追跡調査（共著）」平成 29 年 7 月『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要』第 4-0 号（1-9～2-4）
- 「栄養士養成研究（5）生菌実験が学習支援効果に及ぼす影響－2（共著）」平成 29 年 7 月『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要』第 4-0 号（2-5～3-4）
（その他の）
 - 「女子短期大学生における青魚ペプチド歯周病の分布（共著）」平成 28 年 7 月『久留米信愛女子学院短期大学研究紀要』第 3-9 号（3-9-4-3）

本教員の主たる研究の成果（5 項以内）

- 「Adsorption of Heterocyclic Amines by Low Molecular Weight Cellulose（共著）」『食品衛生物学誌』, 1997 年 12 月
- 「ラット排糞物中での Trp-P1 及びその代謝物の摂取（共著）」『食品衛生物学誌』, 2001 年 7 月
- 「HPLC による生乳中メラトニンの定量（共著）」『日本食品科学工学会誌』, 2007 年 3 月
- 「ラットにおける Trp-P1 の代謝摂取に及ぼすゴボウとキヤベツ粉末の影響（共同）」『日本食品科学工学会誌』, 2009 年 4 月
- 「高通液体クロマトグラフを用いた米糊中メラトニンの定量法（共著）」『日本食品科学工学会誌』, 2012 年 3 月

所属学会および参加状況	
所属学会	参加状況および役職等
1. 日本食品衛生学会	不参加
2. 日本食品科学工学会	不参加
令和元年度 研究計画	
①「学習成果の可視化に向けての調査研究」の題目で研究記要に投稿する。 ②各種食品の EPA・DHA 量を調べる。 ③アプリカラ色度の定量方法を検討する。 ④動化型ビタミンCの定量方法を検討する。	

平成 30 年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）		
平成 30 度の FD 宣言と教育力向上に向けての計画		
1. FD 宣言		
目標：分かりやすい授業を行う。 指標：問 2 〈質問〉、問 3 〈理解〉、問 4 〈さらにつける〉、問 1, 6 〈総合評価〉		
2. 教育力向上に向けての計画		
①授業の最後に 5 分問題重要事項を確認する。 ②実験・実習レポートはコメントや評点を記入し練習用に返却する。 ③重要事項は栄養士実力認定試験問題等を紹介する。 ④視覚的な授業を行う。 ⑤学会誌等から得た新知見を紹介する。		
担当科目の成績評価		
科目名	成績評価の内訳	平均
食品学概論	AA : 2 名, A : 4 名, B : 3 名, C : 9 名, D : 0 名	2.9
食品学各論	AA : 4 名, A : 3 名, B : 1 名, C : 10 名, D : 0 名	3.1
食品学実験	AA : 3 名, A : 4 名, B : 7 名, C : 4 名, D : 0 名	3.3
食品衛生学	AA : 6 名, A : 1 名, B : 2 名, C : 9 名, D : 0 名	3.2
食品衛生学実験	AA : 4 名, A : 3 名, B : 6 名, C : 5 名, D : 0 名	3.3
食品加工学実習	AA : 1 名, A : 1 名, B : 13 名, C : 3 名, D : 0 名	3.0
栄養士基礎演習	AA : 10 名, A : 6 名, B : 2 名, C : 0 名, D : 0 名	4.4
栄養士総合演習Ⅰ	AA : 0 名, A : 4 名, B : 11 名, C : 3 名, D : 0 名	3.1
卒業セミナー	AA : 6 名, A : 10 名, B : 1 名, C : 1 名, D : 0 名	4.2

各授業の評価			
科目名	対象	必修・選択	
食品学総論	フードデザイン学科1年	卒業必修・免許必修	
学生の授業評価を踏まえた自己評価		平成29年度の授業評価と比較して、問2(質問)では+0.2(平成30年度評価:3.5)、問い合わせ(理解)は+1.0(3.7)、問4(さらに)+0.4(3.6)、問い合わせ(総合評価)は+0.1(3.9)となり、FD宣言で指標とする4項目すべて上昇した。 ただし、問い合わせの評価は+1.0上升したが、底すぎた平成28年度評価(2.7)から何年かの評価に戻ったものである。	
授業についての自己評価		→できた できなかった	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 4 3 2 1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 4 3 2 1	
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5 4 3 2 1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 4 3 2 1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5 4 3 2 1	
融通な授業評価を実施した		5 4 3 2 1	
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画		1. FD宣言:問い合わせ(理解)4以上を目指す。 2. 教育力向上に向けての計画 ①授業の最後に5分間程重要事項を確認する。 ②重要事項は栄養士実力認定試験問題等を紹介する。 ③視覚的な授業を行う。 ④学会誌等から得た新知見を紹介する。	
科目名	対象	必修・選択	
食品学各論	フードデザイン学科1年	卒業選択・免許必修	
学生の授業評価を踏まえた自己評価		平成29年度の授業評価と比較して、問2(質問)では+0.2(平成30年度評価:3.6)、問い合わせ(理解)は+0.3(3.6)、問い合わせ(さらに)+0.4(3.8)、問い合わせ(総合評価)(3.9)は変わらずで、指標とする3項目が上昇した。	
授業についての自己評価		→できた できなかった	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 4 3 2 1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 4 3 2 1	
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5 4 3 2 1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 4 3 2 1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5 4 3 2 1	
融通な授業評価を実施した		5 4 3 2 1	
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画		1. FD宣言:問い合わせ(理解)4以上を目指す。 2. 教育力向上に向けての計画 ①授業の最後に5分間程重要事項を確認する。 ②重要事項は栄養士実力認定試験問題等を紹介する。 ③視覚的な授業を行う。 ④学会誌等から得た新知見を紹介する。	

科目名	対象	必修・選択
食品学実験	フードデザイン学科1年	卒業選択・免許必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	平成29年度の授業評価と比較して、問い合わせ(質問)では-0.2(平成30年度評価:3.9)、問い合わせ(理解)は-0.2(3.3)、問い合わせ(さらに) +0.1(3.5)、問い合わせ(総合評価) -0.4(3.7)で、指標とする3項目の評価が下がった。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 → 4 (3) 2 → 1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 → 4 (3) 2 → 1
自身の研究活動での具体的な成果等を通して教授・指導した		5 → 4 (3) 2 → 1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 → 4 (3) 2 → 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5 → 4 (3) 2 → 1
厳格な授業評価を実施した		5 → 4 (3) 2 → 1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	1. FD宣言:問い合わせ(質問)及び(理解)の評価上昇を目指す。 2. 教育力向上に向けての計画 ①授業の最後に実験結果を解説する。 ②実験レポートはコメントや評点を記入し適やかに返却する。 ③視覚的な授業を行う。 ④学会誌等から得た新知見を紹介する。	
科目名	対象	必修・選択
食品衛生学	フードデザイン学科1年	卒業必修・免許必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	平成29年度の授業評価と比較して、問い合わせ(質問)では+0.2(平成30年度評価:3.5)、問い合わせ(理解)は+0.5(3.8)、問い合わせ(さらに) +0.4(3.8)、問い合わせ(総合評価)は+0.1(3.9)で、指標とする4項目は概ね上昇した。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 → 4 (3) 2 → 1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 → 4 (3) 2 → 1
自身の研究活動での具体的な成果等を通して教授・指導した		5 → 4 (3) 2 → 1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 → 4 (3) 2 → 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5 → 4 (3) 2 → 1
厳格な授業評価を実施した		5 → 4 (3) 2 → 1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	1. FD宣言:問い合わせ(理解)評価4以上を目指す。 2. 教育力向上に向けての計画 ①授業の最後に5分間で重要事項を確認する。 ②重要事項は栄養士実力認定試験問題等を紹介する。 ③視覚的な授業を行う。 ④学会誌等から得た新知見を紹介する。	

科目名	対象	必修・選択
食品衛生学実験	フードデザイン学科1年	卒業認証・免許必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	平成29年度の授業評価と比較して、問2(質問)では-0.3(平成30年度評価:3.8)、問い合わせ(理解)は変わらず(3.8)、問4(さらに)+0.1(3.8)、問い合わせ(総合評価)は変わらず(4.1)で、指標の4項目中、問い合わせの評価が下がった。	
授業についての自己評価		~できた できなかった~
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3 2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた		5・4 3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4 3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3 (2) 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4 3・2・1
顧客な授業評価を実施した		(5) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	1. FD宣言:問い合わせの上昇を目指す。 2. 教育力向上に向けての計画 ①授業の最後に実験結果を解説する。 ②実験レポートはコメントや評点を記入し速やかに返却する。 ③視覚的な授業を行う。 ④学会誌等から得た新知見を紹介する。	
科目名	対象	必修・選択
食品加工学実習	フードデザイン学科2年	卒業認証・免許必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	平成29年度の授業評価と比較して、問い合わせ(質問)では+0.4(平成30年度評価:4.3)、問い合わせ(理解)は+0.3(4.4)、問い合わせ(さらに)+0.3(4.4)、問い合わせ(総合評価)は+0.3(4.7)で、指標とする4項目すべての評価が上昇した。	
授業についての自己評価		~できた できなかった~
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた		5・4 3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4 3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3 (2) 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4 3・2・1
顧客な授業評価を実施した		(5) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	1. FD宣言:問い合わせ評価4.5以上を目指す。 2. 教育力向上に向けての計画 ①実習レポートはコメントや評点を記入し速やかに返却する。 ③視覚的な授業を行う。 ④学会誌等から得た新知見を紹介する。	

科目名	対象	必修・選択
栄養士基礎演習（化学）	フードデザイン学科1年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	平成29年度の授業評価と比較して、問2（質問）では-0.2（平成30年度評価：3.3）、問い合わせ（理解）は変わらず（3.7）、問4（さらに）+0.3（4.4）、問い合わせ（総合評価）は-0.2（3.9）で、問い合わせ及び総合の評価が下がった。	
授業についての自己評価	→できた できなかった→	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4) 3・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4 (3) 2・1	
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した	5・4 (3) 2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3 (2) 1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4 (3) 2・1	
厳格な授業評価を実施した	5 (4) 3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	1. FD宣言：問い合わせ評価4以上を目指す。 2. 教育力向上に向けての計画 ①毎回、確認問題を解かせる。 ②分かりやすい授業を進める。	
科目名	対象	必修・選択
栄養士総合演習Ⅰ	フードデザイン学科2年	卒業選択
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	平成29年度の授業評価と比較して、問2（質問）では+0.7（平成30年度評価：4.1）、問い合わせ（理解）は+0.1（3.7）、問4（さらに）+0.1（3.6）、問い合わせ（総合評価）は+0.4（4.1）で、指標とする4項目すべての評価が上昇した。	
授業についての自己評価	→できた できなかった→	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4) 3・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4 (3) 2・1	
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した	5・4 (3) 2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3 (2) 1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 (4) 3・2・1	
厳格な授業評価を実施した	5 (4) 3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	1. FD宣言：問い合わせ評価4以上を目指す。 2. 教育力向上に向けての計画 ①「受講者が管栄試験問題等を解説する」学生参加型の授業を行う。 ③学会誌等から得た新知見を紹介する。	
科目名	対象	必修・選択
卒業セミナー	フードデザイン学科2年	卒業選択
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	平成30年度の授業評価において、問2（質問）では4.3、問い合わせ（理解）は4.4、問4（さらに）4.1、問い合わせ（総合評価）は4.5で、指標とする4項目の評価が4以上であった。	

授業についての自己評価	→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	(5) 4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	(5) 4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	(5) 4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 (4) 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4 (3)・2・1
厳格な授業評価を実施した	(5) 4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	本科目は、次年度から不開講となる。

平成30年度 社会的活動報告			
講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
他大学への非常勤等			
科目名	期間	出向先	
その他の記事項			
内容	年 月 日		
コンソーシアム久留米広報交流部会委員	平成30年4月 ～31年3月		
令和元年度 社会的活動計画			

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

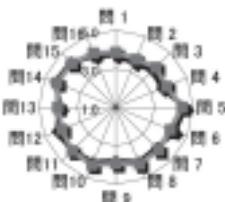
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、困惑り・苦悶・メールをすること少なかった。
 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
 問 5 授業は正確時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
 問 7 毎回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
 問 9 先生の板書の仕方や視覚化機器（ピアノなど）の利用が効果的であった。
 問 10 教科書、参考書、配布資料（プリント・楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

5. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

食品学総論

問 16 3.9



—●—教科平均 —■—学科平均

食品学各論

問 16 3.9



—●—教科平均 —■—学科平均

食品学実験

図 16 3.7



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

食品加工学実験

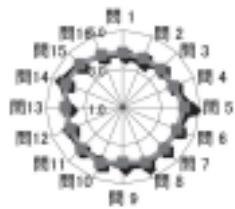
図 16 4.7



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

食品衛生学

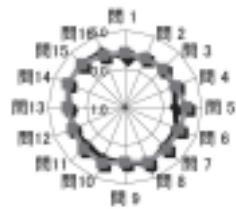
図 16 3.9



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

食品衛生学実験

図 16 4.1



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

栄養士基礎演習

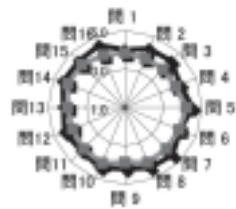
図 16 3.9



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

卒業セミナー

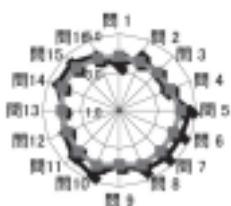
図 16 4.5



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ

図 16 4.1



→教科平均　—■—学科平均

図 17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。

科 目 名	0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
食品学概論（フ1）	3	4	5	3	1
食品学各論（フ1）	4	5	3	4	0
食品学実験（フ1）	1	1	0	2	10
食品加工学実習（フ2）	6	2	4	2	1
食品衛生学（フ1）	1	8	5	0	1
食品衛生学実験（フ1）	3	1	5	4	2
栄養士基礎演習（フ1）	3	7	4	1	2
卒業セミナー（フ2）	13	2	0	0	0
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ（フ2）	6	6	1	0	1

図 18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）

科 目 名	予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
食品学概論（フ1）	0	3	1	12	2	1
食品学各論（フ1）	0	1	2	10	1	3
食品学実験（フ1）	0	3	10	0	0	1
食品加工学実習（フ2）	0	0	11	0	0	3
食品衛生学（フ1）	0	5	2	9	1	1
食品衛生学実験（フ1）	0	1	11	3	0	1
栄養士基礎演習（フ1）	1	8	14	2	1	0
卒業セミナー（フ2）	0	1	1	0	1	10
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ（フ2）	2	2	2	2	1	6

所属学科	職名	氏名
フードデザイン	准教授	眞鍋 真紀子
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
基礎統計学	幼児教育学科・フードデザイン学科1年	卒業選択必修
栄養士情報処理演習	フードデザイン学科1年	卒業選択・資格必修
フードプロジェクト	フードデザイン学科1年 年・2年	卒業必修
フードプロジェクトⅠ	フードデザイン学科1年	卒業必修
フードプロジェクトⅡ	フードデザイン学科1年	卒業必修
フードインターンシップ	フードデザイン学科2年	卒業選択
医療事務概論	フードデザイン学科1年	卒業選択・資格必修
情報処理演習	フードデザイン学科2年	卒業選択・資格必修
医療秘書実務実習	フードデザイン学科1年	卒業選択・資格必修
情報科学	幼児教育学科1年	卒業選択・資格必修
研究分野		
1. 食と感性について 料理は彩りや盛り付け、器などの見た目の美しさも大事である。また嗅覚や視覚に左右される味の印象や味わいも変化する影響について研究する。		
2. 学生の成長の可視化について 学生の成長を把握する手法について、研究する。		
3. 栄養士養成分野について 栄養士養成に関する研究。		

平成 30 年度 研究報告
平成 30 年度の研究の概要
<p>1. 食と感性について 学会に参加する。</p> <p>2. 学生の成長の可視化について 学生自身が自分の成長を認識することができるよう、科目のループリックを作成する。まずは、評価が測定しやすい技術的な科目で導入する。</p> <p>3. 栄養士養成分野について 『入学から卒業までのガイドブック』の見直しおよび摂食栄養士の育成に向けて学科で検討する。</p>
平成 30 年度の研究の成果
<p>1. 食と感性について 成果なし</p> <p>2. 学生の成長の可視化について 学生の成長の可視化を目的に「フードプロジェクト」および「フードプロジェクトⅠ」、「フードプロジェクトⅡ」のループリックを作成し、調査したが、技術的な科目における科目のループリックの導入までは至らなかった。</p> <p>3. 栄養士養成分野について 『入学から卒業までのガイドブック』(十訂版)に向けて、内容の検討を行った。</p>
平成 29 年度及び 28 年度の研究の成果
<p>(論文) 『栄養士養成研究 (6) 6 年間の学習支援取組の総括』共著 久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号 平成 30 年 9 月</p> <p>(研究ノート) 『「学生の成長」可視化のこころみ (1) ～フードプロジェクト活動を通して～』共著 久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号 平成 30 年 9 月</p> <p>(その他) 『入学から卒業までのガイドブック』(九訂版) 共著 平成 30 年 4 月 フードデザイン学科</p>
本教員の主たる研究の成果 (5 編以内)
<p>1. 『社会人に必要な Office2007 の基礎 Word2007, Excel2007, PowerPoint2007 総合』共著 開成出版 平成 21 年 4 月</p> <p>2. 『A Study of Prosodic Features of Emotional Speech Based on the Auditory Impressions』『近畿大学生物理工学部紀要第 23 号』 平成 21 年 3 月</p> <p>3. 『Accent-Type-Dependency of Agreement Rates of Emotions in Japanese Word Speech』『International Journal of Affective Engineering V01.12 No.2 pp.185-190』 平成 25 年 6 月</p> <p>4. 『種々の度合の感情音声における発話者の意図と聞き手の受容の一一致率と語彙的特徴との関係』『日本感性工学会論文誌第 13 号 2 号』平成 26 年 7 月</p>

所属学会および参加状況	
所属学会	参加状況および役職等
日本感性工学会	第14回日本感性工学会春季大会参加（信州大学感性学部）
日本音響学会	参加実績なし
日本家政学会	参加実績なし
福岡県栄養改善学会	参加
令和元年度 研究計画	
1. 食と感性について	
2. 学生の成長の可視化について	学生自身が自分の成長を認識することができるよう、特に、学修面で心配な学生自身にも成長を自覚できるように、評価項目を具体的に設定し、科目のループリックの確立を目指す。
3. 栄養士養成分野について	『入学から卒業までのガイドブック』の見直しおよび信愛栄養士の育成に向けて学科で検討する。

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

FD宣言

- ・毎回の授業の「今日できるようになること」または「理解すること」を板書する。
- ・幼児教育学科の学生の名前と顔が一致でき、名前で呼びかけることが出来るようにする。
- ・学生ひとり一人の話をよく聞くようにする。また聞く姿勢が伝わるようにする。

教育力向上に向けての計画

- ・板書の文字を読みやすく書けるように心がける。
- ・フードデザイン学科に所属しているので、栄養士業務について再勉強する。

担当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
基礎統計学	AA: 0名, A: 3名, B: 0名, C: 0名, D: 0名	4.0
栄養士情報処理演習	AA: 3名, A: 7名, B: 6名, C: 2名, D: 0名	3.8
フードプロジェクト	AA: 11名, A: 3名, B: 1名, C: 4名, D: 0名	4.1
フードプロジェクトI	AA: 5名, A: 10名, B: 1名, C: 2名, D: 0名	4.0
フードプロジェクトII	AA: 4名, A: 10名, B: 4名, C: 0名, D: 0名	4.0
医療事務経論	AA: 3名, A: 2名, B: 6名, C: 4名, D: 0名	3.3
情報処理演習	AA: 5名, A: 9名, B: 1名, C: 2名, D: 1名	3.8
情報科学	AA: 16名, A: 20名, B: 19名, C: 14名, D: 0名	3.6

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
基礎統計学	幼児教育学科 1年 フードデザイン学科 1年	卒業選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	履修生が少ないので評価点の平均値ではなく、回答数で評価する。 問9「板書の仕方」に2が1人、問6「他の科目との関連」に3が2人、問7「テーマや目的」に3が2人、問18「適切な注意」に3が2人回答していた。履修者が少なく、自由に発言する環境があったためかと思われるが、問2「質問」では全員が5に回答していることに表れている。	

授業についての自己評価	+できた できなかつた
最新の知識や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4 (3) 2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 (4) 3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した	5・4・3 (2) 1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 (4) 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4 (3) 2・1
厳格な授業評価を実施した	5 (4) 3・2・1

次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	FD宣言／板書の仕方の工夫（問9を4.1以上）、毎回のテーマを宣言する（問7を4.1以上）。 教育力向上に向けての計画／講義ノート作成に時間をかける。
---------------------------	--

科目名	対象	必修・選択
栄養士情報知識演習	フードデザイン学科1年	資格必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価		一番評価が低かったのは、問7「テーマや目的」の3.3であった。次いで問6「他の科目との関連」、問13「適切な注意」の3.5であった。問8「話しかけ」は3.9であったが、学生コメントに「早口だった」と指摘を受けた。「テーマや目的」についても最初に改善すべき点と考える。
授業についての自己評価		→できた できなかった→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3)・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4 (3)・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3 (2)・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の個々度を確認しながら授業を行った		5・4 (3)・2・1
独自な授業評価を実施した		5・4 (3)・3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画		FD宣言／毎回のテーマを宣言する(問7を4点以上)。 教育力向上に向けての計画／ゆっくりしゃべり、ゆっくり説明する。
科目名	対象	必修・選択
フードプロジェクト	フードデザイン学科1年・2年	卒業必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価		問1「私語・メール」は3.5で、問2「自分で調べた」が3.0と、低い評価であった。授業の内容がグループワークを中心としたアクティブラーニング形式だったため、私語が多くなったことは否定できない。また問4「さらに進んだ勉強」の評価も3.5と低かった。この授業は地域参画の機会が多かったが、これらの活動を受講後も機会があれば取り組んでほしいが、この評価からは、それが学生に伝わっていないことがわかった。
授業についての自己評価		→できた できなかった→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3)・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4 (3)・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4 (3)・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の個々度を確認しながら授業を行った		5・4 (3)・2・1
独自な授業評価を実施した		5・4 (3)・3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画		この科目はなくなり、新たに「フードプロジェクトⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」の科目へと展開するので、今後の授業評価を次に生かしたいと思う。

科目名	対象	必修・選択	
フードプロジェクト I	フードデザイン学科 1 年	卒業必修	
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		評価が一番低かったのが、問 2「自分で調べた」の 3.6 であった。他、3 点台が「理解できた」、「さらに勉強」、「他科目との関連の説明」、「テーマや目的」、「板書」、「教科書」、「評価方法の説明」、「熱意」、「愛情」と多くの項目が低く、改修しなければならないことが多いことがわかった。初めての科目ということもあり、学生への説明が十分ではなかったと思う。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた →	
最新の知識を動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3) 2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・(4) 3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4 (3) 2・1	
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・(4) 3・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・(4) 3・2・1	
厳格な授業評価を実施した		5・(4) 3・2・1	
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画	FD 宣言／授業計画の確立（すべての開を 4 点台）。 教育力向上に向けての計画／十分な準備の時間を確保する。		
科目名	対象	必修・選択	
フードプロジェクト II	フードデザイン学科 1 年	卒業必修	
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		一番低かったのは、問 11「評価方法」の 3.5、次いで問 2「理解できた」と問 12「質問できる配慮」の 3.6 であった。シラバスには評価の配分を標記していたが、授業中の説明は十分ではなかったかもしれない。予定にない地域参観活動の入ったときは配分の変更が生じているので、説明が必要だったと思う。また問 7「テーマや目的」が 3.8 だったことと問 2 が低かったことは関連していると考える。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた →	
最新の知識を動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3) 2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・(4) 3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4 (3) 2・1	
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4 3・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・(4) 3・2・1	
厳格な授業評価を実施した		5・(4) 3・2・1	
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画	FD 宣言／問 11 と問 12 を 4 点台にあげる。 教育力向上に向けての計画／つねにシラバスの評価の配分について確認し、変更が生じたときは説明をする。		

科目名	対象	必修・選択
医療事務概論	フードデザイン学科 1年	資格必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	すべての項目が 3 点台だったことは大いに反省すべきことである。特に評価が低かったのは、問 9「板書の仕方」であった。視聴覚教材は使わず、教科書と配布資料を使用した。問 10「教科書や配布資料」は 3.8 であることから、配布資料については比較的良い評価であったので「板書の仕方」の工夫が必須である。次に、問 7「テーマや目的」と問 5「時間通り」が 3.2 であった。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4 3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4 3・2・1
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4 3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5 (4) 3・2・1
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画	FD 宣言／問 7「テーマや目的」と問 9「板書の仕方」を 3.8 にあげる。 教育力の向上に向けての計画／準備の時間を確保する。講義ノートの全般的な見直しを行う。	
科目名	対象	必修・選択
情報処理演習	フードデザイン学科 1年	資格必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	問 6「他科目との関連」の評価が一番低く 3.6 であった。この科目は医療秘書実務士の資格必修であるので、他の科目との関連性を出すのが難しく、どちらかというと情報処理の基礎を学ぶ内容となっている。その説明も加えるべきである。次に低かったのは問 8「テーマや目的」と問 10「教科書や配布物」の評価が 4.1 であった。教科書に沿った演習を心掛けているが、教科書にない演習も取り入れているため、学生が混乱しているところがあるかもしれない。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 (4) 3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4 3・2・1
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4 3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5 (4) 3・2・1
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画	FD 宣言／毎回のテーマ宣言（問 6 と問 7 を 4 点台）。 教育力向上に向けての計画／しつこいくらいの説明を心掛ける。	

科目名	対象	必修・選択	
情報科学	幼児教育学科 1年	資格必修	
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		問 11「評価方法」が 3.6 と低いクラスがあった。クラスによって説明していない部分があると思われる。大事なことはもれなく伝えることを心掛けた。問 12「質問できる配慮」が 3.7 であった。問 8「話し方が明瞭」が 3.8 であった。マイクを使わないときもあったことが原因だと想われる。 クラスによって評価が異なるのは特に注意しなければならないと考える。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた	
最新の知見を動向をふまえて講義ノートを更新した		5・(4) 3・2・1	
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・(4) 3・2・1	
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・(3) 2・1	
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		(5)・4・3・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・(4) 3・2・1	
専門的な授業評価を実施した		5・(4) 3・2・1	
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画		FD 宣言／問 11「評価方法」と問 12「質問できる配慮」を 2 クラスとも 4.1 にする。 教育力向上に向けての計画／授業の最後に質問の時間を取れるよう にする。	

平成 30 年度 社会的活動報告			
講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
他大学への非常勤等			
科目名	期間	出向先	
情報処理入門	平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月	久留米大学	
その他特記事項			
内容	年 月 日		
令和元年度 社会的活動計画			
1. 久留米市保育医連携研修推進委員会 給食専門研修における講師（令和元年 9 月 13 日） 2. 食と健康の和協議体として、聴覚障がい者対象の調理実習への参加			

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった。
 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
 問 4 私はこの授業に因して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
 問 7 毎回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
 問 9 先生の板書の仕方や視聴覚機器（ビデオなど）の利用が効果的であった。
 問 10 教科書、参考書、配布資料（ノート、楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
 問 16 この授業を総合的に評価すると△点満点で何点になりますか。

6. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

基礎統計学

問 16 4.0



→教科平均 ←学科平均

栄養士情報処理演習

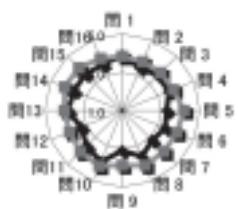
問 16 3.5



→教科平均 ←学科平均

医療事務経験

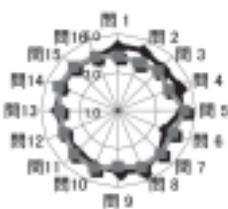
問 16 3.6



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

情報処理演習

問 16 4.0



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

情報科学

問 16 4.0



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

フードプロジェクト

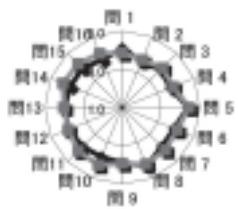
問 16 4.2



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

フードプロジェクトⅠ

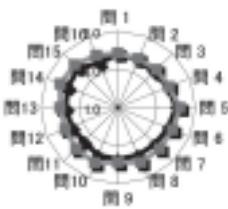
問 16 3.7



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

フードプロジェクトⅡ

問 16 3.5



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ

問16 4.1



→教科平均 ←学科平均

問17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。

科 目 名	0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
食品学概論（フ1）	3	4	5	3	1
食品学各論（フ1）	4	5	3	4	0
食品学実験（フ1）	1	1	0	2	10
食品加工学実習（フ2）	6	2	4	2	1
食品衛生学（フ1）	1	8	5	0	1
食品衛生学実験（フ1）	3	1	5	4	2
栄養士基礎演習（フ1）	3	7	4	1	2
卒業セミナー（フ2）	13	2	0	0	0
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ（フ2）	6	6	1	0	1

問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）

科 目 名	予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
食品学概論（フ1）	0	3	1	12	2	1
食品学各論（フ1）	0	1	2	10	1	3
食品学実験（フ1）	0	3	10	0	0	1
食品加工学実習（フ2）	0	0	11	0	0	3
食品衛生学（フ1）	0	5	2	9	1	1
食品衛生学実験（フ1）	0	1	11	3	0	1
栄養士基礎演習（フ1）	1	8	14	2	1	0
卒業セミナー（フ2）	0	1	1	0	1	10
栄養士総合演習Ⅰ・Ⅱ（フ2）	2	2	2	2	1	6

所属学科	職名	氏名	
幼稚教育	准教授	池田 可奈子	
担当科目			
科目名	対象	必修・選択	
心理学 保育内窮人間関係 発達心理学 保育の心理学 保育相談支援 チャイルドプロジェクト 保育実習Ⅰ（保育所） 保育実習指導Ⅰ（保育所）	フードデザイン学科1年 幼稚教育学科1年 幼稚教育学科1年 幼稚教育学科2年 幼稚教育学科2年 幼稚教育学科2年 幼稚教育学科1・2年 幼稚教育学科1・2年	卒業選択必修・資格必修 卒業選択・免許・資格必修 卒業選択・免許・資格必修 卒業必修・資格必修 卒業選択・資格必修 卒業必修・資格選択必修 卒業選択・資格必修 卒業選択・資格選択必修	
研究分野			
<p>主に、発達臨床心理学に関する分野の研究を以下の三つのテーマにもとづき行っている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 発達につまずきを示す子どもたちの早期発見と支援に関する研究 発達障害児の社会性の発達等を促すための支援活動を行いながら、どのような援助が有効かについて研究している。また、専門機関を来受診の子ども達とその保護者に対して、地域子育て支援活動の場等においてどのような支援を提供できるかについても検討を行っている。 2. 乳幼児期における社会的コミュニケーション行動の発達に関する研究 乳幼児の社会性の発達を、共同注意の発達プロセスという視点から検討している。 3. 保育者養成校における子育て支援活動の目的と意義に関する研究 保育者養成を担う教育機関として、子育てをする親子のニーズを反映させた質の高い活動をどのように提供していくか、また将来保育者を志す学生に子育て支援の実践的な学びをどのように保障していくか等について検討している。 			

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. 発達につまずきを示す子どもたちの早期発見と支援に関する研究

久留米幼児教育研究所がプログラミングで、就学前の親子を対象とした発達支援を継続して行い、よりよい支援について検討した。また、事例を通して得られた知見等を研修会で伝えた。

2. 子育て支援に関する研究

地域子育て支援活動の場等において、支援を必要とする親子に対し、どのような支援を提供できるかについて検討し、地域子育て支援施設や保育園において保護者対象の研修会でその内容を生かした講座を実施した。

3. 保育者養成校における子育て支援活動の目的と意義に関する研究

保育者養成を担う教育機関として、子育てをする親子のニーズを反映させた質の高い活動をどのように提供していくか、また将来保育者を目指す学生に子育て支援の実際的な学びをどのように保障していくかについて検討する中で、平成 27 年度より「保育和諧支援」の科目の中で、受講学生全員に子育て支援活動の場を提供する授業実践を行いました。平成 30 年度は子育て支援活動を通じた学生の学びの概要をまとめ始めました。

平成 30 年度の研究の成果

(資格取得)

1. 心理職の国家資格である「公認心理師」を平成 31 年 2 月に取得した。

平成 29 年度及平成 28 年度の研究の成果

(記要)

1. 「一緒に、まごとをしよう！！（ごっこ遊びを育てていくプロセス）」

平成 29 年 3 月『久留米市幼児教育研究所 幼研・研究紀要 発達に応じた幼児の支援プログラムの開発Ⅲ 第 61 集』 p15-p18

本教員の主たる研究の成果（5編以内）

(著書)

1. 「心理学 A to B」 共著 平成 25 年 12 月 培風館 (105~122)
2. 「SART：主動型リラクセーション療法」 共著 九州大学出版会 平成 17 年 2 月
3. 「軽度発達障害児のためのグループセラピー」 共著 ナカニシヤ出版 平成 18 年 7 月
4. 「発達のための臨床心理学」 共著 保育出版社 平成 21 年 3 月

(翻訳)

1. 「APA 心理学大辞典」 共著 平成 25 年 9 月 培風館
(約 25000 語のうち、主に「心理学統計」の専門用語 50 単語の翻訳を担当した)
2. 「特別支援教育の理念と実践—早期から積み重ねて育むために—」 共著 ナカニシヤ出版
平成 18 年 8 月

所属学会および参加状況

所属学会	参加状況および役職等
日本心理臨床学会	いずれも不参加
日本心理学会	
日本発達心理学会	
日本教育心理学会 日本特殊教育学会	
日本リハビリティション心理学会	

令和元年度 研究計画

1. 発達につまずきを示す子どもたちの早期発見と支援に関する研究

久留米幼児教育研究所ポプラ学級で、就学前の親子を対象とした発達支援を継続して行い、学会発表に向けての準備を行う。

2. 子育て支援に関する研究

地域子育て支援活動の場等において、支援を必要とする親子に対し、どのような支援を提供できるかについて検討し、地域子育て支援施設や保育所において保護者対象の研修会でその内容を生かす。

3. 保育者養成校における子育て支援活動の目的と意義に関する研究

保育者養成を担う教育機関として、子育てをする親子のニーズを反映させた質の高い活動をどのように提供していくか、また将来保育者を志す学生に子育て支援の実践的な学びをどのように保障していくかについて、本学紀要にまとめる。

平成30年度 教育活動報告（ティーチングポートフォリオ）

平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

前年度記述なし

担当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳						平均
心理学	AA: 1名 A: 2名 B: 12名 C: 3名 D: 0名						3.1
保育内容人間関係	AA: 4名 A: 25名 B: 24名 C: 14名 D: 0名						3.3
保育の心理学	AA: 4名 A: 25名 B: 20名 C: 15名 D: 0名						2.3
発達心理学	AA: 5名 A: 19名 B: 25名 C: 15名 D: 0名						3.2
保育相談支援	AA: 6名 A: 23名 B: 25名 C: 9名 D: 0名						3.4
チャイルドプロジェクト	AA: 2名 A: 4名 B: 2名 C: 0名 D: 0名						4.0
保育実習指導Ⅰ（保育所）	授業継続中						

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
心理学	全学科 1年	卒業選択必修・資格必修

学生の授業評価を踏まえた
自己評価

図7～図12までの授業運営等に関する項目はいずれも「4.5」を超える数値であり、また総合評価も「4.4」であることから、おおむね学生の授業に対する満足度を得られていると理解した。ただ、図13の「先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた」という項目は「3.8」と低く、もう少し積極的に教員が学生の授業態度を育てることに意識を向ける必要があると感じた。

授業についての自己評価

→できた できなかつた→

最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した

5・4 (3)・2・1

教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機動しているかを伝えた

5 (4)・3・2・1

自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した

5・4 (3)・2・1

ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた

5・4 (3)・2・1

振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った

5・4・3・2・1

厳格な授業評価を実施した

5・4・3・2・1

次年度のFD宣言と
教育力向上に向けての計画

授業のテーマや目的をわかりやすく伝えたり、話し方や教材を工夫したりといった教員側の努力は継続して続け、図7～12と総合評価で「4.5」前後の数字を次年度も目指す。一方で、学生の授業態度や自発的な学習を促すといった学生側の取り組みや努力に対して教員が積極的に意識を向け、言語化していくことで図3や図13を4点台にすることを目指す。

科目名	対象	必修・選択
保育内容人間関係	幼稚教育学科 1年	卒業選択・教職必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	問2以外はいずれも4点台であり、総合評価も「4.4」であったことから、おおむね学生の授業に対する評価は得られていると理解した。ただ、問2「わからないときに質問したり、自分で調べたりした」の項目は「3.6」であり、学生の主体的な学びを引き出せていない状況があり、今後改善していく必要がある。	
授業についての自己評価		~できた できなかった~
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4) • 3 • 2 • 1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように発展しているかを伝えた	5 (4) • 3 • 2 • 1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 • 4 • 3 • 2 • 1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 (4) • 3 • 2 • 1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 (4) • 3 • 2 • 1	
厳格な授業評価を実施した	(5) • 4 • 3 • 2 • 1	
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	学生の主体的な学びを育していくためにも、問2「わからない時に質問したり、自分で調べたりした」の項目を「3.6」から「3.9」にすることを目指す。そのために、入学して間もない時期であることを教員が意識し、科目の内容だけでなく学ぶ上での問の立て方や調べ方等を含めた学ぶスキルについても伝えていく。	
科目名	対象	必修・選択
保育の心理学	幼稚教育学科 2年	卒業必修・保育士必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	問1、問2以外はいずれも4点台であり、総合評価も「4.5」であったことから、おおむね学生の授業に対する評価は得られていると理解した。ただ、問1「授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかつた」が「3.8」、問2「分からぬ時には質問したり、自分で調べたりした」が「3.8」と低い数値である。演習科目であるが、個人でワーク課題をした後に、教員が知識を伝える受容學習の場面が多く、学生の主体的な学びや意欲を引き出せていない現状があり、改善が必要である。	
授業についての自己評価		~できた できなかった~
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 • 4 (3) • 2 • 1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように発展しているかを伝えた	5 (4) • 3 • 2 • 1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 (4) • 3 • 2 • 1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 • 4 (3) • 2 • 1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 (4) • 3 • 2 • 1	
厳格な授業評価を実施した	(5) • 4 • 3 • 2 • 1	
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	問2「分からぬ時には質問したり、自分で調べたりした」の項目を「3.8」から「3.7」にする。自ら調べようとする等の意欲を学生に持たせるために、保育現場を意識した資料を配布し、疑問を投げかける等の課題提示の工夫をしていく。	

科目名	対象	必修・選択
発達心理学	幼稚教育学科 1 年	卒業選択・保育士必修・教職必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	問 1、問 2 以外はいずれも 4 点台であり、総合評価も「4.3」であったことから、おおむね学生の授業に対する評価は得られていると理解した。ただ、問 3「授業の内容を理解することができた（または実力がついた）」は「4.1」、問 4「さらに進んで勉強したいと思う」は「4.2」であり、決して高い数値ではない。保育者となるうえで子ども理解のベースとなる科目であり、学生の興味・関心・理解度を高めることが今後の課題である。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知識や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4) 3・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機動しているかを伝えた	5 (4) 3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4 (3) 2・1	
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4 (3) 2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 (4) 3・2・1	
厳格な授業評価を実施した	5 (4) 3・2・1	
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画	問 3「授業の内容を理解することができた（または実力がついた）」の「4.1」を次年度は「4.3」へ、問 4「さらに進んで勉強したいと思う」の「4.2」を次年度は「4.4」に上げることを目標とする。単なる振り返りシートではなく、ミニップペーパーの導入を試みる。	
科目名	対象	必修・選択
保育相談支援	幼稚教育学科 2 年	卒業選択・保育士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	問 2「わからない時は質問したり、自分で調べたりした」の項目が「3.8」であり、それ以外の項目はいずれも 4 点台であったものの、総合評価も「4.2」であり全項目において決して高い数値ではない。保育現場で保護者支援の実践につながる大事な科目であり、もう少し学生の意欲・関心・理解度を全体的に高めていく必要がある。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知識や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4 (3) 2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機動しているかを伝えた	5 (4) 3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 (4) 3・2・1	
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4 (3) 2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 (4) 3・2・1	
厳格な授業評価を実施した	5 (4) 3・2・1	
次年度の FD 宣言と 教育力向上に向けての計画	総合評価を「4.2」から次年度は「4.4」に上げることを目標とする。保育相談支援の科目の中で伝えるべき内容が多すぎたかもしれないと考え、保育者一年目に必要となる学びを優先して重点的に学べるように講義ノートを見直し更新する。	

科目名	対象	必修・選択	
チャイルドプロジェクト	幼児教育学科 2年	卒業必修・資格認証必修	
学生の授業評価を踏まえた自己評価		総合評価は「4.5」であり、また問3以外の項目はすべて4点台の数値であり、おおむね学生の評価を得ることができたと理解した。しかし、受講者が8人と少人数であったにもかかわらず、問3「授業の内容を理解することができた（または実力がついた）」が「3.8」であることが大きな反省点である。学生一人ひとりの興味・関心や理解度に応じた内容が提供できるように今後さらなる改善が必要である。	
授業についての自己評価		→できた できなかった	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3)・2・1	
教科内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 (4)・3・2・1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5 (4)・3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 (4)・3・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3 (2)・1	
厳格な授業評価を実施した		5 (4)・3・2・1	
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画		問3「授業の内容を理解することができた（または実力がついた）」の項目を「3.8」から次年度は「4.0」以上の数値に上げることを目標とする。そのために、学生一人ひとりとの対話を大事にし、興味・関心に応じた学びに取り組むと同時に、学生の成長が実感できるような課題設定を行う。	

平成 30 年度 社会的活動報告

講演等

題名	講演年月日	主催者	場所
1. 信愛つどいの広場 子育て支援講座 「言葉を育む親子の関わり」	平成 30 年 6 月 2 日	久留米信愛短期大学	久留米信愛短期大学
2. 久留米市保育所連絡研修推進委員会 「発達障がい児の理解や対応について 保護者への支援について」	平成 30 年 8 月 3 日	久留米市子ども未来部子ども施設事業課	久留米市教育センター
3. 児童養護施設天使園職員研修 「発達障がいについて」	平成 30 年 9 月 25 日	児童養護施設天使園	児童養護施設天使園
4. 久留米市内単位互換協定校による共同 講義 「子育て支援の現状～発達につまずき のある親子への支援～」	平成 30 年 10 月 5 日	高等教育コンソーシアム久留米・高等教育連携部会	くるめりあ六ヶ門
5. カトリック幼児教育教職員養成研修 「園で気になる子ども」	平成 30 年 11 月 24 日	カトリック福岡教区	カトリック大名町教会
6. 船越保育所保護者会 「子育てについて～保護者が抱く悩みや困り感について等～」	平成 31 年 1 月 12 日	船越保育所保護者会	船越保育所
7. 子育てセミナー 「イケヤセ期と上手に向き合う方法」	平成 31 年 3 月 19 日	子育て支援ボランティアくるるん	久留米市子育て交流プラザくるるん

他団体等への協力

協力内容	協力期間	協力先
久留米幼児教育研究所 ボブラー学級 調査スタッフ 高等教育コンソーシアム久留米 高等教育連携部会 委員	平成 30 年 4 月～ 平成 31 年 3 月	久留米幼児教育研究所 高等教育コンソーシアム久留米
	平成 30 年 4 月～ 平成 31 年 3 月	

他大学への非常勤等

科目名	期間	出向先
なし		

その他の記事項	
内容	年 月 日
1. 教員免許状更新講習会にて「教育の最新事情」の講義を行なった。	平成30年8月20日
2. 「信愛つどいの広場」での相談援助活動 スタッフ及び利用者の方を対象に相談援助を行った。	平成30年4月 平成31年3月
令和元年度 社会的活動計画	
<p>○他団体等への協力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・久留米市幼児教育研究所：ボブラ学級 支援員 ・高等教育コンソーシアム久留米高等教育連携部会 委員 <p>○子育て支援関連</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つどいの広場を利用する親子に対して相談援助活動を行う。 ・親子支援に役立つ内容を取り上げた子育て支援講座を行う。 <p>○教員免許状更新講習会での講師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園教諭の方を対象に、発達に関する教育の最新事情について講義をし、情報提供を行う。 	

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

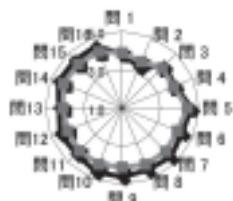
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった。
 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
 問 7 毎回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
 問 9 先生の板書の仕方や視聴覚機器化（デジタルなど）の利用が効果的であった。
 問 10 教科書・参考書・配布資料（プリント・楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
 問 15 先生は学生に対して愛情と尊厳の念を持って、授業を行っていた。
 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

5. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

保育の心理学

問 16 4.5



→教科平均 ←学科平均

保育相談支援

問 16 4.2



→教科平均 ←学科平均

チャイルドプロジェクト

図 16 4.5

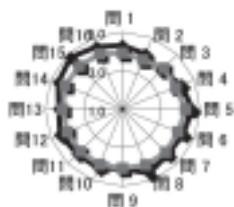


図 16 4.3

発達心理学

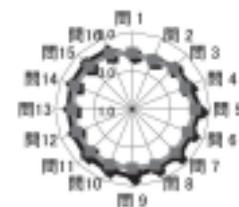


図 16 4.4

保育内容 人間関係

図 16 4.4



教科平均 学科平均

心理学

図 16 4.4



教科平均 学科平均

科目名	図 17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。				
	0分	1~30分	31~60分	61~90分	91分以上
保育の心理学(幼2)	28	9	2	1	0
保育相談支援(幼2)	30	18	6	1	0
チャイルドプロジェクト(幼2)	3	1	1	1	0
発達心理学(幼1)	40	9	5	1	5
保育内容 人間関係(幼1)	34	18	3	1	0
心理学(F1)	4	8	3	0	0

		問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）					
科 目 名		予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
保育の心理学（幼2）		1	6	7	3	0	21
保育相談支援（幼2）		1	7	32	4	1	13
チャイルドプロジェクト（幼2）		0	0	5	0	0	0
癡連心理学（幼1）		1	4	13	18	0	31
保育内容 人間関係（幼1）		3	5	18	9	2	20
心理学（フ1）		0	3	0	11	0	1

所属学科	職名	氏名	
幼稚教育	准教授	重木 茂	
担当科目			
科目名	対象	必修・選択	
社会的養護内容	幼稚教育学科 2年	保育士必修	
社会福祉論	幼稚教育学科 1年	保育士必修	
相談援助	幼稚教育学科 2年	保育士必修	
社会福祉概論	フードデザイン学科 2年	栄養士必修	
チャイルドプロジェクト	幼稚教育学科 2年		
保育実習Ⅰ	幼稚教育学科 2年	保育士必修	
保育実習指導Ⅰ	幼稚教育学科 2年	保育士必修	
キャリアガイダンスⅠ	幼稚教育学科 1年		
社会的養護	幼稚教育学科 1年	保育士必修	
研究分野			
<ul style="list-style-type: none"> ・現代社会における児童問題 ・障害児をめぐる動向 ・ボランティア活動の実践的意義 ・公的扶助に関する動向 			

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

施設実習の在り方に關する学生の意識及び事後の変化にみられる課題の考察

平成 30 年度の研究の成果

なし

平成 29 年度及び 28 年度の研究の成果

なし

本教員の主たる研究の成果（5編以内）

所属学会および参加状況

所属学会

参加状況および役職等

日本地域福祉学会

不参加

令和元年度 研究計画

- ・ボランティア活動の実践を通した社会的意義
- ・施設実習を通した学生の意識の変化及び施設に関する正しい理解へのアプローチ

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

- ・双方向授業への工夫及び方法の追求
- ・理解度の状況確認及び補足説明の徹底

担当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
社会的養護内容	AA: 1名, A: 10名, B: 43名, C: 5名, D: 5名	3.0
社会福祉論	AA: 3名, A: 16名, B: 17名, C: 18名, D: 14名	2.6
相談援助	AA: 3名, A: 26名, B: 18名, C: 10名, D: 5名	3.2
社会福祉概論	AA: 1名, A: 2名, B: 10名, C: 5名, D: 0名	2.9
チャイルドプロジェクト	AA: 1名, A: 6名, B: 3名, C: 0名, D: 0名	3.8
保育実習Ⅰ	AA: 2名, A: 24名, B: 32名, C: 4名, D: 0名	3.4
保育実習指導Ⅰ	AA: 6名, A: 32名, B: 20名, C: 4名, D: 0名	3.6
キャリアガイダンスⅠ	AA: 0名, A: 26名, B: 27名, C: 11名, D: 0名	3.2
社会的養護	AA: 0名, A: 11名, B: 28名, C: 20名, D: 6名	2.7

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
社会的養護内容	幼児教育学科2年	保育士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	実習を前提に施設内容御実践への比重を置いた為、社会的視点への説明が十分ではなかった。	

授業についての自己評価	一できた できなかった
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 (4) • 3 • 2 • 1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 (4) • 3 • 2 • 1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 • 4 (3) • 2 • 1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 • 4 (3) • 2 • 1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 • 4 (3) • 2 • 1
独自な授業評価を実施した	5 • 4 (3) • 2 • 1

次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	双方向授業 施設養護の社会的視点への関連
---------------------------	-------------------------

科目名	対象	必修・選択
社会福祉論	幼児教育学科1年	保育士必修
制度としての社会福祉事業の理解に基づく、学生にとって身近な生活問題との意識化まで到達しえなかつた。		
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		双方的授業 理解確認の方法の工夫
科目名	対象	必修・選択
相談援助	幼児教育学科2年	保育士必修
生活問題の認識に時間を割いた為、保育士の観点からの援助実践の理解が十分とはいえないなかつた。		
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		双方的授業 事例を通して理解の推進

科目名	対象	必修・選択
社会福祉論	フードデザイン学科2年	栄養士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		栄養士職に就いて基本的な社会福祉に関する知識の理解はできたが、専門職との関連性の説明が不十分であった。
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		双方向授業 身近な「社会福祉」に関する生活問題の提示
科目名	対象	必修・選択
チャイルドプロジェクト	幼児教育学科2年	
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		受講学生の意識の高さもあり「ボランティア」に関する学びが横ね順調にすすめることができた。
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		学生の主体性助長に向けた工夫

科目名	対象	必修・選択
社会的養護	幼児教育学科1年	保育士必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	児童養護の現状、課題等の理解を基本としたが、社会的視点との関連性の理解が十分とはいえないかった。	
授業についての自己評価		→できた できなかった→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	双方向授業 施設内見学と社会的視点の関連の説明	

平成30年度 社会的活動報告			
講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
他大学への非常勤等			
科目名	期間	出向先	
その他の記事項			
内容	年 月 日		
令和元年度 社会的活動計画			
久留米市におけるボランティア活動への協力			

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・転読・メールをすることが少なかった。
- 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
- 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
- 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
- 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
- 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
- 問 7 毎回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
- 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
- 問 9 先生の板書の仕方や視聴覚機器（ピアノなど）の利用が効果的であった。
- 問 10 教科書・参考書・配有資料（プリント・楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
- 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
- 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
- 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
- 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
- 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
- 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

5. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

キャリアガイダンスⅠ

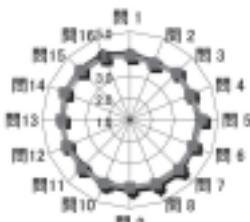
問 16 3.8



➡教科平均 ⚡学科平均

キャリアガイダンスⅡ

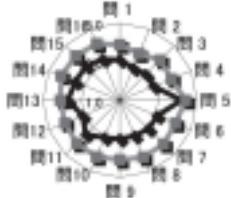
問 16 4.2



➡教科平均 ⚡学科平均

社会福祉論

問 16 3.3



➡ 教科平均 ⚡ 学科平均

相談援助

問 16 3.7



➡ 教科平均 ⚡ 学科平均

社会的養護

問 16 3.3



➡ 教科平均 ⚡ 学科平均

社会的養護内容

問 16 4.0



➡ 教科平均 ⚡ 学科平均

チャイルドプロジェクト

問 16 5.0



➡ 教科平均 ⚡ 学科平均

社会福祉概論

問 16 3.8



➡ 教科平均 ⚡ 学科平均

		問17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。				
科 目 名		0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
キャリアガイダンスⅠ（幼1）		43	8	2	0	0
キャリアガイダンスⅡ（幼2）		37	14	2	0	0
社会福祉論（幼1）		44	12	2	0	0
相談援助（幼2）		33	13	5	4	1
社会的養護（幼1）		38	15	3	0	0
社会的養護内容（幼2）		36	11	6	2	1
チャイルドプロジェクト（幼2）		7	1	0	0	0
社会福祉概論（フ2）		13	1	0	1	0

		問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）				
科 目 名		予習	復習	課題	試験	自発的
キャリアガイダンスⅠ（幼1）		1	2	6	1	0
キャリアガイダンスⅡ（幼2）		2	1	21	0	0
社会福祉論（幼1）		1	1	3	14	2
相談援助（幼2）		1	1	3	32	0
社会的養護（幼1）		0	3	6	19	0
社会的養護内容（幼2）		3	5	6	21	2
チャイルドプロジェクト（幼2）		0	0	3	0	1
社会福祉概論（フ2）		0	1	0	2	0

所属学科	職名	氏名
幼稚教育学科	講師	新井 真実
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
生活とスポーツⅠ	幼稚教育学科1年	卒業必修 免許・資格必修
生活とスポーツⅡ	幼稚教育学科1年	卒業必修 免許・資格必修
教育実習(事前・事後指導)	幼稚教育学科1年	卒業選択 免許・資格選択必修
体育	幼稚教育学科2年	卒業必修 免許・資格選択必修
身体表現	幼稚教育学科2年	卒業必修 免許・資格選択必修
チャイルドプロジェクト (からだあそび研究会)	幼稚教育学科2年	卒業必修 免許・資格必修
研究分野		
1. 舞踊・身体表現の分野	上演型舞踊、民俗舞踊等の舞踊文化について、それぞれの舞踊が根差す社会における価値の理念型やパフォーマーの表現意識に着目した研究を行っている。	
2. 保育者養成の分野	保育士及び幼稚園教諭の養成に関して、特に身体表現分野についてその目的と意義、方法について研究を行っている。	
3. 子育て支援の分野	子育て中の母親が抱えがちな身体的・精神的なマイナートラブルの緩和、ボディ・ワークの構造に向けた研究を行っている。特に、産後の母親と乳児を対象としたメソッドの検討を行っている。	
4. レクリエーション・生涯スポーツの分野	現代社会における身体教育活動の意義・目的について、レクリエーションや「ゆるスポーツ」等の各種運動を活用した教育プログラムの検討を行っている。	
5. コミュニティアート・ゾーシャル・エンゲージメント・アートの分野	地域社会における芸術活動のあり方と意義について研究している。特にコミュニティダンスを通じた多様な人々の出会いの場の創造、地域活性化のプロセスと教育的效果について着目している。	

平成30年度 研究報告

平成30年度の研究の概要

1. 保育者養成課程における「身体表現」とレクリエーションの活用に関する研究

保育者養成課程の学生たちが創造的表現活動を経験することの意義と方法に関する先行研究（猪澤,2017）に基づく、実践研究を行った。特に身体表現教育におけるインプロ（即興）の有効性に着眼し展開した。

2. 幼児期の運動機能に関する研究

子どもの発達の順序性を踏まえた保育という観点から、乳幼児期（特に幼児期）の運動機能に関する研究を行った。

3. ダンスと言葉の関わりに関する研究

“ことば（言語感覚）とからだ（身体感覚）を統ぶるものとのダンス”にフォーカスした、研究を進めている。具体的には、武藏野大学教育学部「体育講義」の特別講師を担当するに当たり、「からだことば」とダンスの関わりに関する基礎研究と、学生に対するアンケートの実施、調査分析を行った。

4. 教職体育における表現運動系及びダンス指導に関する研究

学習指導要領の改訂、体育科・保健体育科の改訂の趣旨を踏まえ、教職体育における表現運動系及びダンスの教授法に関する研究を行っている。具体的には、久留米大学スポーツ医科学科教職課程「体育実技（ダンス）」の授業を活用した、教職課程における教授法の研究を開始した。

5. ダンスを通じた中心市街地活性化に関する研究

コミュニティダンスの活用および普及による中心市街地活性化に向けての試みを行った。久留米市、久留米市教育委員会、久留米商工会議所等と連携することにより、ワークショップやイベント等に多数参画し、中心市街地の新たな魅力と取組みの創出と、健康新聞の普及に取り組んだ。また一連の取り組みを通じ、学生のコミュニティダンスやソーシャルインクルージョンの理念理解の促進を試みた。

6. 子育て支援に関する研究

主に産後5ヶ月～12ヶ月頃の母親を対象とした、ストレッチ・骨盤ケア・体幹トレーニングクラスの検討を行った。基礎研究、及び本学子育て支援講座における実践、受講者アンケートの実施を行った。

7. 保育者のためのパフォーマンス理論

保育者対象講習会講師（身体表現分野）及びアンケート調査等、基礎研究を行った。

8. ダンスを活用した食育推進事業の試み

久留米市農政部農政課からの依頼を受け、食育をテーマとする久留米産農産物PR動画「くるめさん、ぐるめさん」への振付を受託。振付および上演指導、映像ビデオの制作・配信、モデル園での実践等を行い、それを通じて、ダンスによるアクティブ・ラーニングに関する研究として、活動の概要とその成果についてまとめている。

平成 30 年度の研究の成果

(著書)

- 1.『子どもの発達の連続性を支える保育の心理学』 共著 平成 31 年 3 月 教育情報出版
(106~109 : 6 章 身体機能と運動機能の発達について学ぼう)

(論文)

- 1.「コピペからのアレンジ力」としての「re-creation スキル」に着眼したからだあそび試論
—身体表現教育とレクリエーション教育の融合に関する一考察—
(公益財団法人日本レクリエーション協会 演習認定校研究連絡協議会
「自由時間研究」第 43 号)
※【公益財団法人日本レクリエーション協会平成 29 年度研究助成事業】採択

- 2.ダンスが拓くソーシャル・インクルージョンの地平(2)
—信愛オリジナル・コミュニティダンス「ココ、カラダ。」の振付プロセスに着目して—
平成 30 年 9 月 『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』 (9~18)
- 3.身体表現教育とレクリエーション教育の融合の可能性に関する一考察
—「コピペからのアレンジ力」としての「re-creation スキル」に着眼したからだあそび試論—
平成 30 年 9 月 『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』 (43~50)

(発表)

- 1.「コピペからのアレンジ力」としての「re-creation スキル」に着眼したからだあそび試論
—身体表現教育とレクリエーション教育の融合に関する一考察—
平成 30 年 6 月 平成 30 年度公益財団法人日本レクリエーション協会・演習認定校研究連絡協議会
全国大会 助成研究成果発表 立教大学

(報告)

- 1.久留米信愛短期大学からだあそび研究会「プロジェクト HOTM! X (ホトミクス) 2018」
活動報告 平成 31 年 3 月 久留米市市民活動活性化・まちづくり推進事業補助企事業報告書
※【平成 30 年度久留米市市民活動活性化・まちづくり推進事業補助金】(主催:久留米市・協働推進協議会連携事業)(協働推進部門・所管部署:久留米市農政部農政課)採択

平成 29 年度及び 28 年度の研究の成果

(論文)

- 1.保育者養成課程における「身体表現」に関する一考察
—「コピペ思考」の脱却と「re-creation スキル」の有效性に着目して—
(公益財団法人日本レクリエーション協会 演習認定校研究連絡協議会
「自由時間研究」第 42 号)
※【公益財団法人日本レクリエーション協会平成 28 年度研究助成事業】採択

- 2.「コピペからのアレンジ力」としての「re-creation スキル」に着眼したからだあそび試論
—身体表現教育とレクリエーション教育の融合を目指して—
(公益財団法人日本レクリエーション協会 演習認定校研究連絡協議会
「自由時間研究」第 43 号)
※【公益財団法人日本レクリエーション協会平成 29 年度研究助成事業】採択
- 3.ダンスが拓くソーシャル・インクルージョンの地平(1)
—学生とつくる生涯スポーツ的コミュニティ・ダンスの試み—
(久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第 40 号)

4. 「コピペ思考」の脱却と「rec-creation スキル」の有効性について
—保育者養成課程における「身体表現」に関する一考察—
(久留米情愛女学院短期大学研究紀要 第40号)

（発表）

1. 保育者養成課程における「身体表現」に関する一考察
—「コピペ思考」の脱却と「rec-creation スキル」の有効性について—
平成29年6月 平成29年度公益財団法人日本レクリエーション協会・課程認定校研究連絡協議会全国大会 助成研究成果発表 京都学園大学

（報告）

1. 「プロジェクト HOTM! X (ホトミクス)」平成28年度活動報告
久留米情愛女学院短期大学からだあそび研究会（新井セミナー）
※【平成28年度くまらなか万博】(主催：(株)ハイマート／後援：久留米市 久留米商工会議所)事務】採択
2. 「プロジェクト HOTM! X (ホトミクス) 2017」平成29年度活動報告
久留米情愛女学院短期大学からだあそび研究会（新井セミナー）
※【平成29年度くまらなか市民活動活性化補助金事業】(主催：久留米市 協働推進課協働推進課)事務】採択

本教員の主たる研究の成果（5編以内）

（著書）

- ・『子どもの発達の連続性を支える保育の心理学』 共著 教育情報出版 2019
(106~109 : 6章 身体機能と運動機能の発達について学ぼう)

（論文）

- ・「「動かす」身体表現の位相」『お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 人文学専攻論文叢書』2006
・「職業的パフォーマンスとしてのストリップ試論」第16回舞踏学会例会 2011
・「保育者養成課程における「身体表現」に関する一考察—「コピペ思考」の脱却と「rec-creation スキル」の有効性に着目して—」公益財団法人日本レクリエーション協会 認定校研究連絡協議会『自由時間研究』第42号 2017

（報告）

- ・「エイブル・アート・オン・ステージ（障害のある人との舞台芸術活動支援事業）に関する活動報告」
日産自動車 日産NPOラーニング奨学金制度活動報告会、2006

所属学会および参加状況

所属学会	参加状況および役職等
舞踏学会	不参加
日本子ども学会	不参加
全国保育士養成協議会	不参加
日本レクリエーション協会	全国大会（東京）参加
課程認定校研究連絡協議会	助成研究成果発表（立教大学）参加

令和元年度 研究計画

1. 幼児期の運動機能に関する研究

子どもの発達の順序性を踏まえた保育という観点から、乳幼児期（特に幼児期）の運動機能に関する研究を行う。

2. ダンスと言葉の関わりに関する研究

“ことば（言語感覚）とからだ（身体感覚）を結ぶものとしのダンス”にフォーカスした研究を進め る。

3. 教職体育における表現運動系及びダンス指導に関する研究

学習指導要領の改訂、体育科・保健体育科の改訂の趣旨を踏まえ、教職体育における表現運動系及びダンスの教授法に関する研究を行う。

6. 子育て支援に関する研究

主に産後 5 ヵ月～12 ヵ月頃の母親を対象とした、ストレッチ・骨盤ケア・体幹トレーニングクラス の検討を行う。基礎研究および、本学子育て支援講座における過去 3 年間の実践と、受講者アンケート の分析を進める。

7. ダンスを活用した食育推進事業の試み

食育をテーマとするダンス活動の試みについて、上演指導、教則ビデオの制作・配信、モデル園での 実践を通して、活動の概要とその成果についてまとめる。

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

【目標】

学生の積極的学修を促進する。

【成果の指標】

授業評価アンケートの「図16」（予習・復習関連）および「図17：総合評価」の項目に關して、その評価を向上させる。

【教育力向上に向けての計画】

自主的な学修を促すため、以下を実行する。

- ・身体を使った実技授業における「予習・復習」のあり方・意義について説明する。
- ・授業外での学修方法を説明する（図書館の活用、参考書の紹介等）。
- ・質問しやすい雰囲気づくりに努める。

担当科目的成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
生活とスポーツI	AA: 8名, A: 43名, B: 17名, C: 1名, D: 4名	3.8
生活とスポーツII	AA: 5名, A: 32名, B: 19名, C: 5名, D: 0名	3.6
体育	AA: 11名, A: 26名, B: 17名, C: 10名, D: 0名	3.6
身体表現	AA: 6名, A: 14名, B: 27名, C: 6名, D: 0名	3.4
チャイルドプロジェクト	AA: 1名, A: 5名, B: 1名, C: 0名, D: 0名	4.0
教育実習(事前・事後指導)	AA: 5名, A: 24名, B: 24名, C: 9名, D: 0名	3.6

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
生活とスポーツI	幼児教育学科1年	卒業必修 免許・資格必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価		
今年度カリキュラム変更により授業回数が半減した。これまで全15回で講義を開催してきたところ、半分の7.5回でコンパクトに、幼児体育理論の基礎的な内容を盛り込み、かつ定着させることができた。講義のボリュームが多い分、自主的な調べ学習の時間をしっかりと持つことができなかっただため、学生の授業評価においても、関係する項目のポイントが落ち込んだ。		

授業についての自己評価	→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教説・指導した	5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3・2・1
細密な授業評価を実施した	5・4・3・2・1

次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	学生が7.5回という授業回数で無理なく理解できるよう、講義内容について、優先順位をつけて整理する。授業内で詳細まで扱えないテーマについては、学生が興味関心をもって自ら調べることのできるよう、効果的な働きかけを意識する。
-----------------------	---

科目名	対象	必修・選択
生活とスポーツⅡ	幼稚教育学科1年	卒業必修 免許・資格必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		今年度カリキュラム変更により授業回数が1.5倍に増加した。これまで15回で講義を展開してきたところ、全22.5回となったことを活かし、実技試験に向けての幼児体操・ダンスを通じた動作の定着に、十分な時間をとることができた。じっくりと動きを学び、咀嚼する時間を持てたことで、学生たちの満足度も高まったと思われる。
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 (4) 3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5 (4) 3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4 (3) 2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4 (3) 2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		毎回テーマに沿って様々な道具を用いた運動あそびを行っているが、次年度は応用・アレンジについて学びを深める時間を、多く持つていきたい。また、実技試験に向けての幼児体操・ダンスを通じた動作の熟達にはひきづき力を入れ、学生の動きの流動化につなげたい。
科目名	対象	必修・選択
体育	幼稚教育学科2年	卒業必修 免許・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		課題に応じた運動プログラムの立案と実践を行っている。学生は立案に時間をかけ過ぎるため申だるみしがらで、実践に向けた練習が十分でないために、発表時の完成度が低くなり、結果達成感も薄い。グループワークを活性化させるテク入れが必要である。
授業についての自己評価		→できた できなかつた
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5 (4) 3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように構成しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4 (3) 2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4 (3) 2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4 (3) 2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		教員自身の立案について紹介したり、教員自身が実践する姿をしっかり見せることにより、学生たち自身のワークに向けた意欲を醸成していきたい。モデルに引きずられ自主性・独創性が損なわれることを懸念するばかりではなく、学生が「手本」の効用を体感することで、幼児体育への理解を深めることを目指したい。

科目名	対象	必修・選択
身体表現	幼児教育学科2年	卒業必修 免許・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	子どもの身体表現の特徴についての学びを踏まえ、グループ毎にテーマに応じたステージ作品を創作している。メンバーが協力しあい、積極的かつ計画的に進める事でできたグループの学生は満足度が高いが、そうでないグループの学生との差異が大きい点が課題である。	
授業についての自己評価		→できた できなかった→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	学生が固定概念から解き放たれ「こんな表現があるんだ！」という驚きに出来る授業をデザインしていきたい。創造的な身体表現や舞台作品に、映像等で触れられる機会を持ったり、またグループでの作品づくりにおいても、オリジナリティを發揮しやすい枠組みづくりを検討したい。	
科目名	対象	必修・選択
チャイルドプロジェクト（からだあそび研究会）	幼児教育学科2年	卒業必修 免許・資格必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	久留米市農政部農政課からの「くるめさん、ぐるめさん」振付依頼を受け、この取り組みを軸に平成30年度の活動をデザインした。<久留米市市民活動活性化の・練づくり推進事業補助金>（主催：久留米市・協働推進部協働推進課）事業（協働推進部門・所管部署：久留米市農政部農政課）に採択されたことにより、資金面でも広報面でもダイナミックな活動をすることができた。「ここでしかできない」「私たちだからできた」活動として、学生の満足度も高かった。	
授業についての自己評価		→できた できなかった→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	行政や、各種団体からの依頼を受けてのイベント参加、補助金の下での活動について、学生の中でしっかりと理解が進まないまま、活動が走り出てしまっている感がある。年度の終わりには理解できるようだが、できれば活動の過程でもっとそのことに触れられるよう工夫したい。時間的になかなか難しいが、市役所や商工会議所の方との打ち合わせの場に出席することなど、検討していきたい。	

平成30年度 社会的活動報告

講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
1. ガイアの時間 「子どもと楽しむからだあそび」	平成30年10月27日	福岡海星女子学院高等学校	福岡海星女子学院高等学校
2. 南筑ライフデザインカレッジ 「子どもと楽しむからだあそび」	平成30年5月21日	久留米市立南筑高等学校	久留米信愛短期大学
3. 信愛接続プログラム 「子どもと楽しむからだあそび」	平成30年11月18日	久留米信愛高等学校	久留米信愛短期大学
4. 信愛女子学院高等学校 「ミ・ラ・イ フィールド」体験授業	平成30年11月18日	久留米信愛高等学校	久留米信愛短期大学
5. 明光学園高等学校 「キャンパスデザイン講座」体験授業	平成30年5月24日	明光学園高等学校	久留米信愛短期大学
6. 誠修高等学校高大連携プログラム	平成30年11月15日	誠修高等学校	久留米信愛短期大学
7. 大牟田北高等学校 キャンパス訪問 体験授業	平成30年10月18日	福岡県立大牟田北高等学校	久留米信愛短期大学
8. 久留米市立牟田山中学校 総合学習 「保育・幼児教育フィールド」体験授業	平成30年10月19日	久留米市立牟田山中学校	久留米市立牟田山中学校
9. 久留米市立北野山中学校 「保育・幼児教育フィールド」体験授業	平成30年5月15日	久留米市立北野山中学校	久留米市立北野山中学校
10. 久留米市立明星中学校 「保育・幼児教育フィールド」体験授業	平成30年9月7日	久留米市立明星中学校	久留米市立明星中学校
11. 久留米信愛短期大学オープンキャンパス 幼児教育学科体験授業 「子どもと楽しむからだあそび」	平成30年7月22日	久留米信愛短期大学	久留米信愛短期大学
12. 信愛つどいの広場子育て支援講座 「産後ママと赤ちゃんに効く 抱っこ de エクササイズ」	平成30年12月1日	久留米信愛短期大学	久留米信愛短期大学
※その他のワークショップ講師等については 改めて記載			

他団体等への協力				
協力内容	協力期間	協力先		
【委員】 1. 久留米市スポーツ振興会委員 2. 久留市中心市街地活性化協議会委員・幹事 3. 久留米広域連携中核都市圏ビジョン懇談会委員 分科会（都市機能・生活関連機能サービス検討分科会）会長 4. 久留米市市民活動センター指定管理者選定委員会委員 5. 高等教育コンソーシアム久留米 地域支援部会	平成 30 年 1 月 1 日～令和元年 12 月 31 日 平成 31 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日 平成 30 年 6 月 29 日～令和 3 年 3 月 31 日 平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日 令和元年度	久留米市 久留米商工会議所 久留米市 久留米市 高等教育コンソーシアム久留米		
他大学への非常勤等				
科目名	期間	出向先		
武蔵野大学 教育学部「体育講義」特別講師 久留米大学 人間健康学部 スポーツ医科学科 「体育実技（ダンス）」非常勤講師	平成 30 年 5 月 7 日 平成 30 年度 後期	武蔵野大学 久留米大学		
その他特記事項				
内容	年 月 日			
特になし				
令和元年度 社会的活動計画				
<p>1. 非常勤講師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 31 年度後期 久留米大学 人間健康学部 スポーツ医科学科「体育実技（ダンス）」非常勤講師 ・平成 31 年度後期 久留米工業大学 工学部 機械システム工学科／建築・設備工学科 情報ネットワーク工学科／教育創造工学科「生涯スポーツ IV」非常勤講師 <p>2. 教員免許状更新講習会講師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成 31 年 8 月 29 日 教員免許状更新講習会「幼児の身体表現」講師 <p>3. 出前講座・公開講座講師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和元年 8 月 4 日 久留米創愛短期大学オープンキャンパス体験授業 講師 ・令和元年 5 月 27 日 南筑高等学校 南筑ライフデザインカレッジ 講師 ・令和元年 6 月 24 日 久留米市立北野中学校 出前講座 講師 				

- ・令和元年《期日未定》明光学園高等学校 チャレンジプログラムキャンパスデザイン講座 講師
- ・令和元年《期日未定》久留米信愛女学院高等学校 ミ・ラ・イフィールド 講師
- ・令和元年《期日未定》久留米信愛女学院高等学校 信愛継続プログラム 講師
- ・平成32年3月7日 福岡海星女学院高等学校 ガイアの時間 講師

4. 子育て支援講座講師

- ・令和元年7月13日 信愛つどいのひろば子育て支援講座
「産後ママと赤ちゃんに効く 抱っこ de エクササイズ」 講師

5. 地域参画活動（中心市街地活性化 等）

- ・平成31年4月29日＜第4回 久留米楽団団士つりんステージ出演および
久留米商工会議所との共同企画参画
- ・令和元年6月～7月＜第11回 久留米まちゼミ アフター5＞講師

ほか

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

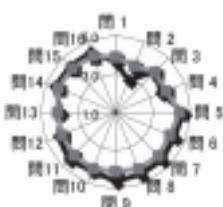
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった。
 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
 問 7 今回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
 問 9 先生の板書の仕方や聴覚覚機器（ピアノなど）の利用が効果的であった。
 問 10 教科書、参考書、配布資料（シート・楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
 問 15 先生は学生に対して愛情と尊厳の念を持って、授業を行っていた。
 問 16 この授業を総合的に評価すると 5 点満点で何点になりますか。

5. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

生活とスポーツⅠ

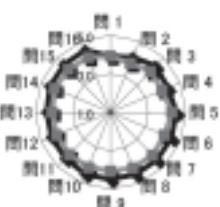
問 16 4.4



→教科平均 ←学科平均

生活とスポーツⅡ

問 16 4.5



→教科平均 ←学科平均

体育

問 16 4.3



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

チャイルドプロジェクト

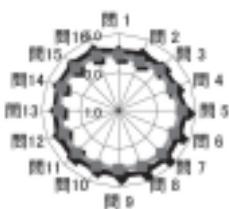
問 16 4.6



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

身体表現

問 16 4.4



➡ 教科平均 ⬇ 学科平均

		問 17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。				
科 目 名		0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
生活とスポーツⅠ（幼1）		27	30	9	1	0
生活とスポーツⅡ（幼1）		27	11	12	2	0
体育（幼2）		18	21	10	3	4
チャイルドプロジェクト（幼2）		2	3	0	1	0
身体表現（幼2）		24	14	10	3	4

科 目 名	問13 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）					
	予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
生活とスポーツⅠ（幼1）	0	9	15	34	3	15
生活とスポーツⅡ（幼1）	2	4	13	17	2	25
体育（幼2）	15	3	27	4	0	11
チャイルドプロジェクト（幼2）	0	0	4	0	1	1
身体表現（幼2）	2	2	39	0	0	12

所属学科	職名	氏名	
幼稚教育	講師	増田 吹子	
担当科目			
科目名	対象	必修・選択	
保育内容総論	幼稚教育学科 1年生	卒業選択、免許・資格必修	
保育内容 環境	幼稚教育学科 1年生	卒業選択、免許・資格必修	
看護基礎論	幼稚教育学科 1年生	卒業選択、免許・資格必修	
保育課程論	幼稚教育学科 1年生	卒業選択、免許・資格必修	
保育実習Ⅰ	幼稚教育学科 2年生	卒業選択、資格選択必修	
保育実習指導Ⅱ	幼稚教育学科 2年生	卒業選択、資格選択必修	
キャリアガイダンスⅠ	幼稚教育学科 1年生	卒業選択、資格選択必修	
キャリアガイダンスⅢ	幼稚教育学科 2年生	卒業選択、資格選択必修	
保育・教職実践演習(幼稚園)(2回)	幼稚教育学科 2年生	卒業選択、免許・資格必修	
チャイルドプロジェクト	幼稚教育学科 2年生	卒業必修、資格選択必修	
研究分野			
1. 保育内容の分野 幼稚園教育要領・保育園保育指針等を基盤とした保育の展開による保育の質の向上について研究している。			
2. 保育者養成の分野 保育者養成について、実習指導を中心に研究を行っている。			
3. 保育現場との共同研究の分野 平成29年度から鹿児島おおとり幼稚園を定期的に訪問し、子どもの姿や保育者の指導を記録、保育後に保育者と保育内容に関する協議を行い、保育内容「環境」に関する研究を行っている。			

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. 保育内容の分野

- ①領域「環境」についての研究を行った。本学紀要に論文を投稿中である。
②指針・要領の改訂についての文献研究を行い、保育者を対象とした研修や免許状更新講習などにおいて指導を行った。

2. 保育者養成の分野

文献研究や学会・セミナーへの参加によって得られた知見を基に、主に実習の進め方や実習指導のあり方を追及している。

3. 現場との共同研究

保育園で子どもの様子やクラス運営の様子を見学させていただき、子どもの姿を理解して関わる保育者の姿についての研究を進めている。

平成 30 年度の研究の成果

〔論文〕

1. 「保育内容としての伝統行事—領域「環境」を中心として—」 単著 『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』 投稿中
(報告)
1. 「『信愛つどいの広場』における子育て支援の実際」 単著 『久留米信愛短期大学研究紀要第 41 号』 投稿中

平成 29 年度及び 30 年度の研究の成果

【論文】

1. 「保育の質を向上させる保育内容についての検討」 共著 平成 29 年 1 月 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第 47 号
2. 「幼稚園教育実習の事後指導における個別面談によるフィードバックの試み」 単著 平成 29 年 1 月 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第 47 号
3. 「領域を重視した指導の計画と実践—カリキュラム・マネジメントの確立に向けて—」 共著 平成 30 年 1 月 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第 48 号

〔発表〕

1. 「保育実践の現場から保育の質を考察する（2）—0 幼稚園の取り組み」 共同 平成 28 年 5 月 日本保育学会第 69 回大会
2. 「領域評価シートを活用した行事指導改善の試み」 単著 平成 30 年 2 月 日本保育学会九州地区 第 2 回研究集会

本教員の主たる研究の成果（5 篇以内）

1. 「高度経済成長期における家庭の教育機関の変化に関する一考察」 単著 平成 12 年 12 月 乳幼児教育学研究第 9 号
2. 「子どもとのかかわりを通しての学生の学び（2）」 単著 平成 27 年 1 月 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第 45 号
3. 「保育の質を向上させる保育内容についての検討」 共著 平成 29 年 1 月 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第 47 号
4. 「幼稚園教育実習の事後指導における個別面談によるフィードバックの試み」 単著 平成 29 年 1 月 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第 47 号
5. 「領域を重視した指導の計画と実践—カリキュラム・マネジメントの確立に向けて—」 共著 平成 30 年 1 月 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第 48 号

所属学会および参加状況	
所属学会	参加状況および役職等
日本保育学会	平成30年度第71回大会 参加
日本乳幼児教育学会	平成30年度第28回大会 参加
令和元年度 研究計画	
1. 保育内容の分野	「環境」の領域において、特に科学的な思考の芽生えに焦点をあてて研究を進め、チャイルドプロジェクトの「科学遊び研究会」における指導につなげる。 また、「人間関係」において、『保育内容（人間関係）ワークブック』（共著）あいり出版 第6章「幼保小連携と人間関係」の一部を執筆中である。
2. 保育者養成の分野	特に実習を中心に研究を進める。『保育実習・幼稚園教育実習・施設実習完全book(仮題)』（共著）前文書林のコラムを執筆中である。また、本学における「実習マニュアル」の整備を進める。
3. 現場との共同研究	現場に伺う機会を作り、主に保育内容の分野について実際の子どもの姿を観察しながら保育内容についての研究を進める。

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）		
平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画		
本学での就任初年度となるため、特に学生との関係性の構築に努め、また、学生の興味や意欲、理解度を把握した上で授業を行う。具体的には、特に保育の基礎となる「保育内容総論」「教職基礎論」では振り返りシートを作成し、学科全体で毎回提出を義務付けている「保育実習指導II」の授業ノートについても、毎回添削してコメントをつけて返す。		
特に理論系の内容が多くなる「保育内容総論」「保育内容 環境」「教職基礎論」「保育課程論」において、図3「私は、この授業の内容を理解することができた（または実力がついた）」の項目 4.0 以上、総合評価 4.3 以上を目指す。		
担当科目の成績評価		
科目名	成績評価の内訳	平均
保育内容総論	AA: 11名, A: 39名, B: 12名, C: 3名, D: 1名	3.8
保育内容 環境	AA: 8名, A: 31名, B: 19名, C: 7名, D: 1名	3.6
教職基礎論	AA: 5名, A: 37名, B: 15名, C: 6名, D: 1名	3.6
保育課程論	AA: 11名, A: 14名, B: 20名, C: 16名, D: 3名	3.2
保育実習指導II	AA: 28名, A: 18名, B: 10名, C: 6名, D: 0名	4.1
チャイルドプロジェクト	AA: 0名, A: 11名, B: 2名, C: 0名, D: 0名	3.8

各授業の評価		
科目名	対象	必修・選択
保育内容論	幼稚教育学科1年生	卒業認定・免許資格必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	1年生の前期に学生が初めて保育内容に触れる科目なので、わかりやすいことや興味をもてるようにすることを心掛け、毎回の授業の終了後に振り返り用紙を提出させ添削コメントをつけて次の授業で返した。グループで指導案を作成し模擬保育を行うなど、アクティブラーニングの手法もとりいれた。自分自身も初めて担当する科目であったが、問3(理解)は4.3と目標を達成できた。	
授業についての自己評価		→できた できなかった→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	授業アンケートの問2(わからないときには質問したり、自分で調べたりした)が2クラスとも3.8、問17(学習時間)が1.6と低い。理解度の項目は評価が高いため、ただ「わかった」というのではなく自分でもっと学びたいという気持ちを高めるようにし、それぞれ0.2ポイントアップを目指す。	
科目名	対象	必修・選択
保育内容 潛在	幼稚教育学科1年生	卒業認定・免許資格必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	総合評価が4.6、問3(理解)が4.1であり、目標を達成できた。その他も問2(質問等した)・問17(学習時間)以外は4.1以上あり、概ね高評価であった。栽培活動や製作等をふんだんに取り入れた科目なので、全体的に楽しく授業に参加できたと思われる。一方で、「様々な活動を経験して楽しかった」で終わっている学生が一定数いることが懸念される授業内容であったのではないかという反省がある。	
授業についての自己評価		→できた できなかった→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	次年度入学生から2年生の開講となるので、それまでの実習経験等を授業内容につなげながら、より理論的な理解が進むように留意する。理論的な内容を増やしても、問3(理解)の項目の評価が現在の4.1を下回らないようにする。	

科目名	対象	必修・選択	
教職基礎論	幼稚教育学科1年生	卒業選択・免許資格必修	
学生の授業評価を踏まえた自己評価		講義科目なので、より理解しやすく教籍に対する問題意識をもてるよう毎回問い合わせを提示し参加意識を高めるよう心掛けた。また、毎回の授業後に振り返りを提出させ理解度を把握しながら進めた。添削コメントをつけて返すことで学生との関係構築も図ったが、総合評価が4.3と目標を達成できたが、Bクラス：4.1と副担任をしていたAクラスの4.5との開きがあり、就習科目日に比べると低い結果となった。問3（理解）は4.2であり、目標の4.0を達成できた。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた→	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1	
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1	
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1	
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	学生にとっては直接的な必要性を感じにくく難しい印象をもたらす講義科目なので、板書・配布資料をさらに工夫し、両項目において両クラスで4.2以上を目指す。（現在はBクラス：4.0）		
科目名	対象	必修・選択	
保育課程論	幼稚教育学科1年生	卒業選択・資格必修	
学生の授業評価を踏まえた自己評価		学生にとっては難しい印象をもたらす科目であるため、例を用いながらわかりやすい説明するように心掛けたが、総合評価が4.0（Aクラス：4.3 Bクラス：3.8）と目標を下回り、他の科目に比べて低くなっている。問3（理解）も3.9と、目標の4.0を下回った。また、公開授業を行った際には、東方向的に授業が行われているという評価をいただいた。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた→	
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1	
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1	
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1	
次年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画	できるだけ強い印象を払拭し意欲的に取り組めるように、パワーポイントや映像資料等を活用し、問9（板書）、問10（資料）の両項目において、現在のBクラスの評価（3.8, 4.0）よりそれぞれ0.2ポイントアップを目指す。公開授業の際に、学生は色付きの板書を好みというご助言をいただいたので、色の使い方も工夫したいと考えている。		

科目名	対象	必修・選択
保育実習指導Ⅲ	幼稚教育学科2年生	卒業認証・資格認証必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		理解度の把握と特に就任初年度なので学生との関係性の構築のため、毎回の授業後にノートを提出させ質問しコメントをつけて返したが、Aクラスは問3(理解)が3.8、問10(資料)3.6と低かった。また、総合評価のAクラス:3.8 Bクラス:4.5を始めとして、クラス間で各項目に大きな開きがあった。
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	外部実習に囲むる科目なので他の科目より指導が厳しくなるが、その中でも学生がきちんと理解できていると思えるように、まずは問10(資料)の項目が両クラスとも3.8以上になるようにする。	
科目名	対象	必修・選択
チャイルドプロジェクト	幼稚教育学科2年生	卒業必修・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		問11(評価方法)の項目が3.5と低い。これは、進行具合や行事の都合により年度途中で活動内容や提出物等の計画を変更することがあったことによるものだと思われる。また、総合評価が3.6と他の科目に比べて低いのも、同様の理由であると思われる。
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	次年度は1年次に関係性ができる学年の指導になるため、今年度より意図の統一が図りやすいく。また、計画的に進めるることを心掛け、総合評価4.0以上を目指す。	

平成 30 年度 社会的活動報告			
講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
教員免許申請審議師 平成 30 年度 姶良市保育協議会 職員研修会講師	平成 30 年 8 月 21 日 平成 30 年 7 月 14 日	久留米信愛短期大学 姶良市保育協議会	久留米信愛短期大学 かごしま空港ホテル
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
高等教育コンソーシアム久留米 高等教育連携部会 委員	平成 30 年 4 月～ 平成 31 年 3 月	高等教育 コンソーシアム久留米	
他大学への非常勤等			
科目名	期間	出向先	
「教職概論」 「幼児教育課程概論」 「言語表現」スクーリング 「健康指導法」スクーリング 「保育・教職実践演習（幼稚園）」 「保育・教職実践演習（幼稚園）」 スクーリング 「保育内容総論」	平成 30 年 4 月～7 月 平成 30 年 4 月～7 月 平成 30 年 8 月 8, 9 日 平成 30 年 8 月 16～18 日 平成 30 年 9 月～12 月 平成 30 年 12 月 1 日, 15 日 平成 30 年 9 月 ～令和元年 1 月	麻生医療福祉&観光カレッジ 麻生医療福祉&観光カレッジ 麻生医療福祉&観光カレッジ 麻生医療福祉&観光カレッジ 麻生医療福祉&観光カレッジ 麻生医療福祉&観光カレッジ 九州大谷短期大学	
その他特記事項			
内容	年 月 日		
令和元年度 社会的活動計画			
1. 講演会等			
第 6 回九州保育三団体研究大会（鹿児島大会） 分科会助言者 令和元年 7 月 12 日 鹿児島サンロイユルホテル			
2. 他大学への非常勤等			
「保育内容総論」 令和元年 4 月～7 月 九州大谷短期大学 非常勤講師 「保育・教職実践演習（幼稚園）」 令和元年 9 月～12 月 麻生医療福祉&観光カレッジ 非常勤講師 「乳児保育」 令和元年 9 月～12 月 麻生医療福祉&観光カレッジ 非常勤講師 「言語表現」スクーリング 令和元年 9 月 近畿大学九州短期大学通信教育部 非常勤講師 「保育・教職実践演習（幼稚園）」スクーリング 令和元年 12 月 近畿大学九州短期大学通信教育部 非常勤講師			

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

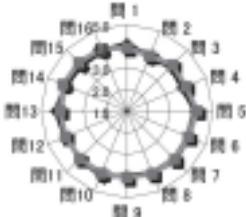
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった。
 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
 問 7 毎回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
 問 9 先生の板書の仕方や視聴覚機器（プロジェクタなど）の利用が効果的であった。
 問 10 教科書、参考書、配布資料（リスト・楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
 問 13 先生は学生の発言や授業態度について、適切に注意していた。
 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

5. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

保健課程論

問 16 4.0



➡教科平均 ⬡学科平均

保健実習指導Ⅱ

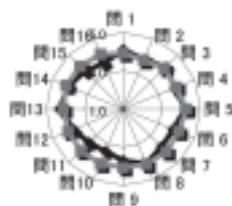
問 16 4.1



➡教科平均 ⬡学科平均

チャイルドプロジェクト

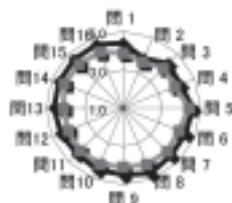
問 16 3.6



➡教科平均 ⚡学科平均

保育内容総論

問 16 4.6



➡教科平均 ⚡学科平均

教職基礎論

問 16 4.3



➡教科平均 ⚡学科平均

保育内容 環境

問 16 4.6



➡教科平均 ⚡学科平均

科 目 名	問 17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。				
	0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
保育課程論(幼1)	39	6	8	2	1
保育実習指導Ⅱ(幼2)	30	15	6	1	2
チャイルドプロジェクト(幼2)	9	2	1	0	0
教職基礎論(幼1)	34	12	5	2	2
保育内容総論(幼1)	35	17	4	1	1
保育内容 環境(幼1)	35	15	6	0	1

		問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）					
科 目 名		予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
保育課程論（幼1）		0	3	16	12	0	30
保育実習指導Ⅱ（幼2）		0	6	37	2	1	13
チャイルドプロジェクト（幼2）		0	1	2	0	0	9
教職基礎論（幼1）		0	7	24	3	0	23
保育内容総論（幼1）		3	8	19	5	1	26
保育内容 環境（幼1）		1	9	23	7	4	21

所属学科	職名	氏名	
幼児教育	講師	内野 香	
担当科目			
科目名	対象	必修・選択	
基礎造形Ⅰ 基礎造形Ⅱ 造形表現 チャイルドプロジェクト	幼児教育学科1年 幼児教育学科1年 幼児教育学科2年 幼児教育学科2年	卒業必修・免許必修・資格選択必修 卒業必修・資格選択必修 卒業選択・免許・資格必修 卒業必修・資格選択必修	
研究分野			
<p>1. 美術教育の分野 作品制作において、感性を作品として表現するにあたっていかに技術面の向上を図るか。</p> <p>2. 保育者養成の分野 保育者として、自身の感性を高める必要性およびその方法。</p> <p>3. 作品制作の分野 セザンヌとフランシス・ベーコンの作品を比較検討し、類似、相違点を検証することによって、自身の制作の方向性を考える。</p>			

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. 美術教育に関する研究

過形の授業において、感じる→表現したいという意欲→そのための技術・技法 という流れを具体的に示すことで、技術・技法を積極的に学ぶ意味を多少なりとも理解することができた。

2. 保育者養成の分野

保育者自身の感性を高める必要性、大切さを美術以外の分野（詩・小説・音楽）に触れることでより認識できることを実感し、教員免許更新講習・久留米市単位互換協定校による「共同講義」において実践した。

③ドケルーズの書籍を読み込み、より一層 セザンヌ・ペーコンの類似・相違点について思索をふかめ、ドローイングを重ねた。

平成 30 年度の研究の成果

特になし

平成 29 年度及び 28 年度の研究の成果

特になし

本教員の主たる研究の成果（5編以内）

特になし

所属学会および参加状況

所属学会

参加状況および役職等

なし

令和元年度 研究計画

1. 幼児教育における造形教育の研究

「信愛つどいの広場」子育て支援講座において、幼児の造形活動への学生の援助および見守り活動から、造形教育において大切な、子どもと共に楽しみながら子どもの表現意欲を導き出す方法を探る。

2. 保育者養成に関する研究

保育者自身の感性を高めるための方法を、昨年度と同様に様々な芸術・文化・自然とのふれあい及び学びの中を探る。

3. 昨年に引き続きセザンヌとペーティンの作品の関連について研究する。

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

【宣言】 学生の学習意欲、技術の向上とともに双方向の授業を行なう。

【計画】 感性を高めることで学習意欲、技術の向上をはかる。

担当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
基礎造形Ⅰ	AA：18名，A：41名，B：7名，C：2名，D：0名	4.2
基礎造形Ⅱ	AA：15名，A：45名，B：4名，C：0名，D：0名	4.2
造形表現	AA：20名，A：31名，B：11名，C：1名，D：0名	4.1
チャイルドプロジェクト	AA：0名，A：28名，B：12名，C：9名，D：0名	3.8

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
基礎造形Ⅰ	幼児教育学科1年	卒業必修・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価	中学以来造形（美術）を学ぶ機会がほとんどなかった学生が多く、多少不安を感じていたようだが、授業が進む中で積極的に課題に取り組む姿勢が見えるようになったように思う。基礎の基礎から始めたことが結果的に良かったようだ。反省点として、授業以外の学習についての指導不足と視聴覚機器の有効活用がなかつたことをあげる。	

授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 ← 4 → 3 · 2 · 1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 ← 4 → 3 · 2 · 1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 · 4 ← 3 → 2 · 1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 · 4 ← 3 · 2 → 1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 ← 4 → 3 · 2 · 1	
厳格な授業評価を実施した	5 · 4 ← 3 → 2 · 1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		【宣言】感性を高め、造形の楽しさを実感することで、学習意欲、技術の向上をはかる。 【計画】自然、様々な藝術・文化にふれる機会を多く持つ。
科目名	対象	必修・選択
基礎造形Ⅱ	幼稚教育学科1年	卒業必修・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	学生が課題に興味を持ち、意欲的に学習に取り組めるための授業の工夫は比較的効果があったようにおもう。制作に多くの時間を必要とする科目のため、ビデオなどの視聴覚機器を利用する機会がほとんどなく、学習に有効と思われるビデオ等を使用する機会をみつける必要がある。又、授業時間以外での学習時間（美術館に行く・画集をみたり 読書をする）の大切さについて、もっと学生の理解を促すべきであった。 総合評価 4.8　問1 4.4　問2 4.5 というアンケート結果をうけて、問1・問2について今まで以上の工夫努力をしなければならないと思う。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5 ← 4 → 3 · 2 · 1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5 ← 4 → 3 · 2 · 1	
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5 · 4 ← 3 → 2 · 1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5 · 4 ← 3 · 2 → 1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5 ← 4 → 3 · 2 · 1	
厳格な授業評価を実施した	5 · 4 ← 3 → 2 · 1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画		【目標】 学生各々の感性を高める。・創作においての技術向上を図る。 【計画】 様々な藝術・文化・自然と触れ合う機会を多く持つことで、表現意欲を高める。 表現意欲を高めることで、技術向上の重要性を認識し努力につなげる。

科目名	対象	必修・選択
造形表現	幼児教育学科 2 年	卒業選択 免許・資格必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価		前任者の授業方法と異なるため学生に戸惑いが見られ、授業への集中力が低かったように思う。技術的に少々難しい課題が多くたこともその一因としてあり、基礎造形を学びながら表現へつなぐべきだった。なお、短時間で学生との信頼関係を築くことの難しさを感じた。 総合評価 3.8 間2・間3・間4 3.7 というアンケート結果であった。この数字はやはり信頼関係をうまく築けなかった表れであり、反省すべき点だと思う。
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3)・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4 (3)・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4 (3)・2・1
ICT 等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3 (2)・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4 (3)・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4 (3)・2・1
次年度の FD 宣言と教育力向上に向けての計画		<p>【目標】 学生各々の感性を高める。造形教育の指導力向上を目指す。</p> <p>【計画】 授業の中で、詩を読み音楽を聴いて感じたことや考えたことを、学生自身の表現として作品にする。創作することで、造形にしかできない表現の力を感じる。 他学生の作品を、表現意図・創意工夫・技術力の観点から鑑賞し、自分の言葉で表現する。そのことによって、保育者としてこどもの造形活動をどう支えるか考える機会にする。</p>
科目名	対象	必修・選択
チャイルドプロジェクト	幼児教育学科 2 年	卒業必修・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた自己評価		前任者の引継ぎで、プロジェクトのメンバーと活動をすることになったが、教員と学生のプロジェクトのあり方に対する考えに違いがあった。方向性に対する不満はあったが、徐々に造形活動に取り組む姿勢は見えてきたようにおもう。しかし、チャイルドプロジェクト本来の目的・目標には、まったくと言っていいほど届かなかった。これは教員本人のチャイルドプロジェクトについての認識不足と、学生との信頼関係不足の一言に尽きると考える。 アンケート結果は、総合評価 3.7 間2・3.5 間4・間6 3.7 であり、学生との信頼関係不足により、学生自ら積極的にプロジェクトに取り組むというところまで指導することができなかった。

授業についての自己評価	→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4 (3)・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4 (3)・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4・3 (2)・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3 (2)・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・(4) 3・2・1
厳格な授業評価を実施した	5・4 (3)・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	【目標】 授業の目的に沿った課題を見つけ、保育者として意味あるものにするための努力をする。
	【計画】 造形活動を通して地域の子どもたちと一緒に樂がる楽しさを実感し、活動の意味を再認識する。そのためにも、子供たちとふれあう機会ができるだけもち、その経験を幼児教育の学びに生かす。

平成30年度 社会的活動報告			
講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
久留米単位互換協定校による「共同講義」 『日常（生活）と藝術』 青少年のためのサイエンスマーレ in くるめ2018	2018年10月9日 2018年12月15日	高等教育コンソーシアム久留米 高等教育コンソーシアム久留米	くるめりあ六ツ円 6F 福岡県青少年科学館
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
なし			
他大学への非常勤等			
科目名	期間	担当先	
なし			
その他特記事項			
内容	年 月 日		
なし			
令和元年度 社会的活動計画			

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

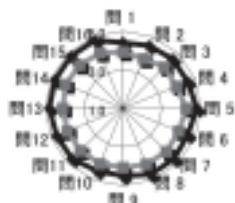
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・軽語・メールをすることが少なかった。
- 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
- 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
- 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
- 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
- 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
- 問 7 短い授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
- 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
- 問 9 先生の板書の仕方や擬聴覚機器（ピアノなど）の利用が効果的であった。
- 問 10 教科書・参考書・配布資料（プリント・楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
- 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
- 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
- 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
- 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
- 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
- 問 16 この授業を総合的に評価すると5点満点で何点になりますか。

5. そう思う
4. どちらかといえばそう思う
3. どちらともいえない
2. どちらかといえばそう思わない
1. そうは思わない

基礎造形Ⅱ

問 16 4.8



→教科平均 ←学科平均

チャイルドプロジェクト

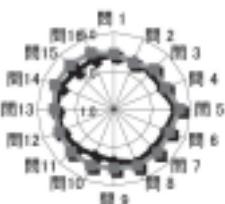
問 16 3.7



→教科平均 ←学科平均

造形表現

問 16 3.8



➡教科平均 ■=学科平均

問 17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。

科 目 名	0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
基礎造形Ⅱ(幼1)	47	4	4	0	0
チャイルドプロジェクト(幼2)	7	1	0	1	0
造形表現(幼2)	33	10	1	1	0

問 18 あなたは授業時間以外にどのような学習(技術・技能の習得も含みます)を行いましたか。(複数回答可)

科 目 名	予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
基礎造形Ⅱ(幼1)	1	3	5	1	2	44
チャイルドプロジェクト(幼2)	0	0	2	0	0	7
造形表現(幼2)	2	2	14	0	1	24

所属学科	職名	氏名
幼児教育	助教	坂田 万代
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
幼児音楽Ⅰ	幼児教育学科1年	卒業必修・資格選択必修
幼児音楽Ⅱ	幼児教育学科2年	卒業必修・資格選択必修
幼児音楽Ⅲ	幼児教育学科2年	卒業必修・資格選択必修
声楽	幼児教育学科1年	卒業必修・資格選択必修
音楽保育	幼児教育学科1年	卒業選択・資格選択必修
チャイルドプロジェクト	幼児教育学科2年	卒業必修・資格選択必修
研究分野		
1. 音楽教育の分野 保育園・幼稚園での指導経験や園での調査をもとに、幼稚園教育要領・保育指針と照らし合わせ音楽教育についての研究を行っている。 2. 保育者養成の分野 保育者養成において必要な力を育成するため、基礎的な発声法や、歌曲集の編纂、コールエーブンゲンを用いた指導法についての研究を行っている。 3. 声楽演奏の分野 声楽の発声法や豊かな音楽表現について研究し、演奏を行う。		

平成30年度 研究報告

平成30年度の研究の概要

1. 音楽教育に関する分野

音楽を専門とする幼稚園の音楽教育について調査し、どのような意義があるか、幼稚園教育要領を指針として考察を行った。

2. 保育者養成の分野

学生が保育の現場での活用をしやすくするため保育者養成のための歌唱教材「子どもとともに歌ううた」の改定を行った。

3. 声楽演奏に関する研究

日本歌曲について音楽表現や歌声を中心に研究し、演奏を行った。

平成30年度の研究の成果

(著書)

- 1.『子どもとともに歌ううた』 共著 平成31年4月 編歌書房

(論文:研究ノート)

- 1.「幼児の音楽表現と幼児教育に関する一考察 一幼稚園にて取り組まれる音楽教育を中心にして」
『久留米信愛短期大学研究紀要第41号』 投稿中

(演奏)

1. 「第4回レフルールデザール～若き芸術家たちの花束～」声楽独唱 共同 平成30年(土) 主催者:九州音楽文化復興会 場所:クララザール

平成29年度及び28年度の研究の成果

1. 「モーニングコンサート」声楽独唱 共同 平成28年2月

場所:アミカス 主催:モーニングコンサート&トーク

2. 「第2回ハーモニーデュアルミジカコンサート」声楽独唱・重唱 共同 平成28年2月

場所:あいれふホール 主催:ハーモニーデュアルミジカ

本教員の主たる研究の成果(5編以内)

(著書)

- 1.「こどもといっしょに」 保育者養成のための歌唱教材集 共著 平成25年4月

(演奏)

1. 研究演奏 声楽独唱 平成26年11月

場所:官崎学園短期大学 第46回九州公私立音楽学会

2. 「第1回ハーモニーデュアルミジカコンサート」声楽独唱・重唱 共同 平成27年2月

場所:あいれふホール 主催:ハーモニーデュアルミジカ

3. 「モーニングコンサート」声楽独唱 共同 平成28年2月

場所:アミカス 主催:モーニングコンサート&トーク

4. 「第2回ハーモニーデュアルミジカコンサート」声楽独唱・重唱 共同 平成28年2月

場所:あいれふホール 主催:ハーモニーデュアルミジカ

所属学会および参加状況

所属学会

参加状況および役職等

九州公私立大学音楽学会

不参加

令和元年度 研究計画

1. 音楽教育の分野

福岡音楽学院附属幼稚園の調査をもとに、幼稚園教育要領と照らし合わせ考察し、取り扱われる音楽教育についての研究を行う。

2. 保育者養成の分野

授業の内容を見直し、現在使用している歌唱教材「子どもともに歌ううた」の編集・改定を行う。また、保育の現場でどのような曲がよく歌われているかについて調査する。

3. 声楽演奏の分野

声楽の発声法や豊かな音楽表現について研究し、演奏を行う。

(育児休暇のため、次年度の計画とする)

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30年度のFD宣言と教育力向上に向けての計画

【目標】学生が落ち着いて授業にのぞめる環境をつくる

集中して授業を受けることができるよう問題13「私語や授業態度について適切に注意していた」の項目について4.0以上の評価を目指す。授業において学生ののぞましくない態度については見過ごさず、その都度適切な指導を心掛ける。

相当科目の成績評価

科目名	成績評価の内訳	平均
幼児音楽I	AA: 8名, A: 11名, B: 7名, C: 9名, D: 1名	3.0
幼児音楽II	AA: 0名, A: 27名, B: 6名, C: 21名, D: 0名	3.0
幼児音楽III	AA: 10名, A: 11名, B: 13名, C: 30名, D: 0名	3.2
声楽	AA: 0名, A: 31名, B: 29名, C: 8名, D: 0名	3.3
音楽保健	AA: 0名, A: 0名, B: 0名, C: 0名, D: 0名	
チャイルドプロジェクト	AA: 0名, A: 0名, B: 0名, C: 0名, D: 0名	

各授業の評価

科目名	対象	必修・選択
幼児音楽I	幼児教育学科1年	卒業必修・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	目標の問題13の項目は+0.8ポイントで達成することができた。しかし、幼児音楽Iでは、学生の弾き歌いを中心とした演習であり課題や学生の状況によっては授業の時間が伸びてしまうこともあった。学生への課題をもう一度見直し、授業時間の配分に注意する必要がある。また、授業評価で問題2は3.8と低かった。ピアノや歌に関して分からぬところを質問したり確認する時間や機会をつくることを心掛けたい。	

授業についての自己評価	→できた →できなかった→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的な成果等を通じて教授・指導した	5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した	5・4・3・2・1

次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	定期で授業を終わる。また、問題2「わからないときには質問したり調べたりした」の項目で4以上を目指す。時間配分に気を配り、学生が分からぬ・できないことに関して休み時間等を使い質問できる時間や機会をつくる。
---------------------------	---

科目名	対象	必修・選択
幼児音楽Ⅱ	幼児教育学科2年	卒業必修・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	学生の授業評価はすべて4以上ではあったが、「具体的な目標がほしい」との学生のコメントより、毎回の課題のテーマや目標をもっと明確に設定する必要があると感じた。また、幼児音楽Ⅰと同様になるがピアノや歌に関して分からぬところを質問したり確認する時間や機会をつくることを心掛けていきたい。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・(4)・3・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・(4)・3・2・1	
自身の研究活動での具体的成果等を通して教授・指導した	5・(4)・3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・(2)・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3・2・1	
細密な授業評価を実施した	5・4・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	テーマや目標を工夫し、理解度を上げることで何? 「毎回のテーマや目標はわかりやすかった」の項目で引き続き4以上の評価を目指す。毎回の目標と課題曲の関連を丁寧に説明することで、理解を深める。	
科目名	対象	必修・選択
幼児音楽Ⅲ	幼児教育学科2年	卒業必修・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	学生の授業評価はすべて4以上ではあったが、問2の「分からぬところを質問したり自分で調べる」の項目に関しては個人差が大きいように感じた。幼児音楽Ⅱに比べ課題の難易度が上がるため、サポートが必要な学生に対して質問や意見できるような配慮をしていく必要がある。また、課題自体も学生たちの能力に適切であるのか見直し、学生が積極的に授業にのぞめるようにしたい。	
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見や動向をふまえて講義ノートを更新した	5・(4)・3・2・1	
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた	5・(4)・3・2・1	
自身の研究活動での具体的成果等を通して教授・指導した	5・(4)・3・2・1	
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた	5・4・3・(2)・1	
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った	5・4・3・2・1	
細密な授業評価を実施した	5・(4)・3・2・1	
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	問2「わからぬときは質問したり調べたりした」の項目で4以上を目指す。学生が分からない。できないことに関して質問できる時間や機会をつくる。また、休み時間等を使い、苦手な学生が質問や意見できるような配慮をする。	

科目名	対象	必修・選択
声楽	幼稚教育学科1年	卒業必修・資格認定必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		学生評価はすべて4以上であったが、の中でも図2「わからないときには質問したり調べたりした」の項目は4、2と全体の中では低めであった。学生が主体的に活動する時間を増やすなど授業内容を見直す必要があると感じた。
授業についての自己評価		→できた できなかった→
最新の知見を動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	図2「わからないときには質問したり調べたりした」の項目で4以上を目指す。学生が学ぶためのきっかけや機会をつくれるように、授業の内容全体を見直し、主体的な活動を増やす。	
科目名	対象	必修・選択
音楽保健	幼稚教育学科2年	選択
学生の授業評価を踏まえた 自己評価		問6「他の科目との関連についてわかりやすく説明する」の項目に関して充分な時間を取ることが出来なかつた。学生が主体的に活動する時間とともにその振り返りをすることで他の科目との関連についても考える時間を持つようにしたい。
授業についての自己評価		→できた できなかつた→
最新の知見を動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4・3・2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5・4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5・4・3・2・1
ICT等を用いた参加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4・3・2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3・2・1
厳格な授業評価を実施した		5・4・3・2・1
次年度のFD宣言と 教育力向上に向けての計画	問6「他の科目との関連についてわかりやすく説明する」の項目で4以上を目指す。そのために学生の活動ごとに振り返りの時間を持ち、他の科目との関連についても説明する。	

科目名	対象	必修・選択
チャイルドプロジェクト	幼稚教育学科 2年	卒業必修・資格選択必修
学生の授業評価を踏まえた 自己評価	受講する学生が少なかったため、それぞれに丁寧な指導をすることができた。評価もすべて4以上であるため学生の満足度も高いのではないかと思うが、問3「実力がついた」の項目に関するでは学生が実感できるようにさらに力を入れていきたい。	
授業についての自己評価		→できた できなかった→
最新の意見や動向をふまえて講義ノートを更新した		5・4 (3) 2・1
教授内容が実際の社会や実践場面でどのように機能しているかを伝えた		5 (3) 4・3・2・1
自身の研究活動での具体的成果等を通じて教授・指導した		5 (4) 3・2・1
ICT等を用いた多加型・発信型・実践型のアクティブラーニングを取り入れた		5・4 (3) 2・1
振り返り用紙や小テスト等を用いて学生の到達度を確認しながら授業を行った		5・4・3 (2) 1
厳格な授業評価を実施した		5 (4) 3・2・1
次年度の PD 宣言と 教育力向上に向けての計画	問3「実力がついた」の項目での評価4.0以上を目指す。学生の活動を発表する場を増やし、実技の能力を高め実力をつける。また、その都度振り返りをすることで次の発表に生かす。	

平成 30 年度 社会的活動報告			
講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
1.信愛つどいの広場子育て支援講座 「親子でうたおう～わらべうた・手遊び うたの世界～」	平成 30 年 10 月 27 日	久留米信愛短期大 学	久留米信愛短期大 学
2.南筑ライフデザインカレッジ 「即興演奏してみよう ～手作り楽器とともに～」	平成 30 年 11 月 5 日	久留米信愛短期大 学	久留米信愛短期大 学
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
他大学への非常勤等			
科目名	期間	担当先	
その他特記事項			
内容	年 月 日		
令和元年度 社会的活動計画			
なし（育児休暇のため）			

平成30年度 学生による授業評価アンケート結果

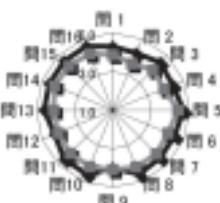
<質問項目>

- 問 1 私はこの授業中、居眠り・私語・メールをすることが少なかった。
 問 2 私はわからない時には質問したり、自分で調べたりした。
 問 3 私は授業の内容を理解することができた（または実力がついた）。
 問 4 私はこの授業に関して、さらに進んだ勉強をしたいと思う。
 問 5 授業はほぼ時間通りに始まり、ほぼ時間通りに終わった。
 問 6 先生はこの科目の目標や他の科目との関連をわかりやすく説明した。
 問 7 毎回の授業に関するテーマや目的はわかりやすかった。
 問 8 先生の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。
 問 9 先生の板書の仕方や視聴覚機器（ビデオなど）の利用が効果的であった。
 問 10 教科書、参考書、配布資料（プリント、楽譜など）は、授業を理解するのに役立った。
 問 11 この授業（科目）の成績評価の方法について、予めきちんと説明があった。
 問 12 先生は授業中、学生が質問したり意見を述べられるように配慮をしていた。
 問 13 先生は学生の私語や授業態度について、適切に注意していた。
 問 14 先生は熱意を持って授業を行っていた。
 問 15 先生は学生に対して愛情と尊敬の念を持って、授業を行っていた。
 問 16 この授業を総合的に評価すると 5点満点で何点になりますか。

5. そう思う
 4. どちらかといえばそう思う
 3. どちらともいえない
 2. どちらかといえばそう思わない
 1. そうは思わない

声楽

問 16 4.6



→教科平均 ←学科平均

幼児音楽 I

問 16 4.4



→教科平均 ←学科平均

幼児音楽Ⅱ

問 16 4.2



➡教科平均 ⚡学科平均

幼児音楽Ⅲ

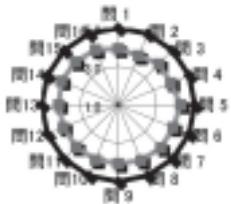
問 16 4.4



➡教科平均 ⚡学科平均

チャイルドプロジェクト

問 16 5.0



➡教科平均 ⚡学科平均

問 17 あなたはこの授業のために一週間当たり何分学習しましたか。

科 目 名	0 分	1~30 分	31~60 分	61~90 分	91 分以上
声楽(幼1)	4	24	13	8	3
幼児音楽Ⅰ(幼1)	4	4	6	13	30
幼児音楽Ⅱ(幼2)	3	14	15	7	12
幼児音楽Ⅲ(幼2)	9	15	11	13	11
チャイルドプロジェクト(幼2)	0	0	0	0	1

		問18 あなたは授業時間以外にどのような学習（技術・技能の習得も含みます）を行いましたか。（複数回答可）					
科 目 名		予習	復習	課題	試験	自発的	行ってない
声楽（幼1）		2	11	16	32	2	7
幼児音楽Ⅰ（幼1）		28	20	36	22	14	5
幼児音楽Ⅱ（幼2）		32	23	31	23	11	4
幼児音楽Ⅲ（幼2）		21	11	38	21	9	3
チャイルドプロジェクト（幼2）		1	0	1	0	0	0

所属学科	職名	氏名	
フードデザイン	助手	岡 舞美	
担当科目			
科目名	対象	必修・選択	
研究分野			
食品衛生学分野 <ul style="list-style-type: none"> ・変異原性物質（発がん作用を有する）による危害の軽減を目指して、「抗変異原性を有する食品の検索」、「食物繊維や乳酸菌による変異原性物質の吸着」に関する研究をしている。 ・「身体の黄色プロテオフィル含量とソラニン・チャコニン量との相関性」を調べている。 ・「ジャガイモのクロロフィル含量とソラニン・チャコニン量との相関性」を調べている。 			
食品学分野 <ul style="list-style-type: none"> ・「食と健康」の観点から、各種食品中の機能性成分（メラトニン、EPA、DHA、ポリアミン等）の分析研究をしている。 			
食品加工学分野 <ul style="list-style-type: none"> ・「豆腐の食感と凝固剤」について検討している。 			
栄養士養成分野 <ul style="list-style-type: none"> ・栄養士養成校として、栄養士の資質向上に向けての取り組みや学生の意識の高揚支援等の栄養士養成に関する研究をしている。 ・フードプロジェクト活動を通して、フードデザイン学科の取り組みとしての研究をしている。 			
キャリア形成支援分野 <ul style="list-style-type: none"> ・キャリアガイダンス及び就職支援、学生支援等に関する研究をしている。 			

平成30年度 教育活動報告（ティーチング・ポートフォリオ）

平成30年度の研究の概要

食品衛生学分野

- 「ジャガイモにおけるボテトグリコアルカロイドとクロロフィルの相関性」というテーマで研究紀要に投稿するは、
- 研究紀要に、「ジャガイモにおけるボテトグリコアルカロイドとクロロフィルの相関性」のテーマで掲載された。
- ・K値の測定方法について検討するは、検討しなかった。

食品学分野

- 各種食品のEPA・DHA量について調べるは、調べなかった。

食品加工学分野

- 豆腐の食感に及ぼす凝固剤について検討するは、検討した結果良い評価は得られたが、再現性がないため、さらに検討することにした。

栄養士養成分野

- 「栄養士養成研究（6）6年間の学習支援取り組みの総括」というテーマで研究紀要に投稿するは、
- 研究紀要に、「栄養士養成研究（6）6年間の学習支援取り組みの総括」のテーマで掲載された。
- ・「学生の成長」可視化のこころみ（1）-フードプロジェクト活動を通して-というテーマで研究紀要に投稿するは、
- 研究紀要に、「学生の成長」可視化のこころみ（1）-フードプロジェクト活動を通して-のテーマで掲載された。
- ・「入学から卒業までのガイドブック九訂版」の見直し及び「入学から卒業までのガイドブック九訂版」の作成を学科全員で行った。
- ・専門教育科目「食品学実験（40頁）」「生化学実験（58頁）」「食品衛生学実験（26頁）」「食品加工学実習（25頁）」の教材を作成し、授業で使用した。

キャリア形成支援分野

- 「キャリア形成支援BOOK 2017」の見直し及び「キャリア形成支援BOOK 2018」の作成を担当者全員で行った。

平成30年度の研究の成果

（論文）

1. 「ジャガイモにおけるボテトグリコアルカロイドとクロロフィルの相関性」（共著）平成30年9月『久留米信愛短期大学 研究紀要 第41号』(1~7)
 2. 栄養士養成研究（6）6年間の学習支援取り組みの総括（共著）平成30年9月『久留米信愛短期大学 研究紀要 第41号』(19~26)
- （その他）
1. 「学生の成長」可視化のこころみ（1）-フードプロジェクト活動を通して-（共著）平成30年9月『久留米信愛短期大学 研究紀要 第41号』(36~42)
 2. 「入学から卒業までのガイドブック九訂版」（共著）平成30年4月 久留米信愛短期大学 フードデザイン学科発行
 3. 「キャリア形成支援BOOK 2018」（共著）平成30年4月 久留米信愛短期大学 キャリア形成支援推進室発行
 4. 専門教育科目「食品学実験（40頁）」「生化学実験（58頁）」「食品衛生学実験（26頁）」「食品加工学実習（25頁）」のファイル付教材プリント作成

平成 29 年度及び 28 年度の研究の成果

(論文)

- 「栄養士養成研究（4）学習支援に対する効果の 2 年間の分析」（共著）平成 28 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学 研究紀要 第 39 号』(21~25)
 - 「乳・乳製品に含まれる脂肪の酵素作用による抽出（3）乳化作用強化による影響」（共著）平成 28 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学 研究紀要 第 39 号』(27~32)
 - 「HPLC によるジャガイモ芽のクロロフィル及びグリコアルカロイドの定量」（共著）平成 29 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学 研究紀要 第 40 号』(1~7)
 - 「栄養士養成研究（5）生活実態が学習支援効果に及ぼす影響－2』（共著）平成 29 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学 研究紀要 第 40 号』(25~34)
 - 「乳・乳製品に含まれる脂肪の酵素作用による抽出（4）」（共著）平成 29 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学 研究紀要 第 40 号』(35~40)
- (その他)
- 「女子短期大学生における黄色ブドウ球菌の分析」（共著）平成 28 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学 研究紀要 第 39 号』(39~43)
 - 「入学から卒業までのガイドブック七訂版」（共著）平成 28 年 4 月 久留米信愛女学院短期大学 フードデザイン学科発行
 - 「キャリア形成支援 BOOK 2017」（共著）平成 29 年 3 月 久留米信愛女学院短期大学 キャリア形成支援推進室発行
 - 「入学から卒業までのガイドブック八訂版」（共著）平成 29 年 4 月 久留米信愛女学院短期大学 フードデザイン学科発行

本教員の主たる研究の成果（5 篇以内）

- 「Adsorption of Heterocyclic Aromatic Amines by Low Molecular Weight Cellulose」（共著）『Journal of Food Hygienic Society of Japan Vol. 38, No. 6』(1997)
- 「ラット排泄物中の Trp-P-1 及びその代謝物の挙動」（共著）『食品衛生学雑誌 42 卷 4 号』(2001)
- 「種先タケノコの有効利用」（共著）『日本調理科学会誌 35 卷 3 号』(2002)
- 「ラットにおける Trp-P-1 の代謝排泄に及ぼすゴボウとキャベツ粉末の影響」（共著）『日本食品科学工学会誌 56 卷 4 号』(2009)
- 「高速液体クロマトグラフを用いた米飯中メラトニンの定量法」（共著）『日本食品科学工学会誌 59 卷 3 号』(2012)

所属学会および参加状況

所属学会	参加状況および役職等
日本調理科学会	大会等不参加
日本家政学会	大会等不参加
日本栄養改善学会	大会等不参加
日本食品衛生学会	大会等不参加

令和元年度 研究計画

食品衛生学分野

- ・酸化型ビタミンCの定量方法について検討する。
- ・パプリカ色素の定量方法について検討する。

食品学分野

- ・各種食品のEPA・DHA量について調べる。

食品加工学分野

- ・豆腐の食感に及ぼす凝固剤について検討する。
- ・背部づくりの検討をする。

栄養士養成分野

- ・「ードプロジェクト活動を通して、「学生の成長」可視化のこころみ(2) -ループリックの評価観点の再考について-というテーマで研究記要を投稿する。
- ・「入学から卒業までのガイドブック九訂版」の見直し及び「入学から卒業までのガイドブック十訂版」の作成を学科全員で行う。
- ・専門教育科目「食品学実験」、「生化学実験」、「食品衛生学実験」、「食品加工学実習」のテキストの内容を再検討・修正し、充実させる。

キャリア形成支援分野

- ・「キャリア形成支援BOOK 2018」の見直し及び「キャリア形成支援BOOK 2019」の作成を担当者全員で行う。

平成30年度 社会的活動報告

講演等

題名	講演年月日	主催者	場所
なし			

他団体等への協力

協力内容	協力期間	協力先
久留米信愛短期大学同窓会会計監査	平成30年6月25日	久留米信愛短期大学 同窓会
久留米信愛短期大学同窓会役員報告会	平成30年6月30日	久留米信愛短期大学 同窓会
久留米信愛短期大学同窓会総会	平成31年2月3日	久留米信愛短期大学 同窓会

他大学への非常勤等

科目名	期間	出向先
なし		

その他特記事項

内容	年 月 日
なし	

令和元年度 社会的活動計画

- ・地域参画推進団体への協力
- ・ボランティア活動への協力
- ・久留米信愛短期大学同窓会への協力

所属学科	職名	氏名
フードデザイン	助手	眞谷智美
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
研究分野		
1. 幼児・子どもの健康と食生活に関する調査研究 久留米市食育プランへの取り組みの一環としてアンケート調査を実施 子どもの食育に関する事業の推進を図り保護者に対する健康教育に活用する基礎資料作成		
2. 地域特産物を利用した食育教材開発 久留米市内の保育園・幼稚園児の保護者、保育施設、地域社会と連携し、食と農に関する教育と健全な食生活への理解を促進する目的で地域農作物を使った食育教材作成		
3. 行事食に関する調査研究 栄養士・保育士養成課程の学生へ平中行事や通過儀礼の認知度・経験、その際の行事食について、喫食経験、喫食状況、調理状況、食べ方などの喫食経験等をアンケート調査 食文化の継承に繋がる食教育法についての資料として調査研究を実施		
4. 地域特産物を活用した食教育の効果検証 久留米市食育推進プランにおける食育事業への参画および農業団体や食品関連事業者等との協力活動を通して食育を実践 その成果を踏まえ栄養士養成カリキュラムにおける「地産地消を活用した食教育」への取り組みを行った		
5. 栄養士としての資質向上に向けての取り組み 栄養士養成の立場で学生が栄養士養成課程に必要な知識および技術に関する基本的事項を学得するために学科全教員でガイドブックを作成 本学科独自の学習支援および進路支援を実施		
6. 幼稚園・保育園・認定こども園における食育に関するアンケート調査 久留米市の保育園・幼稚園・認定こども園、各園における食育推進の実際について把握を行い、「久留米市食育推進プラン」への実施状況および改善に向けての基礎資料とするためアンケート調査を実施		
7. 乳幼児とその保護者への食育に関する研究 「子育て支援講座」において乳幼児の保護者およびその関係者へ望ましい食習慣を確立することを目的とし講座・調理実習を実施、その食育の取り組みについて報告		
8. 学生の調理実習の習熟度についてアンケートを実施 学生が栄養士になるための基本的な知識と技術について習熟度を確認し、今後の指導内容についての方向性の検討を行った		

平成30年度 研究報告

平成30年度の研究の概要

1.栄養士としての資質向上に向けての取り組み

栄養士養成の立場で学生が栄養士養成課程に必要な知識および技術に関する基本的事項を学ぶために学科全教員でガイドブックを作成。本学科独自の学習支援および進路支援を実施

2.学生の調理関連科目の習熟度についてアンケートを実施

学生が栄養士になるための基本的な知識と技術について習熟度を確認し、今後の指導内容についての方向性の検討を行った

平成30年度の研究の成果

(論文)

- 1.「栄養士養成研究(6) 6年間の学習支援取り組みの総括」 共著 平成30年9月 『久留米信愛短期大学研究紀要 第41号』(19-26)

(研究ノート)

- 1.「調理学関連科目の習熟度について 第2報」 共著 『久留米信愛短期大学研究紀要 第41号』(27-33)

- 2.『「学生の成長」可視化のこころみ(1) フードプロジェクト活動を通して』 共著 『久留米信愛短期大学研究紀要 第41号』(35-42)

(その他)

- 1.『入学から卒業までのガイドブック第9号』 共著 平成30年4月 久留米信愛短期大学フードデザイン学科

平成29年度及び28年度の研究の成果

(論文)

- 1.「栄養士養成研究(4) 学習支援に対する効果の2年間の分析」 共著 平成28年7月 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第39号』(21-25)

- 2.「栄養士養成研究(5) 生活実態が学習支援効果に及ぼす影響-2」 共著 平成29年7月 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第40号』(25-34)

(発表)

- 1.「子育て支援講座における食育の取り組み」 共同 平成29年9月17日 第43回福岡県栄養改善学会 ナースプラザ福岡

(研究ノート)

- 1.「久留米市の保育所・幼稚園・認定こども園における食育推進の実際 第2報」 共著 平成28年7月 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第39号』(51-56)

- 2.「調理学関連科目の習熟度について 第1報」 共著 平成29年7月 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第40号』(95-101)

(その他)

- 1.『入学から卒業までのガイドブック第7号』 共著 平成28年4月 久留米信愛女学院短期大学フードデザイン学科

- 2.『入学から卒業までのガイドブック第8号』 共著 平成29年4月 久留米信愛女学院短期大学フードデザイン学科

本教員の主たる研究の成果（5編以内）

なし

所属学会および参加状況

所属学会	参加状況および役職等
日本栄養改善学会	第65回日本栄養改善学会学術総会参加
日本調理科学会	大会等不参加
日本家政学会	大会等不参加

令和元年度 研究計画

1. 栄養士養成に関する研究
「入学から卒業までのガイドブック第10号」 共著 久留米信愛短期大学フードデザイン学科改定予定
2. 「フードプロジェクト活動の報告～調理学の観点から～」 共著 『久留米愛短期大学研究紀要 第42号』投稿予定
3. 『「学生の成長」可視化のこころみ(2) 一ループリックの評価観点の再考について』 共著 『久留米愛短期大学研究紀要 第42号』投稿予定

平成30年度　社会的活動報告			
講演等			
題名	講演年月日	主催者	場所
信愛つどいの広場 子育て支援講座「親子 クッキング」	平成31年3月2日	久留米信愛短期大学	久留米信愛短期大学
他団体等への協力			
協力内容	協力期間	協力先	
J Aくるめ広報誌「With You」レシピ掲載 グリーンコープへレシピ掲載	平成30年1月～平成31年3月 平成30年1月～平成31年3月	J Aくるめ グリーンコープ	
他大学への非常勤等			
科目名	期間	出向先	
なし			
その他特記事項			
内容	年 月 日		
久留米大学「食と健康」調理実習 助手 筑後地方保育協会保育士会給食研修会 助手	平成30年6月2日・9日 10月20日・27日 平成30年8月22日・24日		
令和元年度　社会的活動計画			
1. 「信愛つどいの広場」子育て支援講座 講師 2. J Aくるめ広報紙「With You」へ久留米農産物を使った料理レシピ掲載 3. ふるさとくるめ農業生つくりへの協力 4. 久留米大学「食と健康」調理実習 助手 5. グリーンコープへの料理レシピ掲載			

所属学科	職名	氏名
フードデザイン	助手	高松幸子
担当科目		
科目名	対象	必修・選択
研究分野		
1. 幼児・子どもの健康と食生活に関する調査研究 久留米市子どもの健康と食生活に関する実態調査を受けて、基礎資料の作成や栄養摂取とその他の要因の関連について研究している。		
2. 行事食に関する調査研究 栄養士・保育士養成課程の学生へ福岡県の郷土料理の喫食経験等をアンケート調査し、食文化の継承に繋がる食教育法について調査研究している。		
3. 栄養士養成に関する研究 学科全教員でガイドブックを作成し、栄養士としての資質向上に向けての取り組み等を研究している。		
4. 幼稚園・保育園・認定こども園における食育に関する研究 久留米市の保育園、幼稚園、認定こども園、各園における食育推進の実際についてアンケート調査による把握を行い、「久留米市食育推進プラン」への次期策定および改善に向けての基礎資料とするための研究をしている。		
5. 乳幼児とその保護者への食育に関する研究 「子育て支援講座」において乳幼児の保護者およびその関係者へ正しい食習慣を確立することを目的とし講座・調理実習内容等を研究している。		
6. 調理学関連科目の習熟度に関する研究 学生が身に付けた基本的な知識や技術、シラバスの目標達成度等を把握し、今後の課題や指導の方向性を検討するために調査研究している。		

平成 30 年度 研究報告

平成 30 年度の研究の概要

1. 栄養士養成に関する研究

栄養士の資質向上に向けての取り組みとして、学科全教員で『入学から卒業までのガイドブック』の内容検討し作成した。

2. 乳幼児とその保護者への食育に関する研究

講義・調理実習内容等についての検討や研究を継続した。

3. 調理学関連科目の習熟度に関する研究

学生へのアンケートを実施し、集計等を行った。

平成 30 年度の研究の成果

（論文）

- 「栄養士養成研究 (6) 6 年間の学習支援取り組みの總括」 共著 平成 30 年 9 月 『久留米信愛短期大学研究紀要 第 41 号』 (19-26)

（研究ノート）

- 「調理学関連科目の習熟度について 第 2 報」 共著 『久留米信愛短期大学研究紀要 第 41 号』 (27-33)

- 「『学生の成長』可視化のこころみ (1) —フードプロジェクト活動を通して—」 共著 『久留米信愛短期大学研究紀要 第 41 号』 (35-42)

（その他）

- 『入学から卒業までのガイドブック第 9 号』 共著 平成 30 年 4 月 久留米信愛短期大学フードデザイン学科

平成 29 年度及平成 28 年度の研究の成果

（論文）

- 「栄養士養成研究 (4) 学習支援に対する効果の 2 年間の分析」 共著 平成 28 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第 39 号』 (21-25)

- 「栄養士養成研究 (5) 生活実態が学習支援効果に及ぼす影響-2」 共著 平成 29 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第 40 号』 (25-34)

（発表）

- 「子育て支援講座における食育の取り組み」 共同 平成 29 年 9 月 17 日 第 43 回福岡県栄養改善学会 ナースプラザ福岡

（研究ノート）

- 「久留米市の保育所・幼稚園・認定こども園における食育推進の実際 第 2 報」 共著 平成 28 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第 39 号』 (51-56)

- 「調理学関連科目の習熟度について 第 1 報」 共著 平成 29 年 7 月 『久留米信愛女学院短期大学研究紀要 第 40 号』 (95-101)

（その他）

- 『入学から卒業までのガイドブック第 7 号』 共著 平成 28 年 4 月 久留米信愛女学院短期大学 フードデザイン学科

- 『入学から卒業までのガイドブック第 8 号』 共著 平成 29 年 4 月 久留米信愛女学院短期大学 フードデザイン学科

本教員の主たる研究の成果（5 篇以内）

なし

所属学会および参加状況	
所属学会	参加状況および役職等
日本栄養改善学会	第 65 回日本栄養改善学会学術総会参加
日本調理科学会	大会等不参加
令和元年度 研究計画	
<p>1. 栄養士養成に関する研究 「入学から卒業までのガイドブック第 10 号」 共著 久留米短期大学 フードデザイン学科 改定発行予定</p> <p>2. 「フードプロジェクト活動の報告～調理学の観点から～」 共著 『久留米愛短期大学研究紀要 第 42 号』 投稿予定</p> <p>3. 「『学生の成長』可視化のこころみ (2) 一ループリックの評価観点の再考についてー』 共著 『久留米愛短期大学研究紀要 第 42 号』 投稿予定</p>	

平成 30 年度 社会的活動報告					
講演等					
題名	講演年月日	主催者	場所		
信愛つどいの広場 子育て支援講座「親子タッキング」	平成 31 年 3 月 2 日	久留米信愛短期大学	久留米信愛短期大学		
他団体等への協力					
協力内容	協力期間	協力先			
J Aくるめ広報誌「With You」レシピ掲載 グリーンコープへレシピ掲載	平成 30 年 1 月～平成 31 年 3 月 平成 30 年 1 月～平成 31 年 3 月	J Aくるめ グリーンコープ			
他大学への非常勤等					
科目名	期間	担当者			
なし					
その他特記事項					
内容	年 月 日				
久留米大学「食と健康」調理実習 助手 筑後地方保育協会保育士会給食研修会 助手	平成 30 年 6 月 2 日・9 日 10 月 20 日・27 日 平成 30 年 8 月 22 日・24 日				
令和元年度 社会的活動計画					
1. 「信愛つどいの広場」子育て支援講座 講師 2. J Aくるめ広報紙「With You」へ久留米農産物を使った料理レシピ掲載 3. グリーンコープへの料理レシピ掲載 4. 久留米大学「食と健康」調理実習 助手 5. ふるさとくるめ農業まつりへの協力					

平成30年9月5日(水)13:00~

バイオレットホール

幼児教育学科 増田吹子

「実習指導・保育内容に関する研究の報告」

保育者養成に携わるようになって15年目になる。これまで保育内容や実習指導に関する科目を主に担当してきたので、保育者養成や担当科目の分野の研究に取り組んできた。今回の教員研究会では、これらの研究について報告した。

まず、保育者養成に関する研究として、前任校で行っていた「こども講座」の実習ノートの分析について報告した。「こども講座」では、学生が企画・準備した遊びを参加した地域の子どもたちと一緒にを行い、終了後に反省会をして、実習ノートを記入して提出するという流れで3回行った。事後に提出する実習ノートを分析したところ、子どもと関わる場面において、学生の初期の関心は子どもとうまく関われるかということにあり、活動内容や進め方に関心をもつのは次の段階になることがわかった。したがって、子どもとの関わり方についての指導を重点的に行うことで、活動内容の改善に早くつなげられると考えた。

次に、保育内容に関するものとして、領域評価シートを用いた保育内容の評価についての鹿児島のO幼稚園との共同研究の報告をした。同園では、幼保連携型認定こども園へ移行した際に、事務作業が膨大になったことや保育部門ができたことから、従来行っていた懇談会をする時間が取れなくなった。しかし、しっかりと保育を反省・評価し改善したいという考えがあり、その方法を一緒に考えた。そこで、同園での行事「お店屋さんごっこ」を取り上げ、5領域のうち行事に関連の深い「人間関係」「言葉」「表現」の領域における「ねらい」「内容」「内容の取扱い」の中から、「子どもが経験すること・保育者が配慮すること」を確定し項目を作成し、その日の活動後に5段階評価で指導を振り返る「領域評価シート」を提案した。実際に、行事の指導の内の数回と当日に見学させていただき、領域評価シートを用いて保育を反省・評価してくださいった先生との話し合いの場を設けた。そこで、シートの記入は短時間でできるため取り組みやすく、毎回活動後に読むことで領域のねらいや内容が自然に頭に入る、複数の教員が同じシートを使うことで共通認識をもって指導にあたることができる等の結果が得られ、保育の改善の一助となる可能性があるという示唆を得ることができた。

今後は、他の園や本学における授業でも領域評価シートを活用し、手軽かつ丁寧に要領や指針に沿った保育を可能にする方法についてさらに検討したいと考えている。

平成 31 年 2 月 6 日（水）13：30～
バイオレットホール
フードデザイン学科 滝部真紀子

「感情音声研究についてこれまでの取組の紹介」

この研究の目的は、「人に優しい」コンピュータの実現としており、具体的には、人間の言葉や感情を理解し、それに応じた対応ができるコンピュータ、つまりコンピュータが人の顔つきや言葉や声などで感情を理解することを意味している。筆者は、この感情音声に着目して研究に取り組んでいる。

音声生成の機構は、肺からの呼気が声帯を震わせ音になり、その音が口腔の広さや形、舌や唇との摩擦によって音声となる仕組みである。具体的には、肺からの呼気の量は声の大きさや高さを表す「音源情報」と口腔の広さや形および鼻腔などの声道で音韻性を表す「声道情報」とを組み合わせて「音声波形情報」になることをモデル化したものである。この音声生成機構から、感情を与える要因として、1. フレーズ指令の大きさ、2. アクセント指令の大きさ、3. 最高基本周波数、4. 最低基本周波数、5. 発話速度の 5 つの韻律的特徴に着目した。

筆者は、感情音声の特徴を解析するために、実際に発声した感情音声の特徴を解析し、感情ごとの要因（韻律的特徴）を明らかにすることから始めた。次に、実際の感情音声を人に聞かせてどのような感情に聞こえたのか聴取実験を繰り返した。聴取実験に使用した音声データは、アナウンサーの男女、声優の男女である。

その結果、聞き手の性差による聴覚的印象に違いがあることがわかった。話者と聞き手が同性だから感情が正しく伝わるということではなく、男性話者は、「最高基本周波数」を高くしないと怒りや喜び、悲しみの感情が女性の聞き手に伝わらにくいという結果になった。また、女性話者は、「最低基本周波数」を高くしないと怒りや喜びの感情が、同性の女性の聞き手には伝わっても、男性の聞き手には伝わりにくいという結果になった。

さらに、話者の職業による韻律的特徴値も有意差が見られ、男性話者のアナウンサーと声優の「発話速度」は感情の度合いが激しくなるほど遅くなる傾向が見られた。

次に着目したのは、言葉のアクセント型と感情の伝わり方である。つまり、話者の感情が伝わりやすいアクセント型があるのかということである。解析では、感情が正しく伝わった割合（一致率）を高いグループ、中くらいのグループ、低いグループと分け、アクセント型との関係をみた。その結果、感情の種類や激しさによってはアクセント型が関係している傾向があった。

平成 31 年 2 月 20 日（水）10:00～11:00

場所：バイオレットホール

幼児教育学科 池田可奈子

「発達障碍児を対象とした臨床実践と研究報告」

【要旨】

平成 22 年に本学に着任して以来、教員研究会では 2 回目の発表であった。前回の発表から現在までの 9 年間、どのように臨床実践と研究を継続・発展させていったのかについて報告した。

はじめに、研究対象としている発達障碍の捉え方の変遷について説明をした。この 9 年の間に、医学・福祉・教育の世界において発達障碍児・者の理解が進むと同時に、診断基準や診断名、支援体制が変化してきており、その動向について話をした。

次に、現在、発表者が臨床実践活動の場としている、久留米幼児教育研究所について、事業内容や利用児・者の特徴、支援体制、相談の流れ等について概説した。そして、発表者が主に携わっている行動訓練ボプラ学級の目的やアプローチ等について説明し、実際に継続支援しているケースの概要をいくつか紹介した。

研究報告としては、乳幼児期のコミュニケーション行動の中で発表者が重視しているキーワード、「共同注意（Joint Attention）」と「社会的注意（Social Attention）」について説明し、そのキーワードに着目する意義について話した。そして、「共同注意」と「社会的注意」の行動間の発達的関連性について定量的検討した研究内容について報告した。さらに、「社会的注意」行動の発達を促すために、身体遊びと玩具遊びの介入の有効性について検討した実験結果について報告し、とりわけ発達障碍児にとっての身体遊び（二項関係）の持つ意義について説明をした。また、事例研究についても二事例を取り上げ報告した。一つ目の事例は、自己刺激的な活動を好み、重度の知的能力障害と自閉症がある子に対して、感觉運動知能を促すために有効な支援方法について報告した。二つ目の事例は、ごっこ遊び（象徴遊び）を好む一方で、他者とイメージを共有せず、自身の内的世界のみで活動を繰り広げる自閉症児に対して、他者との役割交代遊びの形成に向けた支援方法について報告をした。

最後に、今後の研究活動の展望として、これまでのテーマに加えて、保育者養成校における子育て支援活動の意義や、それに携わる学生の教育的效果に関する研究を充実させていきたいことを述べた。

これまで非常勤講師として音楽教育に携わり、研究の数が多くはないが自らが考え理想とする音楽教育を実現するためにどのような活動を行ってきたかをまとめ、その発表を行った。

まずははじめに、これまでの研究についていくつかの紹介を行った。保育者養成校で歌唱教材のコールユーブンゲンを用いて学生たちのうたを録音し、どのようなパターンが苦手なのか、それはどのような理由からかデータをとり考察することで、その後の指導に生かした。次に、手遊び歌は今どのようなものがよく使われているのか、時代のニーズにあってはいるのか、保育の現場ではどのような状況で使うのか（保育活動前に導入として、など）に関して福岡・熊本・長崎県内の園にアンケートをとり、カテゴリーごとに分けた。またわらべうたの変遷や、意義、うたについても調べた。そして、それらをもとに歌唱教材の編集を行った。

次に現在進めている研究について説明を行った。保育の現場で自身が働くことで課題に感じたことをテーマとして音楽学院附属幼稚園の協力のもとアンケート調査をし、園で行われている音楽教育について考察した。音楽幼稚園の年齢ごとのカリキュラムや、子どもたちの様子を調査することで音楽教育の果たす意義について確認し、また自身の体験から保育の教諭と音楽の教諭の相互理解がなにより大切であるということを子どもたちとのエピソードとともに述べた。さらに、音楽教育について園全体が理解を深めることは様々な取り組みが生まれるきっかけにはなるのではないかと考えている。また、今後、園での音楽表現での活動について考察し、幼稚園教育要領と照らし合わせ、まとめていくことで保育の視点からの子どもの成長に焦点があてられるようになればと考えている。引き続き、音楽幼稚園で取り組まれている個人レッスンや音楽主体の年間行事に関する考察し、整理することで更に研究を進めていきたい。

学生の授業評価に基づく優秀科目

次の科目は「学生による授業評価アンケート」において、「総合評価」の評価が高かったので、「優秀科目」として称えます。(アンケート回答者数が5名以上の科目を表彰の対象とします)
同順位の科目は回答者数の人数が多い順に掲載しています。

平成30年度前期

順位	科目	対象	指導形態	必修・選択	担当者	解答者数	総合評価点
1	モンテッソーリ教育法Ⅰ	幼児教育学科 2年	演習	卒業選択 資格選択必修	閑	23人	4.9
2	食品加工学実習	フードデザイン 学科2年	実習	卒業選択 免許必修	江越	18人	4.7
3	保育内容総論	幼児教育学科 1年	演習	卒業選択 免許・資格必修	増田	65人	4.6
3	保育内容 環境	幼児教育学科 1年	演習	卒業選択 免許・資格必修	増田	64人	4.6
3	声楽	幼児教育学科 1年	演習	卒業必修 資格選択必修	坂田	58人	4.6
3	基礎調理学実習Ⅰ	フードデザイン 学科1年	実習	卒業必修 免許必修	山村	18人	4.6
3	給食管理実習Ⅱ	フードデザイン 学科2年	実習	卒業選択 免許必修	石井	16人	4.6
8	保育の心理学	幼児教育学科 2年	演習	卒業必修 資格必修	池田	44人	4.5
9	生活とスポーツⅠ	幼児教育学科 1年	講義	卒業必修 免許・資格必修	新井	68人	4.4
9	保育内容 人間関係	幼児教育学科 1年	演習	卒業選択 免許・資格必修	池田	65人	4.4
9	教育原理	幼児教育学科 1年	講義	卒業選択 免許・資格必修	閑	64人	4.4
9	心理学	フードデザイン 学科1年	講義	卒業選択必修 資格必修	池田	17人	4.4
9	調理学	フードデザイン 学科1年	講義	卒業必修 免許必修	山村	17人	4.4
9	臨床栄養学概論	フードデザイン 学科2年	講義	卒業選択 免許必修	石井	17人	4.4
9	臨床栄養学実習	フードデザイン 学科2年	実習	卒業選択 免許必修	石井	16人	4.4
9	ピアノⅠ	幼児教育学科 1年	演習	卒業必修 免許選択必修	原	5人	4.4

平成30年度後期

順位	科目	対象	指導形態	必修・選択	担当者	解答者数	総合評価点
1	ピアノⅡ	幼児教育学科 1年	演習	卒業必修	原	6人	5.0
2	基礎造形Ⅱ	幼児教育学科 1年	演習	卒業必修 資格選択必修	内野	60人	4.8
2	モンテッソーリ 教育法Ⅱ	幼児教育学科 2年	演習	卒業選択 資格選択必修	閑	13人	4.8
4	生活とスポーツⅡ	幼児教育学科 1年	実技	卒業必修 免許・資格必修	新井	55人	4.5
4	卒業セミナー	フードデザイン 学科2年	演習	卒業必修	山下・江越・ 山村	17人	4.5
4	基礎調理学実習Ⅱ	フードデザイン 学科1年	実習	卒業必修 免許必修	山村	15人	4.5
7	幼児音楽Ⅰ	幼児教育学科 1年	演習	卒業必修 免許・資格選択必修	坂田	66人	4.4
7	幼児音楽Ⅲ	幼児教育学科 2年	演習	卒業必修 資格選択必修	坂田	64人	4.4
7	身体表現	幼児教育学科 2年	演習	卒業選択 免許・資格(選択)必修	新井	61人	4.4
7	応用調理学実習Ⅱ	フードデザイン 学科2年	実習	卒業選択 免許必修	山村	14人	4.4
7	製菓・製パン演習	フードデザイン 学科1年	演習	卒業選択	山村	9人	4.4

平成 30 年度 公開授業 実施一覧

敬称略

実施日	校時	担当者	科目	学科学年	講義室等	参観者
7月10日(火)	4・5	江越	食品学実験	フード 1年	理化学実験室	石井・安保・ 眞部・坂田
7月12日(木)	4	山村	キャリアガイダンスⅠ	フード 1年	バイオレット ホール	山下・眞部・ 石井
7月23日(月)	1	石井	給食計画論	フード 1年	1201 教室	江越・眞部・ 内野
7月26日(木)	1	坂田	声楽	幼教 1年	音楽室	増田・内野・ 山下・眞部
7月26日(木)	2	新井	生活とスポーツⅡ	幼教 1年	小ホール	重永・石井・ 眞部
7月26日(木)	3	山下	応用栄養学Ⅰ	フード 1年	1301 教室	山村・眞部・ 増田
11月16日(金)	2	内野	基礎造形Ⅱ	幼教 1年	美術室	関・坂田・ 山下
11月26日(月)	1	眞部	栄養士情報処理演習	フード 1年	マルチメディア センター組	山村・江越・ 阿久根
12月7日(金)	1	関	モンテッソーリ教育法Ⅱ	幼教 2年	M 演習室	山下・山村・ 内野
12月10日(月)	1	増田	保育課程論	幼教 1年	1201 教室	関・池田・坂田 ・内野・山村
12月12日(水)	2	椎山	保育・教職実践演習	幼教 2年	1502 教室	阿久根・新井・ 坂田・眞部
12月18日(火)	1	阿久根	英語Ⅱ	幼教 1年	1404 教室	原・池田・ 新井
12月18日(火)	3・4	安保	生化学実験	フード 2年	理化学実験室	山下・山村・ 石井・眞部・原
12月20日(木)	2	原	ピアノⅡ	幼教 2年	音楽室	椎山・阿久根・ 増田
1月21日(月)	2	池田	保育相談支援	幼教 2年	1201 教室	関・阿久根・ 原・山下
1月23日(水)	1	重永	社会福祉概論	フード 2年	1302 教室	原・池田・ 坂田

幼教：幼児教育学科、フード：フードデザイン学科

平成 30 年度 教育と研究

令和元年 8 月 23 日 印刷

令和元年 9 月 2 日 発行

発 行 所 久留米信愛短期大学

〒839-8508 福岡県久留米市御井町 2278-1

T E L : 0942-43-4532

F A X : 0942-43-2531

印 刷 所 有限会社山口印刷所 〒830-0207 福岡県久留米市城島町城島 205-1

